松翁道話四編　卷之下

人の爲身をしまぬが佛なり樂をしたがる本はこれ鬼
青筋の額に角があらはるゝうちに妬のとがめ有るゆゑ
世の人の惡事見いだす心から眼球こそおほきなりけり
忠孝の人をもあしく言ふ口は大きに耳の根まで裂つゝ
ぱり〳〵と人を嚙んだり人の氣を痛める故に恐しき牙
何もかも攫まんとする欲心が手足の爪の長きにぞ知る
指を見よ貪欲瞋恚愚癡の三つ慈悲と智恵との二なき也
善人をよせ附けぬゆゑ體中生え出る毛まで針の樣なり
身勝手がたくましい故逞しい體を出來し惡事をぞする
虎の皮の褌をしたる姿こそ惡事千里をはしるしるしに
鬼の所作鬼の意をもちながら他所事に見る人は是邪氣

何と恐しいものな、此鬼の相は無いかな。只他所事に聞きなし言ひ流して仕まうては、何の益も無い事じや。我身に行ふ所と、意に思ふ所とを、この鬼の相に引合して、身に立歸りて一色でも、此鬼の相が有らば、早う御療治なさりませ。若し御療治が遲いと、終には八萬四千の地獄めぐりせにやならぬ、恐しい事じや。

安達が原の謠に、「世渡る業こそ物憂けれ。あさましや、人界に生をうけながら、かゝる浮世に明し暮し、身を苦むる悲しさよ。（ワキ）不思議や、主の閨の内を、物の隙より能くみれば、濃血忽融滌し、臭穢は滿て膨脹し、膚膩ことゞく爛壞せり。人の死骸は數知らず、軒と等しく積置きたり。いか樣是は音に聞く、安達ヶ原の黑塚に、籠れる鬼の住家なり。」黑塚とは、私心の塊、此身は眞黑げな土の小高きものじや。

遙々と安達が原へ行かずとも心の内に鬼こもるなり

此鬼を成佛さす文言がござります。

見我身者發菩提心　我身は土の小く高きもの也
聞我名者斷惡修善　我名は虛空のかり名前じや
聽我說者得大智惠　天地の功德なる事を知の也

知ニ我身一者卽身成佛　本來成佛して居るのじや

鬼奴が我の無い事を合點したれば、執著も怨もない。夫で切に、「淺ましや恥しの我要やと、言ふ聲は、尙物凄じく夜嵐の音に立ち紛れて失せにけり。」此鬼は、何方へ失せにけるぞ、何處もいき所はない、我を殺せば本の人じや。

草も木もわが大君の國なればいづれか鬼の住家なるらん

我大君の國とは、本來の淸淨心の事、則天じや。無量壽佛、神道では天照太神樣、銘々ども の鼻と口とから、御往來なされてござる。此大君の國を、己が〳〵と言うて住家にする。聖德太子樣が、片岡山の非人に遣さるゝ歌に、

しなてるや片岡山の飯にうゑてふせる旅人あはれ親無し

非人の返歌に、

いかるがや富の小河のたえばこそ我大君の御名は忘れめ

此非人は達磨大師で有たつと言ふことじや。太子の御歌のしなてるやは、死で居るや、飯に飢て臥て居る、生死往來の人ならば、本來の親の名を知らぬ人かと、御尋ねなされたれば、非人の返歌に、いかるがや、如何あるや、本來法性の流れ絕ねばこそ、我心身則大君なるが、此方は大君の御名は如何有るやと言ふことじや。聖德太子樣と達磨大師の御會輔、斯も有りさうなものじや。此御歌二首が止觀とやらで、甚深微妙の味有つて、此樣な安い事じやないけれど、我大君の國が入用故、ツヒ此樣に申して居ります　此大君の國さへ知れば、鬼奴が其身其儘姿を改めず、卽身成佛じや。

黑坊も暗の夜は通力自在なれど、月夜の晩は黑坊が迷子になる。銘々どもが善い人の側へ出ると、場うてがして狼狽する。

眞實の目が明かぬから狼狽て我と我が見る憂い目辛い目

或富家の旦那殿六十許じやが、節季々々に店へ出て不足錢を拂ひ、仕かけ錢を拂ひ、銀には欠を渡し、或は相對の濟んだものを直切り、何時の節季も〳〵、橫鉢卷で大喧嘩じや、大抵しんどい仕事じやない。其家の甥子二十才許の人が尋ねてござる、「何と其樣に節季々々に御腹立てられますが、何ぞ利詰のあることでございますか。」老人聞いて「隨分利詰の有ることじや。此樣にすればこそ、一節季にマア一貫目から二十兩程宛も違ふ事じや、恐い物じやて。」甥子が「夫は怪しからぬ事でございますが、凡何十年程其樣に御世話なされますぞ。」「されば二十四五から世帶受取つて、今年六十一、マア三十四五年のことじや。」甥子が「左樣ならば、一年百兩

宛と見て三十年で、凡三千兩じやが、貴殿の御代になつて、凡二百貫目餘の伸銀がなければならぬ。貴殿の親御樣より御請取なされた御家督とは、何程殖えてござります。」「否々親どもより請取つた時とは、大きに減して居る。」蜘子が「左樣ならば、何の役に立たぬ御世話じや。畢竟渡す可きを押へて渡さぬ樣にして、其癖伸銀もなく、縱令又其銀が丸で伸びて有つてからが、畢竟人の得心せぬものじや、どうも仕樣の無い銀じや。一生人に惡く思はれ、憎まれ死に死んで仕まうて、延した銀も此骸も、跡に殘して置くのじやが、惡名と罪科と斗、背たら負うて、マアどつちへ往かうと思うてござりますぞ。」老人聞いて「如何樣なう、とんと其所に氣が附かなんだ」というて得心なされた。其後はふつふつ節季の御世話が止んだと言ふことじや。此樣に早う助かつたのがある。人間も五十過ぐると大が遠慮して、大體では言うて呉れぬ。夫故思はずしらず自慢も言ふ。我がすることは善いく〳〵と思うて、うからく〳〵地獄の手傳して居るものじや、大體心得ねばならぬ。此隱居も蜘子が無我な人であつた故、助けられたのじや。又能う合點して見たがよい。何でもないことじや、些許の黑妨に迷ふのじや。

雲晴れてのちの光とおもふなよ元より空に有あけの月

衆生本來成佛なるが故じや。如何に物忘れするとて、肝心の死ぬことを忘れてゐる。折には死ぬることも、些算用に入れて見たがよい。

紀州の岡田に、桑原角右衞門殿と言ふがある。此床の掛物、一休和尙の正筆、大字で一行物。

一なんでもない事く〳〵　一休宗順筆　此何でもないことが、合點の行にくい所じや。正月に旦那殿が錢一貫出して、「今夜は夜寐講じや、此錢で寶引でもせよ」と渡さるゝ。丁稚衆や女子衆が總總分けて取り、夜がな夜つぴと勝つたの負けたのと、血眼になつて爭じや。翌朝旦那どの、「夕の錢皆揃へて持つて來い。」子供衆が、「誰それは何程勝つた、何ほ負けました。」旦那殿が、「よしよし、一貫揃うたら宜い」と錢を受取りて、戸棚へ入れ、錠前ぴんと下して仕まうた。總々が汗水に成つて勝つたり負けたり、何でもないことく〳〵。

錢銀は御上の物、持つては行かれぬ。三拾間口五拾間口も持つては行かれぬ。身體は土なり、心は天なり、皆借物を我が物の樣に思うて、一生あたふたく〳〵、三百貫目も五百貫目も、天地の在物、世界の戸棚に入れて置くのじや、持つて行く事はならぬ。何でもないことく〳〵。さう思うて見れば、合ぬ仕事に浮々月日を送りて居るも、何でも無いことじや。

何を言ふも金の事じやく〳〵と、狼狽廻るも、又錢銀たんと出來して、どうも仕樣がないと言ふも、なんでもないことく〳〵。

さつぱりと埒の明たる世の中に埒を明けぬは迷なりけり

何方でも御病氣が平癒すると元の御腹、何を喰うても中らぬ、何でもないこと。六祖偈、是眞常寂滅樂涅槃相復如」是と。此前四條の道場の芝居で、場を買うて見て居る人が小便しに立つた、其あとへ一本さした人が座つて居る。小便に行た人がもどつて、「こゝは己が錢出して置いた所じや退け」と言ふ、「些の間見せい」と言ふ、「否ならぬ」と言うてもやゝいふ、近所から「喧しい」と言ふ、東西々々言ふ中に俄に大夕立じや。何が、むしろ屋根で雨は漏る、大雷でぐわらゝゝと言ふ、總々が立噪ぎ、上を下へと狼狽廻る、場買うた者も、場を買ぬ者も、ぐわらぐわらぴしやりになつて居る。其時男の吃驚も、女の吃驚も、貧乏人の吃驚も、金持の吃驚も、別々に吃驚はせぬ、吃驚斗じや。喧嘩した衆がみな中よしになつて、「もつと此方寄つてござらしやれ」と互に助合うて居る、甘いものじや。其後雨も上り雷も外へ行た。左樣すると狂言が始まる、もいやくやゝも夫なりに治つた。能うしたものじや。「何でも世界中が戰々兢兢さへして居ると小言は無い」と、其時芝居が大悟したと言ふ事じや。

地藏樣が錫杖をがらゝゝと振しやると、六道の衆生が成佛する。六道と言ふは思慮、分別、思案、才覺、邪智、妄念、皆雇人じや、本心の日雇働して居る衆人じや。此衆は幽な靈じや、幽靈じや。その幽靈が三人前の五人前のと働く故、あれを持出し、是をかたげ廻りて、朝から晩まで幾生もゝ、生れ代り死に代りしてまぜかへす所を、地藏菩薩哀みて、錫杖をがらゝゝと鳴し給へば、迷の幽靈が、がらゝゝ斗になる。錫杖とは、衆生の事じや、今のがらゝゝはどれが鳴つたやら知れぬ、皆一統のがらゝゝじや。此時一切平等のがらゝゝなることを、錫杖が始めて悟道したと言ふ事じや

眞實の目が覺めたれば世の中の憂きも辛きもみな嘘の川

夜の八つ時分になると、江戸の者も長崎の者も、大名も、太郎冠者も、御姫樣も、鉢坊主も、ごちやゝゝに成つて、虛空の樂屋へ這入て仕まうた、內で何して居るやら知つた者がない。不思議とも不可思議とも知らぬが佛じや。夜が明けると狂言の始り、其日も一日何やら見えぬとて、うろゝゝゝ尋廻り、腹を立るやら、泣くやら、笑ふやら、悅んだり、樂んだり、何を言ふも金の事じやと、日がな一日、もいやくして、又夜の八つ時分には、虛空の樂屋へ我一にくすゝと這入て仕まふ。何でもない事じや。夫でも夢見るは何うしたものじや。未だ迷うて居る。夫は晝の狂言の殘りじや、夜通に芝居する顏見世の樣なものじや。其代に晝夫程虛空へ樂屋入せにやならぬ。子供が饅頭一つ持つて、「岩さん是で飯事せんか」と、向の子に見せて、直に

口へ捩込み、もう仕まひ事〳〵と手を拍く。ソコデ向の子が「饅頭おこせ〳〵」と泣出す。腹の中に入れて仕まうた饅頭に執著して、迷ふは夢見て居る樣なものじや。夢見て居るは樂屋の小口で狂言して居るのじや。是は是じやが、此饅頭持つて泣かしに歩行く者がある、惡い癖じや。或は三十間口五十間口、或は千貫目二千貫目も、唯獨口へ捩込んで、もう仕まひ事〳〵してゐるゆゑ、皆泣出すのじや。錢銀持つても些とづつ飯事して遣らんと、幽靈が取附ぞえ、恐いものじや。此飯事と言ふは、一家親類知音近附までに誠を盡すのじや。小人に錢金たんと持すと、世界の邪魔斗する、賣〻買〻世界の咽〻して泣すことが多い。じやによつて幽靈が蔭裏から取附いて、終には家屋しき屋財家財正直にもう仕まひこと〳〵して仕まふ。人は腹の中がこと〳〵にさへなつたら助かつた物じや。阿彌陀如來の兩手を廣げてござるのは、もう仕まひ事仕まひ事を知らしてござるのじや。此時虛空が始て大悟した。何と大悟した。「此阿彌陀佛の外に一念でもそへたらば、南無阿彌陀佛にならぬ」と大悟した。此阿彌陀佛は男か女か。親御樣の名は何と言ふぞ。兄弟は無いか。無い筈じや。此天の御名じや。若い時の御名が法藏比丘と言うて、何やかたらんと思慮分別があつた故、佛とは言はぬ、比丘というた。法藏とは此目に見えぬ虛空から、色々樣々の物が出る故、法の藏といふことじや。親子兄弟夫婦を始、森羅萬象一切萬物皆法藏から出た代物じや。それ故皆是阿彌陀佛、飯を喰ふのも南無阿彌陀佛、腹の痛いも南無阿彌陀佛、金儲けたも南無阿彌陀佛、損したのも南無阿彌陀佛、痛いも痒いも、南無阿彌陀佛、天地一ぱいの南無阿彌陀佛を、一人前の南無阿彌陀佛にする故、祖師方が誘法雜行と御叱りなさるのじや。色々樣々の塀へ切を取つて、大きな南無阿彌陀佛にして遣りたさに、汗水になつて御世話なさる。

阿彌陀佛と言ふより外は津の國の難波の事もあしかりぬべし
蘆斗刈りて取る。蘆は其儘。蘆刈と言ふは、要らぬ惡人に爲とむなさ、地獄へ落すまい爲斗じや。
唱ふればほとけも我もなかりけり南無阿彌陀佛聲ばかりして
天地一杯の南無阿彌陀佛の御腹の中で、南無阿彌陀佛が、南無阿彌陀佛と言うてござるのじや。親に不孝な阿彌陀樣はないぞえ。一念でも惡いこと思附いたら、阿彌陀樣を地獄へ突落すのじや、どうよくなものじやぞえ。

又法華宗では一天四海皆歸妙法、天は妙也地は法也、心は妙なり骸は法なり。妙一ツの働きで、法は形にあらはるゝ、麥となり、米となり、山吹となり、さくらとなり、春雨の別きてそれとは降らねども受くる草木は己がさまゞ〳〵

欲深い者や横著者も、己がさま〴〵形に表はして直説法してゐる。天地の四時行はれ百物成るの姿をば、南無妙法蓮華經といふ。銘々どもは凡夫故、色々樣々に理屈言うて、一つ〳〵樣子が大きに變つた樣に思うてゐるけれど、佛さまの耳へは、何を言ふのも、南無妙法蓮華經、南無妙法蓮華經、と聞いてござる。思邪なき故、一切時中法華の轉ずるのじや。丁度銘々どもが還城樂か太平樂の樂見た樣なもので、どうも仕樣はない。善いのやら、惡いのやら、何所らが善いのじややら、何所らが惡いのやら、夫なら面白うないでもなく、又格別面白いといふこともない。思案分別せうにもどうも仕樣がない。唯其儘でぶう〳〵どん〳〵と見る斗じや。定めて一つ〳〵理屈の有ることであらうけれど、唯こちの目には、ぶう〳〵どん〳〵と動くばつかりじや。其時は何じや。虚空か、天か、ぶう〳〵か、どん〳〵か、是則法華の轉ずるといふのじや。大事の所じや。何の彼のものいふ程直打が下る、止々不レ可レ説我法妙難レ言。八千餘卷の終に、一字も説ず、何にも言うたのじやない。本の通じやと言うてござる。萬年竹拭へばもとの白地じや、此白地が知らせたいのじや。談義參りして御覽じませ。一言言うては南無妙法蓮華經、何のかの言うては南無妙法蓮華經、皆妙から出て法に入り、法を勤めては妙に入る、是則妙法の轉ずるのじや。此樣にものいふも妙の出たり這入つたりするので、鵜が

水を潛る樣なものじや。生死は離れ切つてゐる物故、一天四海皆歸妙法、たつた一つの仕業、三千世界始つてから、ずつと先の天地有らん限、南無妙法蓮華經樣たゞ御一人じや。失故順氣の善いのも南無妙法蓮華經、又惡いのも南無妙法蓮華經さまの御心一つ、暑いも寒いも南無妙法蓮華經。花を見るも扇を見るも南無妙法蓮華經、あんどを見るも茶わんをみるも南無妙法蓮華經。一天四海皆歸妙法の若退若出したまふ、眞實の御説法じや。我が了簡は微塵もない。夫を我が有ると思ふが迷じや。ちよつとでも我をこしらへて見たがよい、世界中が合點せぬ、一切萬物が合點せぬ。其證據が有る。御堂參する御人が、毎朝々々鳩に米撒てやる人がある。鳩が肩へ止つたり手へ止たりする。外の人が「何卒一疋捕まへて下され」といふ。ソコデ「心安いことじや」と言うて捕へんと思うて、米を撒き〳〵行けば、一疋も側あたりへ寄附かぬ。能うしたものじや、此方の腹の中に何ぞ出來ると、ちやんと向から見てゐる。我説法禽獸草木までも聽聞すると言ふものじや。人は知らぬけれど、鳩は能う知つてゐる、油斷はならぬ。鳩から見ては人は餘程とろい者じや、我心に我が出來てあるを知らずに居る。其筈じや、我斗になつて居る、我し塊じやさかい知らぬ。夫じやによつて一寸さきは暗の夜、恐しいことじや。何卒どなた樣も本心を知つて、此我を離るゝ道理を御工夫なさりませ。

松翁道話五編　卷之上

子曰、逝者如斯晝夜不捨。

諸行無常說法也。

世の中は何にたとへん朝ほらけ漕行く舟の跡のしらなみ

かりきりと思ふ間もなく目が覺めて乘合舟の夜半の起臥

有物がなくなれば、無物が出來る。天氣の好いが雨ふりとなり、この事を爲んと思ふ内に、彼ことが障となり、彼事を爲んと思ふ中に、思ひも寄らぬことが出來て來る。諸行無常は說法なり。この移り變る有樣を、何時までも變らぬものと思うてゐる故、遽に算用が間違ひ、「此筈ではないが〳〵」と狼狽廻る。誰と約束して此筈ではないのじや。娘の子が子持になるかと思へば、もう婆々になつてゐる。坊樣兄樣言うた子が、祖父は山へ柴刈に行く樣な尻附になり、我身世にふるながめせしまに、變化するのが天地の本業じや。寐て居る間もまけはない。此轉變して定まらぬことを覺悟すれば、迷はない筈じや。迷と言ふ字は米に辵かけた字なれば、米が

走り歩くのじや。夫で腹の大きな衆の仕事で、腹の小さいものに格別迷はないものじや。そ證據にや、美しい美人が私を見て迷うて下されと頼みもせず、又金銀財寶が私を欲がつて隨分蓄へて下されと言ひもせず、雪月花紅葉が私を眺めて樂めともいひ附けず、茶碗皿鉢がわつてサア腹立てて喚かしやれとも言はず、火が私を撮んで火傷さつしやれとも言はず、酒が私を飲んでぐたついた跡で喧嘩せいとも言はぬ。萬境に答はない、其境界を取込んで世話やくゆゑ、雇人に煽動られて居るが迷じや。是で雇人の身にならぬことを合點したがよい。そんなら境界の雇人は役に立たぬものかと思ふが、隨分なければならぬものじや。例へば御大名の行列に、沓籠持も、鎗持もなければならず、音請するに、土持も、音頭取もなければならぬものじや。けれども其沓籠持や、音頭とりの差配をうけるゆゑ、大勢がうろつき出す樣なものじや。神佛の教はこゝじや。我が一念の源に立かへり、天地の本業を失はざる樣との教じや。先此天業の古今來變らざる事を考へて御覽じませ。浮雲日月を覆へども日月は暫時も止らず、水は低きに流れ方圓に從ひ、火は穢不淨を厭はず燥ける樣を燒く、風は無心にして少の隙間よりも出入して天地の氣を通じ、花紅葉は人なき山奥も時を違へず、鳥は曉を告げ、犬は夜を守る、人は孝弟忠信のみ、是則天の本業にして、暫時も止ることはならぬ。優曇花は朝開いて、日の中は花ざかり、晩にしぼむ。世界の經卷、夜の八つ時分には、世界中が唯一軸の御經となる、けうといものじや。人間の息佛、たゞスウ〳〵斗、しばらくも止まらぬ。

京都今宮の祭、是を休ひ祭といふ。此世に暫く休ひ祭じや。毎年三月十日頃、上加茂より六七十許の老人が色々の面を著て、歌を謠うて踊り行く。其歌の文句に、

此方の椿が美事に咲いた、翌日ない花よ、借りたる小袖を茨に掛けな、明日ない花よ、借りたる小袖は、親から預の此身じや程に、無理なことして茨に掛けな

と言ふことじやさうな。明日ない花よ唯卽今のスウ〳〵斗、此一念が大事じや、善いことすれば心よく、惡いこと思へば心あしく、極樂の道法十萬億土も此一念より始り、去此不遠も此一念より始る。毒氣は我より出でて我身を亡す。曾子曰く、爾より出でたるものは爾に歸るなり。善惡の其報あること影の形に添ふ如く、心に善を好めば善人とよぶ、惡を好めば惡人とよぶ。十日之視る所、直に天地の賞罰じや。天地は善のみにして惡なし。天道人を殺さずとは、不善を善に歸すまでのことじや。さるによつて天地より大いなる心もなく、又心より大いなる天地もなし。我一念曲るときは天地曲り、一念直なるときは天地直なり。

御堂の前の人形屋に張拔の虎が首振つてゐる。「如何なるか是汝が心」と問ふに、虎は知らんか

して首振つてゐる。又「如何なるか是汝が心」内から「喧しいわい」と叱つたら、虎が「あの人は氣違じやさうな、構はしやんな」といふ。夫でも又「いかなるか是汝が心。」虎もどうも返答が出來なんだやら、「天地に一ぱい」といつた。「虎は一日に千里を行くといふ。汝其棚に何時の頃より上りゐるや。」虎の曰く、「汝知らずや、我晝夜に幾萬里あゆむことを知らず。」「汝が身と心と別か不別か。」虎の曰く、「天地の間に生をうけ、天地の間に養はれ、天地の間に行ひながら、何れの方に向つて口を開かん。人ありて我を叩かば、我張ほてなればッとつぶれて仕まふなり。其ときは天地と共に默くなり。天地の靈と我心と一如にして隔なき故、身心も不二なることを會得すべし。汝は有情なるが故に、我と異なる樣に思へども、汝怒る時も身心共に怒り、悅ぶときも身心共に悅び、眠る時も身心共に眠り、覺めるときも身心ともに覺める、憎む時も身心ともに憎み、愛するときも身心ともに愛する。物に感じて涙溢す時も、心に感じて目に涙を溢す、驚きて汗するときも、心に驚きて身に汗する、心に傲あれば身賤しく、身奢れば心貧しく、是則身心二つなきの道、會するやく、此身心不二の實體、能見れば萬境に咎はない、汝だ妄想を好むことなかれ」と、張ほての虎に說破せられて、仕樣事なしにこそ〳〵と逃げた。それから御堂樣の内へ這入つたれば、松の木がある。これ幸と松の木にむかひ、「いかなるか是松の佛性。」松の木が曰く、「春から松のみどりが三寸程伸びた。御前何樣じや。」「私は春から遊んだ故、三百目程食ひ込んだ。」「ソリヤ大きな野ら松じや、御用心なされませ」と、松の木にたしなまされた。

松に上る蔦蔓も、松といふ足場がなけりや上られぬ。夫を己が力で上つた樣に思うて居る。後には松を締絡んで、つい枯して仕まふ。是よき問ものと、蔦に向ひ、「汝松の木なくて上らるゝや否や」蔦の曰く、「松の木なくば地を這ふばかりじやが、是を思へば、世間の人が私に辭儀して下るは、雨露の惠や地の御恩、主人の親のといふ足場があればこそ。それを我力のやうに思うて居る故、何言はしやつても尻に聞かし、大概なことは私が呑込んでをりますほどに、餘御世話の燒過じやといふやうな顏して、ぴん〳〵〳〵跳廻り、愛想づかし言うてゐるは、大恩の松の木を締枯して居るのじやぞえ。御得意方の御蔭で滯なう今日渡世すれば、是も我器量のやうに思うてゐる。些と結構な得意と見ると、表向は美しう見せて、心底は肋から爪が生えて有る。松の木が倒たら我身も共に地に附くことを知らぬ、難儀なものじや」と、蔦が自身のことを言ふかと思へば、何樣やらこつちが嬲られて居るやうな。夫でせうことなしに、「サァうかうかのぼるも、實は大てい氣苦勞なものでない」と、言うて別れた。

裏門の古道具屋店に金箱の飾がたんと積んである。然も名前が確り書いてある。又軒の下には藏の戸まへ、手水鉢、是は初から賣る積でこしらへたのでもあるまい。又此身體の次第々々に消えて行くことも構はず、千年も萬年も生る積か、氣を張つて赤銅樋に、石のはしりも、身體若死頓死頓病、其外あらゆる諸式諸道具、皆親方を取失ひ、此店へ缺落して來たと見ゆる。此世に住むものは皆如是かと、回向をすれば、棚の隅なる阿彌陀如來が涙をはら〳〵と流して、

一、切世界諸式諸道具が、皆名に迷ひ形に迷うて、日々家内の暮し方に算用もなく、一年に一度使ふか使はぬ、諸道具衣類に心を盡し、旦那殿が反り返りて歩行くやうになると、御家樣も娘御も、朝から晩まで衣類の咄と、芝居話斗、裏の隱居が、おれが側へは緋縮緬や天鵞絨の頸玉した、狗や猫の來ぬ樣にして下され、と言はれたれば、それから家内がしばらく木綿の襟袖口になつた。夫迄は總々が、好い物さへ著たら御禮じやとおもうてゐる。お長東を向いて御禮申しや。尻叩かれては御禮する。佛壇へは御禮なしで、芝居遊山に御禮申すじや。損料がりで御禮申すじや。二才の腰下三拾目、丁稚の鮓代壹貫五百、お長北を向いて御禮申しや、とつけもない所へ御禮申してゐる。さうなると家内の諸道具、藏の内から相談して、中でもよい道具から暇とりかける。質屋へ行く間はまだ暇取りきらぬ故、毎日々々飯代が行く。夫が濟まねば爰へは出られぬ。其方は此諸道具が駈落して來た樣に思うてゐる。中々左樣した事じやない、皆身分相應に立金せにや爰へは出ぬ。私も此見世へ來て三年になるけれど、いまだ何國の淨土に安心することやら知らぬ。扨々心もとないことじや」と、阿彌陀如來道具屋店の無常說法、哀なことじや。古手屋の店を見れば、生はぎ死はぎ無常說法、「寺方にある幡幢ばんは身體の死んだの、古手屋店のは多く、ぴち〳〵達者で、袖口からちら〳〵手の出るやうな著物がつつてある。私は身體の死んだといふ御說法、御用心々々々」と勸化してござる。

聽く時はやれ尊やと悅べど實なければやがて失せけり

病人の藥悅するやうなもので、醫者殿の變目には、腹の中が珍しい故、減多に悅べど、根が大病人じやによつて、一兩日すると又本の御腹、何喰うても味がない、皆天地の御馳走を食ひ過したのじや、兎角御腹のことじや。腹の中に嬉しいこと悲しい事、面白いこと、腹の立つこと、よその事まで取込んで、腹の狂言。此前道頓堀で見せた、天の岩戸腹、子持腹、龜腹、立つ浪、女浪、男浪の打わけ、皆御腹のうちの濟。誰それが何と言うた、どうも此ことが濟まぬ、夜が明たら往つてどう言うて、斯ういうてと、夜が寐られぬ。向の人は何にも知らず能う寐てゐる。こつちが先へ地獄へ落ちてゐる。御腹の中の暗闇　天の岩戸腹、御燈明ともさにならぬ。

それから腹のたつ浪、女浪、男浪の打わけ、なにもかも取込んで子持腹、どこぞで算用せにやならぬ。

何一つ止るものもない中にたゞ苦しみを留めて苦しむ

隨分御腹の中の流れ灌頂、弔が大事じや。川の流で鍋洗へば鍋ずみが眞黑に流れる。暫見てゐる中に、色々の模樣が出來る樣なれど、流れて仕まへばもとの清水、少しも滯はない。所所にぼち〳〵附いてある鍋墨の固も、どこぞでは流れ灌頂。

子川のほとりに立つて曰く、逝く者はかくのごときか晝夜を捨ず。少しも滯はない。池の水は滯があるゆゑ呑にくい、泥水は御腹に滯りて惡い、泥は沈んでえう浮かまぬ、奈落の底へ沈んで仕まふ。腹の中の間違じや。其間違を世界へ出して、また間違はす。大抵雖儀なものじやない。

大學に國を治るとは、此腹のなかの療治じや。此體が治ると國も天下も治る。皆腹の中の吟味がたらぬ。仕よいことせずに、たゞ仕にくいことして苦しむ。隙にあかして奢を思つき、錢の減ることばかりに骨折つてゐる。銘々堪性のないと言ふことを風聽して居るのじや。我分限をえう覺悟せぬ故、奢が止められぬ。奢は錢銀つかふばかりじやない、唯遊んでゐるが奢の天上じや。赤子にも家業がある、乳呑んだりばゝたれたり泣いたりするが商賣じや。あれが乳も呑まずばゝもせにや大騒動じや。御大名樣方行列正して御通りなさるも、天道樣へ御勤じや。あなた方がじつと重になつて下さればこそ、銘々共の樣な輕いものまでが、皆散らぬ。卦算がなけりや何所へ吹ちらうやら知れぬ。スリヤあなた方の御勤、大抵御苦勞なものじやない。何國へ御出でなされても、日限の外一日も滯留がならぬ。何ほ御一家がたでも、泊りがけに遊びに行くといふやうなことはならぬ。皆下々への重になつてござるのじや。大體ありがたいことじやない。銘々どもは氣さんじ、二日三日滯留せうが、大道に小便せうが、惡い事さへせねば御構ひはない。其外山へ行うが川へ這入らうが、芝居へ行かうが御免じや。餘結構すぎる故、まだ此上に、思ふやうにおごられぬと言うて小言いふのじや。何の樣にしたとて、町人は町人百姓は百姓、羽二重織物などは、皆上々樣御大名樣がたの御召なさるものじや。夫を木綿の襠袍著る物の袖口や襟先に、些と斗御大名樣方の眞似したとて、夫が何に成ることで。法會立に宿かり貝というて賣つてゐる。色々の貝殼が動き歩いてゐる。是がどうしたものなれば、海邊の磯ばたで、蟹の子や海老の子が貝がらの内へ出這入して遊び、終には其貝がらが我生附の樣におもひなれて、それなりに成人したものじや。ソコデその貝殼が出られぬ。夫故貝

殼の内から大きな手足出して引ずりあるく。田螺の、ばいの、溝貝のと、色々様々の貝類が動くけれど、中の主は海老や蟹じや。それで宿かり貝といふ。どこへ行くにもその貝殼を引ずりあるく。大抵見とむないものじやない。これと同じ様なもので、奢のつくも、驕れると我生つきの様に覺えて止められぬ。夫ゆゑ色々さまゞくのものを引ずりあるく。或は將棋盤ひきずつたり、妾ひきずつたり、千石ぶね引ずつたり、海山ひきずつたり、子曰く引きずり歩いたり、龍宮で頭の上に、鯛や、鱧や、鰒や、鮪や、蛤や、鰡、鰻、其外色々魚類貝類、みな頭の上に戴いてゐる。皆腹の中の通りの看板じや。龍宮とは腹の中のこと。海士の諺に、「三十丈の玉塔にかの玉を籠置て。」かの玉は本心の靈明、天の御中主じや。皆めい〳〵所持して居りますけれど、ぐるりに悪い衆がゐるじや。悪龍並み居たり、其他悪魚鰐の口、恐いものがある。皆私心の異名じや、己が〳〵殿じや。此衆達が身の分限を得て覺悟せぬ故、一貫目の身體は十貫目の身體を見て咽かわかし、十貫目の人は五十貫目を咽渴かし、百貫目は千貫目を咽かわかし、皆是名の爲、利の爲の奢り、少しでも好い物は、己がものと名が附たい、名利を貪り色々の望ごとで、腹の中が押合じや。

我にある寶を知らぬ愚さに世界の物を欲しがりぞする

山が欲しい、海が欲しい、家が欲しい、釜が欲しい、衣類が欲しい、譽られたいと、明ても暮ても欲しい惜しいに惱み苦む。縱令望の海山、家藏金銀衣類諸道具手に入れたとて、水の月を掬ひ取つて、我物と思うてゐると同じ事じや。此骸からして借物じや。指一本髪一筋も持つて行くことならぬ。たゞ此スウ〳〵息斗り、是も何時ぞは引つたくられて仕まふけれど、先今日では、此スウ〳〵より外に便はない。丁ど鞴吹く様なもので、此スウ〳〵の出這入する間に、嬉しいの哀しいのと思うてゐる。虛空の鳴音斗が、「金儲けたヤレ嬉しや。此度は損したヤレ哀しや。」波のうつ様なもので、どつと打つてはずつと引き〳〵、いつでも仕まひは、からつぽ虛空說法。伊賀の殿樣十二月の御辭世に、

伊賀の米喰つたほどたれた此骸損德なしに年の暮かな

いつでも損德なしじやけれど、思つけた癖で、きつと損德の有るやうにおもうてゐる。元來苦樂順逆ともに無いものじや。皆銘々の心から、苦樂順逆ともに工みいだすものじや。華嚴に心は巧みなる繪師の如しと言うてある。例へば碁を一番打たんと一念氣ざせば、先碁盤碁石扨相手が出來る。始碁盤の上には、何にもない所へ、碁石を一つ置き二つ置き、夫から段々苦樂の種を蒔いて行く。扨中程になると、我が仕て置いた石が便になつたと言うては悅び、また仕て置

いたことが邪魔になると言うてはかなしみ、イヤ切るの續ぐのと言うて氣を揉んで、やう〳〵一番打仕まうて、勝つたと言うて嬉しく思ひ、敗けたと言うて悲しく思うたり、碁盤も碁石も片附けて、あげくに相手も去んで仕まうた跡で、たつた一人何にもない所で、さつきのときアノ石を斯うすれば善かつたに、ア、すれば善いのにと、首傾けたり頷いたり、たつた一人からだもがいてゐる。碁を打たぬ人は其苦もなければ、又樂もない。苦も又樂も、有り樣の所は役に立たぬものじや。

松翁道話五編　卷之中

節季に錢が足らぬというて苦むは、平生の不心得じや。元來清淨な心で一點の曇もない、所へ一錢借り二錢借り段々借が殖えて、節季にくるしむのじや。此苦をせまいと思へば、平生から心得て、現銀買にして暮せば、節季に何の苦もない。首縊るも身投げるも、獄門も磔も餘所から來るものじやない、皆我心から巧出したものじや。親は辛度いめして、世間の誹も構はず、どうぞ夥多にして息子に遣うとする。息子は厭がりて、餘所へ持つて行つて捨てうとする。入間川の狂言に、「さう思うても下りませねば、却つて迷惑にも存じませぬ。」何のことじややら譯けが知れぬ。けれども能う算用して見れば、矢張損德なしの年の暮じや。皆眞實の寶あることを知らぬ故、世界の物を欲しがりぞする。此スウ〳〵が合點が行かぬ。毎年霜月八日鞴祭、稻荷大明神御託宣に、

千早ふるかみのやしろは我身にて出で入る息は外宮內宮
身は鞴出で入る息は風なれや打割りみれば風も火もなし

弘法大師の歌に、

　此程は後世の勤もせざりけり阿吽の二字の有るに任せて

此阿吽のスウ〳〵から、高野山も吹出したものじや。奈良の大佛樣も、刀脇差も、錠前も、金棒も、手錠も、皆鞴のスウ〳〵から吹出したものじや。天地の阿吽、天地の有らん限のスウスウじや。阿字は外宮火の神、吽は内宮水の神樣。日々に三度づつ御神樂が上る。飯を焚くも汁を焚くも、外宮内宮和合なされて、腹の中へ御參宮拔參はならぬ法度じや。主人にも親にも相對なしは、神樣が御請なさらぬ。腹のなかが心わるい。茶を飲めど外宮斗で格別熱いと、内宮の水の神樣和合なされて、御腹の中を宮廻り。其外米を洗ふには、水の神さまが何遍も〳〵洗ひ清めて、火の神樣が焚上げて、八百萬の神達神樂を奏し、横著ものの此腹の中へ、人身御供に上らせらるゝ。夫を何とも思はず、むざ〳〵食ひ過す故、鞴が損じて難儀する筈じや。二日酔で氣色の悪いは、皆罰の當つたのじや。去によつて口の出し入れが大事じや。病は口より入り、災は口より出る。善導大師は口から佛を一日に三體づつ吹出し給ふと言ふ事じや。空也上人は六體づつ佛を吹出し給ふといふ。皆我無しの南無阿彌陀佛じや。我のない言葉は柔軟にして和な、言葉に花ふらすといふ。凡夫の息は熱い、腹の立つ時火焰を吹出す、夫で火花を散らすと言ふ。大抵火の用心の悪いことじやない。其火焰の中に地獄、餓鬼、畜生を吹出す、恐いものじや。皆御腹の中の不掃除からじや。戰々兢々日々に新にせぬのじや。宗旨々々によつて彌陀を立つるも有り、釋迦を立つるも有るけれど、我を立つる宗旨は昔からない。天命之謂性率性之謂道修道之謂教。此天命の性に率ふとは何ぞ。其樣なことは今どきは、末法萬年悪世の衆生じやによつて、全體及ばぬことと辭儀してゐる。此悪世の衆生とは誰がことじや。法華經に、彼見久遠猶今日天地も昔の天地、日月も昔の日月、水火も昔の水火、春夏秋冬も昔の春夏秋冬に何にも變つた事はない。たゞ人々の分別ばかりが、末法悪世じやといふ事じや。その分別さへ取直してやれば我はない。我がなければ末法悪世はいらぬ。過去も未來も唯今ばかり、この唯今の一念で、天地と共に移り行く、その時々の心ばかりで、見ること聞く事やしなひ草、御腹の中の御養生、隨分毒なもの食はぬやう、竹の子の走り三本で五百五十、赤子の小指ほどなもの、時ならざるを食はず、茄子の走り十で一貫、すつきり當てられて、節季に御腹が痛む、八百屋と大喧嘩。その筈じや、まだ時節も來ぬものを、端から煽動られて、了簡違して出來たものを喰ふゆゑあたる。腹の中も了簡ちがひするのじや。温順しい息子でも多く端から煽動て、舞上らして仕まふやうなものじや。みな天地の季候を、人心で奪ひ取つた

ものゆゑ中らにやならぬ。なんでも一切ものの安い時が味い天上、天地の御氣に叶うて有るゆゑ、中る氣遣氣がない。なんでも初物さへ食や、御祈禱にもなるやうに思うてゐる。世間に初物喰ふと七十五日生延びるといふことがある、一年四季の一候が七十二日じや。その氣の物を取越して食へば、いま死でも七十四日生延びたといふ心じや。ソリヤ生のびたのじやない、未來を内借したのじや。

ある物堅い侍の御話に、「手前どもは甚だ困窮にござる故、來年の物成の中を今年から借越して、年中景物喰うてゐます」というてござつた。是等は大抵御長命でござらにやならぬ。世間によい顔して借錢のある衆中は、五年も十年も取越して、初物喰うてゐるのじや。

法事などにも、冬瓜の走り一つが三百五十、茄子ほど斗無い物引きむしつて、可愛さうに、皆赤子を喰ふのじや。小芋一升八百文、松茸の走り一貫五百、三百五十の冬瓜五つで足らぬ、十で三貫五百文、皆當られて節季に苦しむ、阿房なことじや。此節一番の冬瓜が八十じや。なんでも一ぺん頭打つて見にや目が覺ぬ。じやによつて、一文でも直の高いもの遣うて、人の膽潰したのが法事じやと思うてゐる。今日の佛は華美ずきで有つたなどと、佛になつて何の發出が要るもので。すつきり自慢と贅と景物比に、子孫の物までとり越して喰うて仕まふ。現在のもの食足らで、末來のものまで食盡すゆゑ、末で食物が足らぬ、饑じいものでござります。「何卒御報謝戴かして下さりませ。」この様な衆を作出す在所とて別にない、みな景物を取越した衆じや。此様なことにならうかと、佛壇から泣いてござるに、勿體ない事じやぞえ。

追善に伽羅を焚くより竈の下けむりたやすな煙たやすな

此竈の下の煙絶さぬ様にはどうするがよいぞ。兎角我子を善人にするのじや。我子が善人にならぬと家が潰れる。桐の木は曲節の多いものなれど、竹藪の中に植れば、周圍の竹にそゝなかされて、眞直に成人する。是を乘物の棒にする。友達を吟味せにやならぬ。

鶯の附親に、金三兩の五兩のと出して預けるけれど、寺屋の御師匠様が、ちつと叱らしやるとすねて行かぬ。「何としたのじや。」「御師匠様に叱られた。」「行くな〳〵、錢出して預けて置くのに、小澤山さうにしやる、行くな〳〵。」ソコデ御師匠様が詫言にござる。此位の相場に成つては、獄道が殖える筈じや。

中仕の子に米を持ならはすに、始は一升か二升かを俵にして、持遊にさして置くと、精出して肩上まはる。どうやらかうやら持歩くやうになると、それから四升六升八升一斗二斗と、段々子供の中から持ならはすと、とう〳〵三斗五斗と持つ様に通力を得る。役に立こと仕ならはし

て、役に立たぬことを止めにするのじや。のらくすると精出すとは、どちらが利詰が善いぞ。又淨瑠璃と謠とはどうじや、物讀すると學文とはどうぞ、本心知るは何の道理じや、孝行と不孝とは何方が善いぞと吟味して、物喰ふ代に、爲に善いこと仕ならふがよい。

或人が金鷄鳥を能く育つると言ふ話に、金鷄は子を孵すことを知らぬ、玉子を產捨じや。其玉子を鷄のしやうこくに溫めさす、生餌を一貫目程あてがうて置くと、戸屋を出ずして玉子を溫め、孵らすと言ふことじや。是に似寄つたことがある。去所に乳母を究めさつしやるに、給銀の外別に三十目宛心附して、「子を連れて滅多に遊に出ることならぬ。其代善い人の所へは隨分やる。人立の所や、賑やかな所へは行かぬ樣にして、また買食などは決してならぬ。この買食に癖附と、後には家藏賣つて買食するものじや。又甘い物食はすことならぬ。甘い物たんと喰た子は、今度苦口言うて人に憎まるゝ程に、氣を附けてたも」と、給銀の外に生餌を分與うてあたゝめさすのじや。扨七つ八つばかりになると、支配人か番頭の善い人を見立て、その人に引廻して貰ふ。是にも別に生餌分與うて、商賣のすじを仕込んで貰ふ。其位にして育つると、滅多なことは出來ぬものじや。

鼠でも仕込ば水汲んだり、通銜へて酒取りに行く。是等は萬更な事と思へど、仕込ばみん事勤める物じや。何ほ小人の子でも、善い事を仕込さへすりや、聖人君子に何にも變つたことはない。善人にしてさへ置いたら、何れ程困窮に遇うても、滅多に狼狽へず、本道の道筋へ切拔けて出るものじや。すりや、煙の絕える樣なことはせぬ。

一家親類の中に善人が一人あると、大きなたよりじや。大體世界のつよみじやない。直に天道へ御奉公じや。縱令百貫目二百貫目延して遣つたとて、道のない人といふものは、常に人並の樣なれど。まさか困窮するか、行き詰つたとき、どの樣なこと仕出さうも知れぬ。道がないと暗闇じやによつて、人の損じることも構やせぬ、とつけもない了簡を出すものじや。すりや道を敎へて遣らぬは、親の大きな無慈悲、子孫斷絕の基を仕込んでゐると言ふものじや。

昔天竺に山伏が有つた。人星の術を學んで、急に我が奇特を世上に顯さんと思ひ、「我が子の命數七日限」と言ひ觸した。けれども諸人合點せぬ。其後七日過ぎて我子を締殺し、相果しと云うて葬る。夫から諸人大きに驚き、「誠に奇代の修驗者なり」と、世擧つて大きに賞美したと言ふ事じやが、我が子を殺しても、我が名を顯したいとは、餘程愚癡の固じや。けれども銘々どもの樣なものは、今日の鼻の先の名利名聞に耽り、世界のものに我が名前が附けたい。夫故急に金が欲しうなり利欲に迷ひ、人の合點せぬものまで集めて我が物とする故、子孫の憂ひ災

難となり、終には子孫斷絶跡形もなく、皆山伏殿の同行衆じや。山猿が腰に繩切や、藤かづらの樣なものを卷きて、粟の黍の稗のといふ類を盗みに來る。精出して折つては腰の繩に挿み挿みして、歸らんとするけれど動かれぬ。なぜなれば折りは折つたけれど、折つたばかりで離れずにある、皆根が附いて有る故、動かれんのじや。所を人が見附けて棒で、叩き殺して仕まふ。是じやに依つて人の合點せぬものは、天の合點せぬのじや。皆根が附いて有る故、後で難儀する。猿智恵と言うて、たゞ物を欲しがる斗、物覺がない故、恥知らぬ、人間に毛が三筋足らぬ、慈悲と知恵と正直の三つがない。人と談話してゐるかと思へば、足で物を盗み、後に隱して逃げて行く。跡から能う見えて有るけれど、借錢して好い形したがるも、後から能う見えてあるを知らぬ。恥の掻き通しで、それで顔が赤い。鼻の先斗の利欲に迷うて、皆跡から難儀の廻るを知らぬ。

道ならぬ物を欲しがる山猿の心からとや淵に沈まん
縱令我存分に勝利を得たりとて、人の合點せぬ物集めて樂とす。
水の月望む心は猿猴のひだり延ぶれば右はみじかし
我すいた方へ手が延びる、博奕、米市、遊所、山事、片一方で難儀さしては、片一方で贅八百

言うてゐる。

瓢簞で鯰押へる嘘のかは押へて聞けば兎角ぬらくら

正味の所に味がない。ぬらくら仕まひで猿の人眞似、嘘の塊で皆眞實の勤らぬのじや。

京都のある絹屋に、家内大勢暮す内、半季居の飯焚のお杉どのというて、此眞實を勤めた人がある。家内中の不調法を自身一人して引うけてゐた人じや。「南京の鉢がわれてある、是は誰がわつたぞ。」お杉殿が出て、「ハイ此間私が不調法でわりました、御免されて下さりませ。」其後また重箱の緣が缺けてある。お杉殿が出て、「夫は私が缺きました。」又旦那殿の衣服に油が被つてある、「たれが此樣なことした。」お杉殿が出て、「私が麁相でござります、御了簡なされて下さりませ。」旦那殿が御家樣に「扨々此度の杉は甚い麁相ものじや。能ういひ附さつしやれ」と、旦那どの不機嫌な。ある時床の間の壁に疵が附いて有る。旦那どの大きに立腹して、誰かれと吟味すれど仕人がない。時にお杉殿罷出て、「私が不調法で疵を附けました、御免されて下さりませ。」旦那おほぎに腹立て、「其方は來てから間もないが、度々の不調法、麁相といふも程がある、此方には得使はぬ程に、勝手次第宿へ引け」といひ附らるゝうちに、七つ許の坊樣が出て、「床の壁は私が先度疵附けました、杉じやござりませぬ。」そうすると丁稚殿が出て、「先日の南京の鉢

は私がわりました、お杉殿じやござりませぬ。」男衆が出て、「重箱の縁は私が缺きました。」また腰元衆が出て、「此間旦那樣の御小袖の油は、私がかけました」と、皆銘々白狀して出る。家内中がお杉殿の善に化せられ、我が咎を我手に言うて出るやうになつた。此お杉殿が其内に八年勸めて、御家樣の病氣のときの介抱、晝夜暫も側を離れず、殘る所もなき勤力じや。御家樣の遺言で其飯焚のおすぎどのが、其家の御家樣にならしやつた。夫からそこの内が能う治り、此お杉殿の善に化せられ、一家中が睦じうなつて、今に其人がゐらるゝといふことじや。是等が眞實を勸める根強い奉公人といふものじや。皆我が心の通を天地へ手向山、朝から晩まで神のまに〳〵。女中方の縫物なさるに、針が歪むと縫目が歪む、針が大股に行くと、縫目も大股に行く。心に從ふ針なれば、針に從ふ糸か此通、なんと手利であらうがなと說法してゐる。心の通を、世界へ手向る。旦那殿が歪むと家内も歪む。しやべるに及ばず、自慢に及ばず、吾もの言ふ事ながらよく欲す、ものいふに及ばぬ。京都壬生の大念佛、無言の狂言、互にものはいはぬけれど、大名も太郎冠者も、男は男、女は女、盗人は盗人、阿房は阿房、欲深は欲深と能う分かつてある、言ひ譯するには及ばぬ。著物疊むに、襟先持て疊めばッィ疊まれる。夫を裾や褄先引張つて疊もとする故、家内が皺くたになる。皆それ〳〵の役々でなければ勤らぬ。家内の

内では、敷鴨居がはじまり、戸障子は息子殿や娘子、或は家來衆じや。其衆が片意地いうて閉閉の工合が惡るいと、戸障子の方で削るか打添せにやならぬ。敷鴨居は天地則兩親、疵附ける事ならぬ。敷居鴨居も其心で隨分と歪まぬ樣にして遣らにやならぬ。敷鴨居に狂が來ると、大體大造なものじやない。家を建直さにやならぬ。

主人は敷鴨居、家來は戸障子、戸障子のぐわたつきは下で濟むけれど、敷鴨居のくるひは世間でぐわた〳〵する。

御地頭の敷鴨居に狂が來ると、御下の戸障子が、大體ぐわたつき出すことじやない。娘を他所へ片づけるも、この戸障子になることを、能う呑こまして遣らにやならぬ。戸障子が敷鴨居の差圖する樣になると、家内がぐわたつく。其外聟取嫁取年忌法事、後で疵痛せぬ樣に、兩方に心得て居にやならぬ。此前葬禮に氣を張て身上潰した人がある。五十日經ぬ内に世間へ分散、後は一家中へ引取になつて仕まうた。是等は敷鴨居が上下になつたのじや。

芝居の顏見世に、逆さまやといふ狂言して見せた。あの衆は氣を附けて、甚い所をして見せたものじや。其道具立が天井を疊でして、座る所が屋根裏の檜皮ぶき、戸障子も襖も逆樣にして、著物も裏を著て、表を裏にして言葉も後前にいうて、仕て遣るぞ、堪忍を喰ふぞ、飯をなされ

ましたか、能う御出と、何もかも逆樣であつたけれど、人ばかりは逆樣にならなんだ。此體は天地の道具じやに依て、どうも逆樣にはならぬけれど、内へ戻つて能う考へて見れば、腹の中が逆樣じや。女房呼んでから親達が麁末になり、親を家來の樣にして、女房子を戴いてゐる。女房の一家が出來て、家附の親類が古臭うなり、息子が親の頭の上へ上り、娘が母親を供に連れて歩く。妾が出來ると商賣に無理する樣になる。「すつきり逆樣に、してやるぞ、節季の行かぬ樣に、してやるぞ、跡の立たぬ樣に、先祖も逆樣、家も逆樣、身上も逆樣にして震うてゐる。遂遂身體せり上、せりおろし、入代り〳〵町内追附入代り、皆跡札買うて待つてござる。跡は無間の業々永代常芝居。扨樂屋へ這入て見ては、埒もないものじや。右大將賴朝といふ樣な人が、肩ぬいで博奕打つて居やしやる。薄雪姫と言樣な美しい女中が、蛸の足かぶつて酒飲んでゐる。酒田の金時といふ樣な勇者が、按摩取つて貰うてゐる。蟲も踏殺さぬような親父樣が、高歩の利勘定して居やしやる。大織冠鎌足といふ樣な人が、現銀店で鼈汁を喰うてゐる。阿房の盆太が、富士や吾妻といふ樣な女郎と、さいつ押へつ酒飲んでゐる。樂屋では我が出來る故たはいもないものじや。人の身上も樂屋から見れば皆張ぼてじや。拍子木がなると直に世界の常舞臺、眞實の狂言じや。酒飲まぬ人に盃出すと、「イヤ私は不調法にござります。」煙草飲まぬ人に煙草盆出すと、「私は能う給べませぬ、其代端の衆に飲んで貰ひます。」「私は金持つことが嫌でござり升故、外の人に持つて貰ひます。」「私は奢が嫌ゆゑ、外の衆に奢つて貰ひます。」どうでも、奢は錢銀の減る方でござります故止に致しませう、皆眞實の御勤めじや。

松翁道話五編　卷之下

駕舁も乘人もおなじ旅なれば一足づつに先は近づく

世わたりは狂言綺語とおなじこと上々も役下々も役

女中方の機織道具も、せはしう働く繼の篋のといふ役人もあり、緩々暮らす千切の、中つりの、亥の爪のといふ衆もあり、又一向動かぬ、兩方の機框の、腰掛のといふ衆は、初から仕まひまで一向働はない。けれども、此衆は動かぬが役前で、此衆がないと、繼の、篋の、まねぎの、かざりのと云ふ衆の働が出來ぬ。それを篋や繼斗が、おれが〳〵では織られぬ。女中方の著物縫ふに、絹針も絎針もなければならぬ。其外糸も、はさみも、かけ針も、それ〴〵の手傳人がないと出來ぬ。おれが〳〵指ばかりで著物の出來るものではない。神道では八百萬の神達といひ、佛道では三世の諸佛の、儀式の、說法のといふ。一さいの諸道具は三世道達の諸佛菩薩じや、麁末にすると罰が當るぞ。

百姓衆の田畑を作るも、鋤の鍬のと、其外色々樣々の、農方の道具がなければならぬ。おれが

おれが手斗では大根一本も作る事ならぬ。此外大工職人商人皆同じ事じや。親芋が有る故、子芋孫芋彦芋迄段々殖るばつかり、痩疲て正味の味は皆子芋に讓り、わが身は乾物になつて世話燒いた故、子芋を世間で悅ぶやうになつた、それを子芋が己が智惠じや、おれが味じや、己が持つて生れた智惠じやと思うてゐる。持つて生れた智惠なら、どこから持つて生れたぞ。子芋が如何さまなうと、手を組んで思案し「まづ糞でもなし、蔓でもなし、又根でもなし、土でもなし、母親斗で出來よう筈もない。ハヽア雨露の惠か、扨は此日に見えぬ天の御世話じやな」イヤイヤ其樣な小難しい學問はいらぬ。其智惠分別を離れて見たがよい。たとへば大海へ突はめられて、漸々板一枚に取り附いた時はどんなものじやぞ。唯何卒助らん〳〵と思ふばつかり、其時に雨露の惠も、天の御世話も、何をいふも金の事も、己が〳〵も、病けもぬけ果てて、どうぞ助らんと思ふ斗、其時大きな鬼でそつと掬上げ、船の中へ乘せたらば、ヤレ嬉しやばつかりで、助らん〳〵と思うたものはない。夫を又浪の中へ突はめると、ヤレ哀しや、又助らん〳〵になつてゐる、其時にヤレ嬉しやと思うたものはない。浪の中ではヤレ哀しや、船の中ではヤレ嬉しや。浪と船とで哀しやうれしや。サア此浪の哀しや船の嬉しやは、どうして出來たものじやぞ。考て御覽じませ。本心を知るも此道理なもので、智惠才覺はいらぬ。又學問もいらぬ。

學問といふは、此本心の明德を明め知るの道理を書いた書物、一切經も其通、いはゞ本心の所書じや。其所書ばつかり讀んで、其所へは行きもせずに、子曰々々いうてゐるを學問と思うてゐる。さるに依て、讀んだり覺えたり、知つたりしたものが、腹の中で物知になつて居るゆゑ、夫が差支へて知れ悪い。慈鎭和尚の歌に、

聞分くる心の内のまことこそ教に依らぬ悟なりけり

本心會得した上で、我明めた所に間違はないかと、聖人の書物、一切の經々に照してみる、慥な證文じや。其時は學問も智惠才覺も皆生きて働く。じやによつて本心知らぬ中は、學問の智惠才覺も邪魔になるといふは爰のことじや。本心を知るのは本來の白地にするの故、たんと下染のしてあるものは落悪い。在所の這出の小女郎が伊勢參して戻り、大佛樣の話してゐる。旦那殿が側から、「大佛の柱の穴を潜つたか。三十三間堂には三萬三千三百三十の佛樣が有る筈じや。それに大佛の堂の高さが何十何間ある」と、書物見ていうてござる。小女郎が、「旦那樣は京知らぬというてござるが、能う知つてござる。」旦那殿が「往つて見いでも知れた事じや。歌人は居ながら名所を知る、何んでも學問せにや役に立たぬ」と、鼻高うしていうてござる。小女郎が「申し旦那樣、大佛樣の堂の色は何色と言ふ物でござりますえ。」サア旦那が行詰つた。書物に堂の色は書いてない、どうも仕樣がないけれども、偵が旦那じや、「あれは堂色と言ふものじやわい。」小女郎は何にも知らぬ、「ヘエ」と言うてしまうた。旦那も言ふは言うたが腹の中が合點せぬわい。何でも正眞に見たのでなければ役に立たぬ、生きた書物でなければ間に合はぬ。目の廻うた時、經文の中の水といふ字を、口の中へ捩込んでも役に立たぬ、眞正の水でなければ助からぬ。書物の火といふ字を暗へ並べても明うはない、眞正の火でなければ助らぬ。此樣にいふと學問も書物も役に立たぬ樣なれど、さうではない、書物は本心知つた上の證文じやといふこと合點したがよい。其通に違はないといふことじや。

道元和尚の歌に

行ふも止も思ふも忘るゝも工のなすは絶間なりけり

是で智惠才覺の間に合はぬこと合點したがよい。在鄕に稻を扱くに、『金扱が出來てから、米がすくないといふことじや。六七十年已前までは、手に管を持つて稻を扱いたといふ事じや。其時分には一反に三四石も米が有つた。夫から段々人が利功になり、才覺してその金扱といふもの製へ、今では二石米が出來兼るといふことじや。在所歌に、

利功達するひとぐゝよりも阿房が身を持ち世を過す

と歌ふ。片田舎の狀の屆き惡い所ほど人が正直な。物事自由の出來る在所は人が鋭い。

豆腐よしもう此處らからすゝどかろ

といふ句の下に、

髪は皆下手誠ある里

藁で髪ゆうてゐる在所は眞實が厚い。

其知可レ及、其愚不レ可レ及。

此在所で阿房は誰じや。大和の喜助樣の、平三郎樣の、あるひは西の岡の儀兵衛樣の、越前の治左衛門樣の、美濃の佐吉樣のといふ御方々じや、何歳になつても親のする通にしてござる。喜助樣が風呂屋へ親御を負うて行て洗うてあげてござるを、近所の人が「能う御奇特に其樣になさります」といへば、「ハイ我が子抱いて芝居見せに行くから見ては、仕よい事でござります」というてござる。成程夫から見ては、祭に我子に、赤い頭巾著せて肩車に乘せ、「よい〳〵〳〵さつ〳〵〳〵。」餘程仕惡い務じや。野崎まゐりや權現祭に、美しい衆達や、太鼓持など雇うて船に乘せ、知りもせぬ人に踊つたり舞うたりして見せるは、錢銀入れて大儀な仕事じや、御手柄じや、皆御手がからになる。御身上相應三百目なり五百目なり乃至一貫目二貫目でも、夫程御手がからになることじや。越前の治左衛門樣六十餘、母御樣が九十四、御年の上で老耄してござる、其母御樣に仕へてござるのじや。内の奉公人を究める時相對してござる。「母が同じ事何遍言はしやつても、始めて聞いた樣にしてたもれ。又母が何ごと仰せられても顔つき惡うせぬ樣にしてたも。」其賃三百文づつ毎月いひ渡して賴んでござる。ある時治左衛門樣が、風呂へ入らうと思うて片足入られた所を、母御が、「治左衛門風引いて居やるじやないか。止めにしや」と言はしやると、「ハイ〳〵」と其儘著物きて外のことをしてござる。或時母御が、「治左衛門こなたは子供等に、著物して著せずに、己にばつかり著物して著しやる。いかい太郎作であるはい。」治左衛門樣が、「母樣が色々の名を御附け下さります。ありがたう存じます」というてござる。六十四になつて母樣々々いうてあまえてござる。餘所へ行きしなに、「御母樣乳戴かして下さりませ」と、母御の側へ手をつかしやると、母御が乳を出して、「それ」と治左衛門樣の頭を撫でらるゝと、「ありがたうございます。」他所から戻つてもまた其通じや。何と六十の餘になつて出來る仕事かな。世間の外聞が惡いの善いの處では出來ぬ。治左衛門樣病氣の時、母御の膝を枕にして寐入てござつたれば、母御が鋏で慰に片鬢剪んで仕まはしやつた。治左衛門樣目をあき頭撫て見て、「此間は心惡かつた。是で瀟洒と心ようございますと」いうてござる。其

所の庄屋役なれど、片鬢で勤めてござつた。前栽の作松其外樹木見事に作つて有るを、母御樣が鎌で減多にうち切つて佛前へ上らるゝ。近所の人が見て、「この庭の樹木を伐るは可惜ことじや」といへば、「母樣が、人の惜むものを、如來樣へ上て下さるが御馳走じや」というてござる。是で母御樣の御了簡推慮してごらうじませ。此母御樣が阿彌陀如來で、人の惜む執著を切つて佛へあげらるゝのじや。内の奉公人に母御樣へ毎日々々挨拶すること、畑へ仕事に行きしなに挨拶すること、戻つても挨拶すること、此挨拶の賃錢日に二百文づつ、田畑で蛙蛇其外蟲蠕殺さぬ賃二百文づつ。此外十四才より六十五迄、毎年正月元日に書初の寫、御望の方は御覽なされませ。治左衞門樣常々「人の非の見えるは我に非が有る故、同商賣故友達になり、我に不義のない人は、人の非は見えぬもの」と。凧のぼすに大勢寄合ひ、皆上づりになつて、風がちつと出て來たせんべいをやれ、傾く樣な、糸を引け、返りさうな、糸をやれ」と、總々が凧になりきつてゐる。是で親御の遠方へござつたときも、家内から凧のぼす氣になつて、「雨が降りさうな、傘遣れ、夫迎にやれ、歸りさうな、駕やれ、風呂はよいか」と同じ世話のやき樣で、親御の安心なされさうなものじや。凧のぼりでも、をしへにならぬといふ事はない。氣をつけてみれば一切のをしへじや。

小鳥を飼ふ人などは、其鳥への孝行、外へ行きしなにも、留守の間の食物萬端妻子にいひ附け、又は家來にも呉々賴み、「猟鯉に氣を附けてくれよ」と賴み行く。扨もどれば、直樣鳥籠の内を見て、御變もないかといはぬばかり、能うゆきとゞいたものじや。其位氣を附けたら、餘程親御さま方が、御悅び被成さうなのもじや。

美濃の國竹ケ鼻村佛佐吉、燒餅を小うして賣つてござる。心安い人が、「何と佐吉樣、此米の安價にもつと大うして賣らぬか」といへば、「大うすると人の邪魔になる」というてござる。又綿を賣に行くに、人より一時宛遲う賣に行くに、人が待つてゐて買う樣にする。夫から綿賣止めて仕まうた。此衆達は、我身を忘れて人が助けたいばつかり。晝休に纏製へて、田の中の蛙をすくうて、池へ放して遣るといふ人じや。何でも人の難儀するを氣の毒に思ひ、所々へ石橋を架け、百姓の行通の難所の道を作り、今年迄八十八ケ所石橋かけた御人じや。法華經に、不自惜身命と云ふ。「母御の病氣を見舞に行くに、少々金を持つて、夜深に出さしやつたれば、川原で追剝が著類を剝いだれば、丸裸になつて行過しが、肌に附けたる金は追剝が知らなんだれば、立歸りて、「是々まだ此金を忘れてゐた」と、追剝に與へ丸裸に成つて、伯母御の所へ行き、「扨々さつぱりと借錢なして來た」と悅んでござつた。其後一兩日して、伯母御の

所の窓から、衣類も金も投込んで去んだといふことじや。天明三年卯の年が八十三歳であつたが、それから四五年もござつたことさうな。其時の歌に、

南無阿彌陀佛にかよふ出入の息のとまりは極樂がやど

能う寐た時も極樂が宿、思案分別の盡きた所も極樂に往生してゐる。往生とは往き生るゝといふこと、卽今の一念の向け樣が大事じや。念々往生我なす通に往き生るゝゆゑ、業往生ともいふ。「京へ往てこう」と、往かぬ内から京へ往生してゐる。「湯を沸かせと」いふ。「水を焚いて湯に沸せ」とはいはぬ。湯の沸かぬ内から湯になつてある。「飯を焚け」といふ。「米を焚いて飯にせよ」とはいはぬ。飯を焚いたら焦になるか、粥になるかするけれど、矢張飯焚けと一念で往生して居る。明日はどこへ往かにやならぬと、明日のことを今一夜からちやんと往き生れてゐる。此一念で行きとゞく樣にして有る。奢の一念が直に乞食に往生してゐる。欲しいと思ふ、直に盜人に往生してゐる。

惡いと思ふと、咽笛に喰附いてゐる。さうは思はぬけれど、恐いものじや、腹の中の親殺、腹の中の主殺、腹の中の間夫、腹のなかの盜賊、皆一念で往生してゐる。さる寅の年或國の大守樣、「御百姓と呼ぶべし」と御家中へ仰附があつた。世をたつとんでござるのじや。是を世尊といふ。又御歌に、

うけ繼し國の主の甲斐もなく惠まぬ民に惠まるゝ身は

此御慈悲が一國の百姓の腹の中へ、扨々有がたいと、佛樣が一體づつ往き生れてござる。其年餘國は不作であつたれど　御國は豐作であつた。此樣なありがたい殿樣でも、不足いひ附たものは矢張小言いふ。其樣な衆ばつかりがより合うて、イヤ何處が惡いの彼所が濟ぬと、善いことは悅ばずに、我が勝手の惡いことばつかり、言ひ并べて小言いふ。是を安物買というて、善い物をみな潰の直に買ふのじや。我が本心の有がたいこと知らぬ故、精出して本心の靈明をほり出しては、我慢をねじ込み、本心を攫み出しては、我慢をねじこみ〳〵、安物斗取込んで、ハアスウ〳〵いうてゐる。中風病の樣なもので、生てゐるといふ斗で、天地の氣が通ぜぬ故、義理も法も知らぬ。身體が痺れて有る故覺えぬ。中京に中風病が火燵に寐て足の燒けたを知らずにゐて、翌日家内が大騷動で有つた。我體の燒けることも知らぬは、天地の氣が通ぜぬ故じや。どなたも本心を知り我身に立返ること御知りなさると、天地の有がたいことを知る。さうないと體の痺れて有るを知らずにゐるが、恐しいものじや。御養生が大事でござります。

松翁道話終

都鄙問答

卷之一

○都鄙問答の段

大哉乾元萬物資始、乃統天、雲行雨施、品物流形、乾道變化、各正性命也。天の與る樂は實面白きありさま哉。何を以てかこれに加へん。

或時故郷の者來りて曰く、頃日出京致し、親類ども方に罷在候ところ、或學者參られ物語の上、汝の噂出申候。夫に附、尋度子細ありて來れり。是迄在所にての噂には、小學などを講ぜられ、少々宛は門人も聚めらるゝと聞き、陰ながらも喜しく思ひ侍りし所、彼學者申れけるは、彼は異端の流にて儒者にては無しと言り。依て其異端と言ふは、如何なる義ぞと問ひければ、異端と言ふは聖人の道に非ず、其者が別に私意を以て教を立て、世上の愚なる者を誣くらませて、性を知るの心を知るのと、向上の論義を爲し、人を惑す事なり、性を知ると

云ふは、古の聖人賢人のことにて、後世の人及ぶべき所に非ずといへり。我此を聞くより思へば、人を惑す事は、山賊强盗を爲すよりは、其罪は甚からん、餘笑止に思はれかくのごとく言ふなり。汝故鄕へ歸居らるゝ共、只口を養ふ事は、心易き事なり。口一つ養はんとて、人を迷すは哀しきことなり。如何心得られ候や。

答ふ、厚き志過分の至なり。まづ今日敎をなす志をかたらん。孟子曰、人之有道也、飽食煖衣、逸居而無敎、則近於禽獸、聖人有憂之、使契爲司徒、敎以人倫、父子有親、君臣有義、夫婦有別、長幼有序、朋友有信。此五の者を能するを學問の功とす。これにて古人の學と言ふ者を知るべし。論語學而の篇にも、大抵皆本を務ることを多せり。人倫の大原は天に出て、仁義禮智の良心よりなす。孟子又曰、學問之道無他、求其放心而已矣。此心を知つて後に、聖人の行を見て法を取るべし。君の道を盡し給ふは堯にあり、孝の道を盡し給ふは舜にあり、臣の道を盡し給ふは周公にあり、學問の道を盡し給ふは大聖孔子なり。此皆孟子の所謂性のまゝにして、上下天地と流を同うす。聖人は人倫の至なり。かくの如き君子大德の行跡を見、此を法として、五倫の道を敎へ、天の命ずる職分を知せ、力行ふ時は、身修りて家齊ひ、國治りて天下平なり。孟子曰く、遵先王之法而過者未之有、又曰、天下言性故而已、故以利爲本、其性と言ふは、人より禽獸草木迄、天に受得て以て生ずる理なり。松は綠に櫻は花、羽ある物は空を飛び、鱗ある物は水を泳り、日月の天に懸るも皆一理なり。去年の四季の行るゝを見て今年を知り、昨日の事を見て今日を知る。是卽所謂故を見て天下の性を知ると言ふ所なり。性を知る時は、五常五倫の道は其中に備れり。中庸に所謂、天命之謂性、率性之謂道。性を知らずして、性に率ふことは得らるべきにあらず。性を知るは學問の綱領なり。我怪しき事を語るにあらず。堯舜萬世の法となり給ふも、是率性而已。故に心を知るを學問の初と言ふ。然るを心性の沙汰を除き、外に至極の學問有ることを知らず。萬事は皆心よりなす。心は身の主なり、主なき身とならば、山野に捨る死人に同じ。其主を知する敎なるを、異端と言ふは如何なることぞや。

曰く、彼學者の言へる而已にあらず、其座に禪僧居られけるが、此僧の云へるは、拙僧も自性を見たしと思ひ、十五年程坐禪致すといへども　今に此ぞと見性せず、見性すれば、飛揚るほど嬉しきこと有りと聞く、然るに心易知らるゝと言へば、紛者に違はなしといへり。且汝の言へる如くなれば、知り易きことなり。我等如きは、心のつかぬことなれども、心を附けて見るならば、春は花さき秋は實り、冬は藏り、人は人の道を行ひ、夫にて知れたることを

毎日々々講釋し、家業の忙しき者を寄聚め、隙を費さしむるは如何なる事ぞや。且汝は故を見て知ると言ふ。彼禪僧十五年の間、心を盡しても、性を知り得ること難しと言ふ。然るを汝不學の身として、知ること安しと言ふ。彼此以て疑多し。此訣は如何。

答ふ、汝物語の僧は、未徹の僧なれば言ふに足らず、定て妙を見ることありと思ふならん。釋尊は曉の明星を見て大悟し給ひ、唐土の靈雲は桃花を見て悟られしにあらずや。悟りて後は星を月と見るべきや、又悟らざる前には桃を櫻と見るべきや。如何ぞ、活潑端的の所を知らざる。信心不及の所より、無益のことに十五年の間精神を費すは惜哉。又汝我を不學と言へるは、文字に疎と言ふことか。

曰く、然り。

答ふ、唐土の六祖は、一字を學ばずとかや承る。然れども達磨より六代の祖となり、禪を今日まで繼來るは、六祖の力に有りとかや。然れども是は禪宗のことなり。又我儒にて言はゞ、子夏曰、賢賢易色、事父母能竭其力、事君能致其身、與朋友交言而有信、雖曰未學吾必謂之學矣。聖人の道は心よりなす。文字を知らずしても、親の孝も成り、君の忠も成り、友の交も成り、文字無世なれ共伏羲神農は聖人なり、只心を盡して五倫の道を能すれば、一字不學といふ共、是を實の學者と言ふ。且文學ある者は文質彬々の君子とは言ふべけれど、常體の者の至るべき事にあらず。如何となれば、家業忙しく記臆薄き者多ければなり。子曰、行有餘力則以學文。聖人の學問は行を本として、文學は枝葉なる事を知るべきことなり。

曰く、汝の言へるごとくなれば、文學は末なること明なれども、彼儒者二言にて、身の修るべき事ありやと問へば、汝が如き四書の素讀もせざる者に、聖人の道何を言ひ聞かせんや、俗に聾に呼くと言ふ如し、耳に入る事なかるべしと言はれたり。又世間の人も斯く思へり。然れば汝の言へる所は誤なり。文學なくては知らるべき事にはあらず。何程に言れても、疑なき事あたはず。又汝は何方にて學び、世間の學者に替たる教を弘むるぞや。

答ふ、替たる教にあらず。汝不審の所を語るべし。我何方を師家とも定めず、一年或は半季聞き巡るといへども、我初心と愚味の病より、此ぞと心定らず、心に合へる所もなく、年月これを歎きしに、或所に隱遁の學者あり。此人に出會ひ物語の上、心の沙汰に及し所、一言の上にて、先には早速聞取りて、汝は心を知れりと思らめど、いまだ知らず、學びし所雲泥の違あり。心を知らずして聖人の書を見るならば、毫釐の差千里の謬と成るべしと言へり。然

れども我が言ふこと、先方へ聞えざるゆゑに、斯く申さるゝと心得て、幾度とも論議に及ぶといへども、肯ふ氣色見えず、我益がてんゆかず。或時彼人の言ふ、汝何の爲に學問致し候や。答て言ふ、五倫五常の道を以て、我より以下の人に、教へんことを志すと言ふ。彼人の言ふ、道は道心と言ふて心なり、子曰溫故而知新可以爲師矣。故とは師より聞く所、新とは我發明する所なり、發明して後は、學ぶ所我に在りて人に應ずること窮なし、此を以つて師と成すべし、然るを汝心を知らざれば、自迷ひ居て、且他も迷せ度候や、心は一身の主なり、身の主を知らざれば、風來者にて宿なし同前なり、我宿なくして、他を救はんと言ふは、覺束なしと言へり。我見識を言はんとすれ共、卵を以て大石に當るが如し、言句吐くことあたはず。此に於て茫然として疑を生ず。實に得たる事は疑なき者なり。然るに疑の發るは、いまだ得ざると決定し、夫より他事心にいらず、明暮如何々々と心を盡し身も勞れ、日を過すこと一年半許なり。折節愚母病氣に附き、二十日餘看病せしに、其座を立出でけるが、其時忽然として疑晴れ、煙を風の散すよりも早し。堯舜の道は孝弟而已、魚は水を泳り、鳥は空を飛ぶ、詩に言く、鳶飛戾天魚躍于淵と云へり。道は上下に察なり、何をか疑はん。人は孝悌忠信、此外子細なきことを會得して、二十年來の疑を解く、これ文字のする所にあらず、修行のする所なり。

曰く、其子細なしと會得せるときは、如何なることぞ。

答ふ、此會得せしことは言ひがたし。然れども譬を以つて其趣を語らん。或は證文、印判抔の類入用の時、器を視れ共見えず、又外を尋ぬれども見えず、今日も尋ね明日も尋ね、又餘日も尋ぬれども見えず、見えぬに附き疑おこり、取れはせぬか、證文などは、反古にまぎれて遣ひはせぬか、落しはせぬかと、種々に疑おこるものなり。餘り見えねば、最早是非なしとおもひ、他の用事あつて取まぎれ居るとき、忽然と思出すことあり。おもひ出すはこれも文學の及ばざる所なり。其時にこそ、前に盜まれやせん、落しやせんと思ひし疑も、忽に晴る、なり。心を知るも其如く、闇夜の忽に明け、一天照然として明なるが如し。

曰く、然らば心を知るときは、直に賢人にて候や。

答ふ、否、身に行はざれば賢人にあらず。知る心は一なれども、力と功とは違あり。聖賢は力强くして功あり。中庸に所謂、安じて行ふは聖人なり、利して行ふは賢人なりと言ふこれなり。我等如きは力弱くして功なし、或は勉强して行ふ是なり。然れども心を知る故に、行はれざることを困しむ。困しむといへども行ひおほせ、功をなすに及びては一なり。

曰く、道は樂むべきことなるを、くるしむことを學ぶとは如何なることぞ。

答ふ、譬ば此に相駕籠舁く二人の者あらん。一人は力強く、一人は力弱し。強は苦しまず、弱は苦しむ。苦しめども駕籠を舁くゆゑ飢ることを免る。駕籠に出でざれば、乞食と成りて路道に立つなり。道を行ふこともかくのごとし。我ら如きは、力弱き駕籠舁に同じ、苦みながらも行ふ故に、不義に陷いらず。是を以て心安し。又心を知らざる者は、常に苦有りて、言葉の上に見る。然れ共その恥を知らざるゆゑに、學ぶ志立たざるなり。

曰く、汝の云へる行と言ふは、禮儀三千三百を習ひ、威儀を正くすることに候や。左樣のことなれば、我ら如き農人などの行ふ事は叶はざる所なり。彼學者の言ふごとく、不學者の及ぶべきことにあらずと言へるも理なり。

答ふ、否、左にはあらず。汝の言へるは、孔子子張を謂つて、師は辟也とのたまふ所なり。辟とのたまふは、威儀に習ひて實少きを言ふ。行の事を汝が聞き易き所にて語ん。行と言ふは、農人ならば、朝は未明より農にいでて、夕には星を見て家に入り、我身を勞して人を使ひ、春は耕し、夏は芸り、秋は藏むるに至るまで、田畠より五穀一粒なりともおほく作りいだすことを忘れず、御年貢に不足なき樣にと思ひ、其餘にて父母の衣食を足し、安樂に養ひ、諸事油斷なく勉むる時は、身は苦勞すといへども、邪なきゆゑに心は安樂なり。身を肆にし、年貢不足する時は、心の苦と成る。我教ふる所は、心を知つて、身を苦勞し勉むれば、日々に安樂に至ることを知らしむ。心を知りて行ふときは、自ら威儀正くなり、安を知る事なれば何をか疑はんや。

曰く、知る者の善なることは、聞え侍りき。然れば、少しにても聞きたる者は、彌進むべきことなるに、前方は汝の方へ進み來れども、今は少し緩める者有りと言ふことは如何。

答ふ、左樣なる人も有り。其人最初に思ふ樣は、今まで遊興を好む心も、利欲に耽る心も、柔弱も忽に止み、心清淨にして、樂むべしと思ひし所に、忠孝と家業を精に入れ身を敬まざれば、安樂になられず、舊染の人欲出でて行ひ難し。行はざれば心を欺き、道心と人心と戰ふゆゑに中を苦む。後は善からんと思へども、當分が窮屈ゆゑに進まざる者あり。子曰「困而不學民斯爲下矣」とのたまふこれなり。

曰く、然らば知るといへども、悅び來らざる者は、益なきことに候や。

答ふ、其者當分には、不義は行ふまじきと思へども、修行の功なきゆゑに、人心と道心と雜て分れず。然れども一度道を聞きて、不義を惡むことを知れば、此程の益なり。不義を嫌ふは

善なり、急々に進まざるは柔弱の致す處なり。又曾子孟子の如きは、行ひ課せて上達し給へり。依つて仁以爲二己任一。又、養浩然氣に至れり。今言ふ所は性を知るを先とす。性を知れば行ひ至り易きの道なり。孟子も人を導き給ふは性を知るを先として教へ給ふ。依りて最初より性は善なりとのたまふ。此孟子發明し給ふ所にして、前聖の未だ發せざるところなり。知つて行に至ることは早し、行ひおはせて至ることは遲し。故に性を知るを先とし給ふ、今教を立るも此に倣り。法なき道を弘むるにあらず。我因る所は孟子の盡心知性則知天と說給ふ、我心に合ひ疑なきを以つて教を立つるもととす。求二觀聖人之道一者必自孟子一始と序說にも見えたり。

曰く、彼儒の言ふ、汝は詩作文章に疎き由を聞く、若儒者たるもの諸侯方へ召出ださるゝこと有りて、詩文などを好ませたまはゞ、如何すべき、文學なくして儒者とは言はれまじと言ふ如何。

答ふ、然り。我等如きは文字を正ては、手紙一通も書き得ざる者、何方へ出づべきや、拙を知りて出でざれば、恥を受くること少かるべし。元來儒者は政に從ふ者なり。論語にも仁を問ひ政を問ふこと多し、詩作文章に及ぶこと少なり。孔子は德に至り仁を全ふする事を教へ給ふ。孟子は其仁を知ることを教へ給ふ。依りて心を盡し性を知ると說き給へり。文學は末なること明なり。然るに詩作文章ばかりを儒者の業と思へるは僻なり。子曰、誦二詩三百一授之以政不達、使二四方一不能二專對一雖多亦奚以爲と。專對は心なり、詩三百を誦は文なり。和漢ともに小事を見て大事を見る者少なり。陋哉文學に伐る。文藝も道の助となれば、舍ることにはあらず。愚文學拙を以つて悔ゆといへども、民間に產れ家貧して、學ぶべき暇なく、四十餘の比より此道に志す、如何して文學迄に至るべき。只恥づべきは何方へ一簡の饋るとも、文字に於て誤ることぞ多かるべし。見る人これを用捨有らんことを願ふ。

○孝の道を問ふの段

或人問うて曰く、我若年の比は、前後の辨もなきことなれば、親へ不孝の事もあるべけれども、最早壯年の比よりは、孝行の心附も有るゆゑに、何の不孝も致さず、隨分心一杯につとめ候へども、是ほどの孝行は、世間にも有ることなれば、天下に誰と、名を呼るゝほどの孝行を勤め見申度候。如何樣に致し然るべく候や。

答ふ、父母の心に逆はず、我顔色温和にして、親の心を痛めざる樣に事らば、孝行とも言ふべきか。

曰く、父母の心に逆ざると、顔色温和にすることは、輕きことにて勤りやすきことなり。たとひ能すればとて、内證のことなれば、世に呼ばるゝ程のことは有るまじく候。我言ふ所は、他人の目にも發知と立つほどのことを勉め見申度候。

答ふ、汝の言へる所は名聞にて、眞實を以て父母に事ると云ふものにあらず。其名聞あれば利欲も甚多からん。名利の勝つ者は、必仁義の心薄し。孝行は仁義の心よりなす者なり。有子の曰く、君子務レ本、本立而道生と。根本既に立つときは、其道自生る。本とのたまふは、親に事ふるのことなり。名を求むるは譽を喜ぶなり。我名に著する者、豈ぞ孝を知るべき。汝は父母の心に逆ふことなしと言ふ。然るに去暮伯父の方より、少々の銀子借用に來りし所、兩親は用達度由申されけるに、汝不得心にて少も借さゞりしゆゑ、親達難儀に思はれ、向後外の事は儉約も致すべく間、此度は用立遣すべきよし、再三申されしかども、汝聞分なく、終に借さゞるよし、其爭ふ時も顔色温和に候や。人に爭ふときは、温和ならざる者なり。夫にても逆はざると温和との二つ、心易く勉まると言ふは如何なることぞや。

曰く、孝經に、父有レ爭子一則身不レ陷レ於不義一、故當レ不義一則子不レ可レ以不レ爭レ於父一と、爭ふ時には如何ぞ温和なるべき。父母に父義あるとき爭ふことは、聖人と雖も有ることなり。我が爭も是に倣へり。去冬伯父が方より銀子借用に來りしとき、親ども貸し度思ふことはこれ不義なり。伯父も前方とは違ひ勝手も貧く、何返すとたしかに心當なきことなり。其返す覺えもなき所へ、積なく貸せと言ふは、前後の辨へなきことなり。加樣なる不義を言はるゝときは、親といへども爭はずば有るべからず。たとひ父母如何樣に言へばとて、家の害あることは成り難く候。我貸さざるは、後々に至つて親に不自由をさせまじき爲なり。手前に損あることを堪忍し、面前に從ふは、父母に甘毒を食せるが如し。其毒を與へざるは實の孝と言ふべし。其うへ衣類食物は、望の通にいたさせ、遊興物參等、心任せに致すことなれば、大槩の孝行は致し候。但雪中に笋を抜く程のことなければ、孝行の至とは言はざることに候や。

答ふ、汝も少は學問を致されしと見えて、孝經を引き用ひるといへども、盡本意に違へり。父有レ爭子一則身不レ陷レ於不義一とのたまふは、親無道にして、欲惡甚しく、或は君を殺し、國を奪ひ、下たる者は盜などをなす、大なる不義ある時は、善に遷しめん爲の爭なり。汝は親

に仁義の心有りて人を救ふを、我不仁不義を以て、拒ぎ爭ふと云ふものなり。子としては親を善に導くべきを、反て惡道へ陷れしむること有るべきや。汝の如く書を見なす者も、學問せし者と言はゞ、世の人學問は不仁の本なりと思ふべし。然る時は學問を廢る罪人なり。元來世間に書を讀む而已を學問と思ひ、書の心を知らざるゆゑに、汝が如く見誤ること多し。總て經書は聖人の心なり。聖人の心も我心も心は古今一なり。其心を知りて書を見る時は、書の意味は掌を見るが如し。汝が義と言ふは盡不義なり。兩親の心は義に合へり。兄弟を捨てざる志、左も有るべき事なり。伯父は親同前の事なれば、假令兩親共に貸すこと成り難しと言はるとも、兩親へ願ひ、少のことは合力にても致すべきことなるに、反て親の志に背くは、親を無する罪人なり。其罪を知らずして孝行をなすと言ふ。その愚昧は論ずるに足らず。

曰く、汝が言へる所、心得難きことあり。世間を見るに、吝して家業に精を入れ、金銀を持ち、父母に不自由をさせぬやうに養はゞ、假令親類へ屆ざる仕方ありとも、不孝者とは言はず、身持よき者なりと言ふ。然るを汝は彼らも皆惡人にて不孝者と言ふべきや。

答ふ、かくのごとき者を、世間並の人と思ふべけれど、親へつかふる道は曾て知らざる者なり。

汝は書を讀みながら、書を讀まざる愚昧の者を法とする故に、父母につかふまつる道を知らず。昔公明宣、學於曾子三年不讀書、曾子曰、宣居參之門三年不學何也、公明宣曰、安敢不學、宣見夫子居庭、親在吒陀之聲未嘗至於犬馬、宣說之學而未能と云へり。曾子の如きは親の前にては犬や馬さへ怒りて叱り給はず。然るに汝は、只養ふを孝と思へり。子曰、今之孝者、是謂能養、至於犬馬、皆能有養、不敬何以別乎と。如是なる時は父母に事ふまつる道は、愛と敬との二つなり。愛はいつくしみあいする心なり。敬はつゝしみうやまふ心なり。然るに汝は父母の命を用ひずして、心を痛ましむ。心を痛ましむるは愛心なきが故也、命を不用は敬心なきが故なり。愛敬の心なきは鳥獸に同じ。汝は世に呼るゝほどの孝を問ふ。聖賢の孝を聞かんと思はゞ、早く愛敬の心を知るべし。愛敬の心を知らば、聖賢の孝にも到るべし。

曰く、我が問ふ所は親に事へのことなり。其急なることを差置き、只一通に心を知れとは如何なることぞ。

答ふ、汝は損ある事には從ひ難しと言へり。從はざれば逆ふなり、親に逆ふより大なる不孝あらんや。然るに費有ることに從ふは、義に合はざると思へり。これ心の暗きより、是非分ざる

所なり。我が言ふ所は悉親に事ふまつる道なれども、汝聞き得ることあたはず。是心を知らざるゆゑなり。因て心を知る事を急務とす。

曰く、損ある事に從へば、先祖の家を被る道あり。是是非善惡分るゝゆゑなり。然るを是非しらずとは如何なることぞ。

答ふ、汝の言へる所、一つとして是非分れず。是非を論ずるは他人の事なり。父母に對して是非を論ずるものにあらず。況や汝の父母世間に對して惡しき事あるに非ず。親類を救ふ仁愛有ることを知らずして、却て親を不義の人と言ふは哀しきことなり。今汝の家財は親よりの讓か、但自身かせぎ出し。其財を以て父母を養はれ候や。

曰く、兼て汝も知らるゝ如く、親の讓の外、我財寶と言ふはなし。

答ふ、左程の家財を讓れし父母、少々費あればとて、家の立たざるほどのこと有るべきや。親の財寶なれば、假令つかひ捨てらるゝとも心まかせなるべし。財寶盡きなば、如何樣の賤き働をして成りとも養ふべし。若又此に人有りて、身を捨て苦勞し得たる寶なれば、父母を養ふことならずと言うて、飢ゑ凍やす者あらば、これは尤なりと汝が心に許すべきや。

曰く、否、我寶にて養ふ事はならずと言うて、父母を飢ゑ凍やす者、夫を人とは言はれまじ。

答ふ、汝も人の是非を知ることは明なり。然るに親の寶を親の心にまかせざるは、如何なることぞ。唐土舜王は大孝の君なり、親の爲には天下を棄つること、敝たる蹤の如くに思召すと。加樣なることを知らるべし。財寶は言ふに及ばず、元我身は親の身なれば、遣ひたき樣に遣ひ、賣りたくば賣りて遣はるゝとも、汝が言分はなき筈なり。親の財寶を以つて父母を養ひ、其餘を我身の養の期にせる心あらば、父母の短命を待つに似たり。其機内に動くときは、必ず外に發して父母の氣を痛むること多かるべし。醫書に百病は氣より生ずと言へり。これを以て見れば、父母の心を痛ましむるほどの不孝はなかるべし。昔衞に宣公と言ふ君あり、其嫡子を伋と言ふ。後に又宣公齊國より宣姜を妻れり。宣姜二人の子を産めり、兄を壽と云ひ弟を朔と言ふ。宣姜と朔と二人して、伋がことを宣公に讒に言ひなしければ、宣公宣姜に溺れて伋を惡み、齊の國につかはし、賊をして路に待ちうけて殺さしめんとす。壽これは母と朔とが惡事なりと知りて、兄の伋に告げ命を助けんと思へり。伋が曰く、父の命なり、逃るべきにあらずと云うて聞き入れず。壽せんかたなく、伋が齊に使する驗の旌を竊執りて、兄の身に代り、死せん爲に先へ行く。賊あやまつてこれを殺す。後より伋至りて曰く、父の命なり我を殺せ、壽に何の罪やあらん。賊又伋を殺す。伋は父の命を守り、又宣姜の惡事を見さず、

我身を亡ひても逆ふことなし。汝は少々の金銀にて父母の命にさかひ、己が欲心を以て親の心を傷む。聖賢の孝行より、汝が仕形を見る時は、木石に異ならず、退て工夫せらるべし。

○武士の道を問ふの段

或人問うて曰く、我悴今度武家方へ奉公に出し申候。士の道如何申しきかせ然るべく候や。答ふ、我農圃に生れ武の事委からずといへども、書物にて見たる上を以つて告ぐべし。先づ君に事ふる者は凡て臣と言ふ、臣は牽なりと註し、心常に君に牽るゝなり。又世間に、君より俸祿を得んが爲に、牽るゝ如くに見ゆる者あり。子曰、鄙夫可二與事一君也與哉、其未レ得レ之也患レ得レ之、既得レ之、患レ失レ之、苟患レ失レ之、無所レ不レ至矣と。毫釐程も祿を望むに心あらば、君を害ふ本となるべし。古より不忠をなす者は祿を貪る心よりなす所なり。臣の君に牽れし道を見んとならば、舜の堯王に事へ、伊尹の湯王太甲に事へ、周公旦は武王成王に事へ給ふを見るべし。今君に仕ふる者も欲心を離れ、古人を見て法を取るべし。其外殷の王子比干これらの旁は、皆義を盡して心常に君に牽れ給ひ、今に至つて臣を正す法となり給ふ。曰く、我學問なければ、六箇しき事を問ふにはあらず。只心得やすきやうに語らるべし。我一

年參宮致し、御師へ大神宮の御教を示し給へと言ひければ、此の神の御教は只正直を以て善とす、親への孝、君への忠直さまにして、家業を情に入れ、心に掛ることなく、其上に罪咎あらば、其罪咎は某が受けんと言はれけり。扨心易き御教哉と思ひ、今少し六かしき教もあらば示し給へと言ひければ、御師の言ふ、此のこと心易く勤りなば、重て告げんと言はれけり。心易く思ひ勤見れども、先正直が勤らず、孝と忠とは猶往かず其上家業を情に入れ、心に掛らぬ樣に勤むること、此身の一生にては、勤まるべきとは思はれず。思へば思ふほど高大なることかなと、感心致し侍るなり。只加樣に心易く告げられよと言ふ。

答ふ、實に左もあるべきことかな。樊遲問レ仁、子曰、愛レ人、問レ知、愛レ人、仁知は大なりと雖も、此の二語を以て盡し給ふ。文字によらずして、人の曉し易きこそよからん。愚元來不學なれば、幸なる哉心易く汝が身にも備りたることを以て語べし。先手足は口のために使はるるなり。如何となれば、口が物を食はねば、手足安穩なること能はず。このゆゑに手足が苦勞して、一代口の爲に使はるゝと云へども、少しも不肖らしきことなく、口に忠を盡して能く事ふまつるものなり。君に事ふまつる道も、手足の口に使はるゝことを法とすべし。臣下の飯と汁は、君より給る俸祿なり。其祿なくして何を以て命をつぐべきや。このゆゑに我身

を委ねて、君の身に代り、露塵ほども我身を顧ざるは臣の道なり。常に手足が口に使るゝと、我身の君に事ふまつると、違ふことあらば、此は不忠なりと知るべし。此を法とせば、何國にて仕ふるとも、臣の道を離るゝこと、あるべからず。扨臣は政に從ふものなり。下を使ふは君の道を以て治むべし。古聖人の御代には、君としては萬民を子の如く思召し、民の心を以て御心となし給ふ。傳云、民所二好好一之民所二惡惡一之、此之謂二民父母一。此故に聖人は世を沒し給へども、民思ひ慕うてわすれずと言へり。此味を知るべし。忠義の臣は、名を後世に殘し、天下の人これを愛す。禮曰、士四十志强立不レ奪二於利害一不レ怵二於禍福一可二以出仕一と見えたり。士の道は先心を知りて志を定むべし。孟子曰、尙レ志、何謂レ尙レ志仁義而已殺二一無一罪、非レ仁也非二其有一取之非レ義、居惡有、義是也、又曰、舍レ生而取レ義者、此以患有レ所不レ辟也。士たる者はこれを味ふべき所なり。又世に誤つて、武藝ばかりを以て、士の道と心得るものあり。實の志無きは士の中に入るべきにあらず。子曰、如有二周公之才之美一使二驕且吝一其餘不レ足レ觀也已と。心正く直ならば、他に不足ありとも猶士と言ふべし。孔子又曰、邦有レ道穀、邦無レ道穀恥也と。然れば治世に幸を以て祿を得、無役にして食ふは恥べき事なり。況や君無道にて國治らず。然るに君を正すことあたはず、祿を貪り身を退かざるは、此又大なる恥なり、能々味ふべき所なり。此志の大略を云ふ。事は士の家に入りて聞かるべし。

○商人の道を問ふの段

或商人問ひて曰く、賣買は常に我身の所作としながら、商人の道にかなふ所の意味何とも心得がたし。如何なる所を主として、賣賣渡世を致し然るべく候や。

答ふ。商人の其始を云はゞ、古は、その餘あるものを以つて、その足らざるものに易へて、互に通用するを以つて本とするとかや。商人は勘定委しくして、今日の渡世を致す者なれば、一錢輕しと云ふべきにあらず、是を重て富をなすは商人の道なり。富の主は天下の人々なり、主の心も我が心と同き故に、我一錢を惜む心を推て、賣物に念を入れ、少しも麁相にせずして賣渡たさば、買ふ人の心も、初は金銀惜しと思へども、代物の能を以て、その惜む心自ら止むべし。惜む心を止め、善に化するの外あらんや。且天下の財寶を通用して、萬民の心をやすむるなれば、天地四時流行し、萬物育はるゝと同く相合はん。如此して富山の如くに至るとも、欲心とはいふべからず。欲心なくして一錢の費を惜み。青砥左衛門が五拾錢を散

して、十錢を天下の爲に惜まれし心を味ふべし。如此ならば天下公の儉約にもかなひ、天命に合うて福を得べし。福を得て萬民の心を安んずるなれば、天下の百姓といふものにて、常に天下大平を祈るに同じ。且御法を守り我身を敬むべし。商人といふとも、聖人の道を知らずんば、同金銀を儲けながら、不義の金銀を儲け、子孫の絶ゆる理に至るべし。實に子孫を愛せば、道を學て榮ゆることを致すべし。

○播州の人學問の事を問ふの段

或時播州の者上京致し、宿の主同道にて來り、物語して曰く、某こと悴一人持ちさふらふところに、學問を望み、何とぞ少の間京都へ罷出で、せめては小學や大學の講釋なりとも承り度きよし度々ねがひ候。汝に對して物語を致すこと、少し遠慮に候へども、物語を致すべし。姫路近邊にも内福にて、田地高も多く持ちたる者などは、學問をも致させ候所に、後に至つて難儀のすぢも出來申すよしを承る。一人の悴のぞみ申す事と云ひ、又少は目も明けてとらせ度く候へども、人柄あしく成るべきやと心元なく存じ、得登せ申さず候。

答ふ、學問に因て難儀ありとは如何なる事ぞや。

曰く、學問をさせ候者ども、十人が七八人も商賣農業を疎略にし、且帶刀を望み、我をたかぶり他の人を見下し、親にも面前の不孝はいたさねども、事によりて親をも文盲に思ふやうなる顔色見ゆ。然れども他人の聞き惡くき樣に、反り返答せぬことは學問の德かと思へども、親には默然とだまり居る者ぞと、云ふやうなる顔つき見え、又少しにても學問致したる者なれば、親達も遠慮せらるゝ體に相見え申候。夫ゆゑ手前の悴も若左樣に成り候へば、迷惑に存じ得登せ申さず候。如何いたし然るべく候や。

答ふ、學問と云ふ者は左樣なることを直す者にて候。實は御城下邊とは申しながら、田舍ゆゑにても候や。

曰く、左にはあらず、其中七八分ほどは、京都でも名ある衆中にて學べる者どもにて候。

答ふ、汝の物語を聞くに、其學し人は悉く人倫に違へり。教の道は人倫を明にするのみ。師たる者、假令敵に教ふればとて、聖人の道に背きて教ふべきや。學問の道は、第一に身を敬み、義を以て君を貴び、仁愛を以て父母につかふまつり、信を以て友に交り、廣く人を愛し貧窮の人を憐み、功あれどもほこらず、衣類諸道具等に至るまで、約を守りて美麗をなさず、家業に疎からず、財寶は入を量りて出すことを知り、法を守りて家を治む、學問の道有增かく

の如し。

曰く、其中に心得がたきことあり。衣類に美麗をなさずと云へり、先父母は我子に、他よりよき物を著せたく思ふは親の心なり、それに麁相なる衣類を著ては、父母の心を害ふゆゑ不孝にあらずや。

答ふ、人に背き麁相にせよと云ふにはあらず、我が言ふ所は約を守ることを云ふ。道に明なる父母ならば、如何ぞ禮に背き、奢ることを喜ぶべきや。孔子も禮與其奢寧儉と宣ふ。然れは禮に少かくる所ありとも、奢の害は大なりと知らるべし。又道に疎く奢を好む父母に、盡く心に合ふ事ばかりは成難し。成難きことを警て云はゞ、父母盜が好きな物はとて盜をせられんや、内證にて此を止むるは、眞實の心よりなす所なり。心を知る時は孝の道をそこなはず、父母の惡事をも止め、父母を道に向しむ。又道ある父母ならば、心自ら合ふべし、是學問の力なり。

曰く、汝の言へる如くなれば、悖に學問させても大なる疵とも成るまじ。然れども或人の云へるは、かやうに學者の風俗惡しくなるは、弟子の難にはあらず、儒者たる人、聖賢の心を知らずして教ふる故に、己に克ち禮に復ることを知らず、且我身に祿の望有るゆゑ、禮を以て進み義を見て退くこと能はず、其無禮を學ぶ故、己が文學に伐り、他人を慢る、これ學問の害なり、其發を原れば、師たる者の名聞と利欲の心、自然に遷りたる者なり、弟子の難にはあらず、師の難なりといふ人有り、如何なる事ぞや。

答ふ、汝左樣のことは云はざるものぞや。子貢謂子禽曰、君子一言以爲知、一言以爲不知、言不可不愼と。凡諸方に儒者の數何程有ることは知らざれ共、論語を讀ざる儒者有るべからず。論語の序に孔子及長爲委吏、料量平なりと。孔子大聖の德有りて、薪芻材木などを取聚むる役目を掌り給へども、不足に思召す事なきゆゑ、料量平かに勘定合り。此れ則天命に任せ給ふ所なり。又爲司職吏。其時には役目なれば牛羊を畜給ふ。莊長とさかんに長じ、蕃生ばかりなり。此時の天命に安じ給ふ。これを法として、士農工商共に我家業にて足ることを知るべし。論語を讀む者、かほどの事を知らざらんや。凡て道を知ると云ふは、此身このまゝにて足ることを知りて、外に望むことなきを、學問の德とす。汝の言へる諸生は此訣さへ知らずして、帶刀を望み、教の道を聞得ずして、却て師の難となすは誤なり。儒者たる者も聖賢に至らざれば、祿のことを曾て思はざるには非ず、思ふといへども、祿に志有りては仕るものにあらずと知る。是を以つて望む心を抑へて、不義の祿はうけず。

今日我身のあるところ則ち天命とする。是孔子を法に取るゆゑなり。此の義を知らば我職分を疎にする心有らんや。且國主より召すことあらば、我器量の拙きことを中立て先辭退すべし。豈仕ふると仕へざるとに心を動さんや。孔子曰、沽之哉、我待賈者也。待賈と宣ふは、士たる者は禮を以て招かるゝこと無ければ、飢ゑて死すとも、此方より出でて仕ふる者にはあらずと宣ふことなり。此程明に說き給ふことを知らずして、論語を讀むと云はるべきや。總て仕官となる者は、君を正し國を治むる爲なり。少しにても祿を求むる心にて仕ふる者は、必ず得たる祿を失ふことを恐るゝものなり。祿に心有つて君を諫め正すことは思ひもよらぬことなり。假令何程の書を讀み、世に博學と呼ばるゝ共、君を不義に陷るゝ者を學者と云はるべきや。既に冉求季氏に仕へ、柔弱なる所より季氏を諫むる事能はず、却て附益すことをなす。これに依て孔子冉求を深く責め給へり。若又祿に望有る者君に仕へなば我身を害ひ恥を受くべし。扨又汝は儒者たる人聖人の心を知らずといふは如何なることぞ、心は身の主なり。且儒は濡と云つてうるほすと云ふことなり。身をうるほすは、心よりうるほすことを知らるべし。孟子の一書も、心上より說き來る。心を知る時は、志強く義理照にして、以て上達すべし。此心を知らずば、昏昧とくらく放にして、

發明する所あるべからず、醫書に以二手足痿痺一爲二不仁一。仁者は天地萬物を以て一體の心となす、己に非ずと云ふことなし。天地萬物を己とすれば至ざる所なし。若心を知らずば、天地と己と別々にして、氣已につらぬかず、手足の痿痺るゝ病人の如し。聖人は我心を以て天地萬物を貫く。凡て師たるもの是心を知らずば、何を法として教へ、人の心を正さんや。然るを師家に立つ人、心を知らずと云ふ。夫は汝の在所などにて、書物を能く讀み、文字を知つて教ふれば、是も儒者と思ふならん。若又聖賢の心を知らずして教ふる儒者あらば、小人の儒にして人の書物箱と成るべし。君子の儒は心を正し德に至るの外他事あらんや。我文才に伐らず、利欲名聞を離れ、道に志有るを君子の儒とは云ふなり。然るに心を知るは古聖賢のことにして、今の世の者知らるゝことにあらずと云ふは、佛氏の末法萬年と云ふ教なり。一方にては佛氏を非り、我勝手に合へば末世は衰ふと云ふ教ばかり是として、取り用ふるは如何なることぞ。聖人は百世も變らずと宣ふにあらずや。此理を知らずして、書を講じ人を教ふること成るべけんや。

又問ふ、然らば、汝も心を知りて教へられ候や。其心を知ると云ふは如何なることぞや。

答ふ、心は言句を以つて傳へらるゝ所にあらず。心は體を以つて言ふ者あり、譬ば玉の鏡の如

し、四方上下を照す、程子の所謂明鏡止水是なり。又用を以て言ふ者あり、孟子の所謂心の官は思ふ事を司る、飢ゑては食を思ひ、渴しては飲を思ふ、子曰視思明、聽思聰、貌思恭是なり。凡て云へば聖人は、天地萬物を以て心とし給ふ。口傳にて知らるゝ所にあらず、我に於て會得する所なり。詩蒸民に曰、有物有則と。父子の間にて云は〻、父の慈愛有るは父の心、子の孝行有るは子の心、萬事にわたりてかくのごとし、是は聞え易きが如し。然れども一度決定し疑晴るゝことなきときは、正く聞得ることあたはず、此決定は信心堅固にして致す所なり。親より傳へて子に讓ること能はず、師も弟子に傳ふることあたはず、我知れば師の肯ふ所なり。こゝが孔子孟子も言句の絶えたる所なり。然ども天何言哉四時行焉百物生と宣へば、道は隱るゝ所にあらず。加樣に說き顯し給へども、此四時行焉百物生と宣ふは、如何なることぞと、心を附くる人少なり。莊子に所謂聖人の意を知らずして書をよむは、糟粕にして實の味はなく、皆糟なりと云へり。實の味は桶大工が輪を斲るごとく、徐則甘而不固、疾則苦而不入、不徐不疾、得之手應之心、口不能言と云ふも面白し。心を知らずして法を說くは、桶大工の事を傳聞きて、輪を斲るが如し。心に得ざれば、桶と成りて水を有つの用をなさず、教の道も斯のごとし。このゆゑに心を知る

を要とす。子曰七十而從心所欲不踰矩と。如是心の欲する通を行ひ給ひ、天下の法と成り給ふ事は、賢人も及ばざる所なり。然れ共心を知る時は一なり。譬て云は〻水のごとし。聖人は四海の水、大船を浮めて天下の財を通用し、萬民を養ふが如し。賢人は大河の水、一ケ國の財を通はし、一國を養ふがごとし。我等ごとき小人は小川の水、五町か七町の田地を浸し育ふがごとし。世を助くる上には違あれども、漸にして四海に到るときは一なり。心を知るもかくのごとく、聖賢に至るまでは、上中下の替りあれども、學びて止まざる時は終には聖賢に到つて一なり。我等ごときは欲する心を抑へ、惡を懲し困しんで勉むれば、漸にして到らるゝことを知る所なり。客退く。

或人問て曰く、今客に告げらるゝ如くならば、書を講じて弟子を集むる世間の儒者は、悉く聖人の心を識りて教へ候や。

答ふ、否しからず。書を講ずる而已にて眞の儒者とは云ふべからず、性を知りて身を潤すを儒者と云ふ。假令牛に汗し、棟にみつる程の書を讀むとも、性理にくらき者は、朱子の所謂記誦詞章の俗儒にして眞儒にあらず。汝も何方にて儒を聞るゝとも、其日利をせらるべし。日利せざれば、客の云へる如くに、學問に依て家業疎末に成り、不孝の本を習うて、身の害を

なすべし。心を求得て教ふるは眞儒なり。孟子の所謂、欲貴者人同心也、人々有貴於己者弗思耳。此味を知らるべし。

都鄙問答　卷之二

○鬼神を遠ざくと云ふ事を問ふの段

或人問て曰く、我朝の神の道と、唐土の儒道とは、異なる所あり。孔子告樊遲曰、敬鬼神而遠之可謂知とあり。我朝の神の道は左にあらず。然るに神と云ふ名は同うして、加樣に替あることは如何。

答ふ、汝は我朝の神明は、いかゞ心得られ候や。

曰く、我國の神明は、則れ親みちかづくを以て本とす、遠くを以て不敬となす。因て或は物に願ひ望むことあれば、願狀を以て神明を祈る。其願成就する時は、始の願狀の如く鳥居を立て、社の修覆などをすることなり。加樣に人の願などを受け入れ給ふ。然るに聖人は敬して遠ざくと宣へば、雪泥の違あり。是を以て見れば、儒學などを好むものは、我朝の神の道に背く罪人となるべし。

答ふ、敬して遠くと宣ふは左にはあらず。外神を祭るは敬ひ愼む而已を主とす。此故に道な

らぬ穢き願を遠ざけ、又先祖を祭るは孝を主とす。是遠ざくにあらず。扨敬して遠ざくと宣ふに、大に取違ひ有ることなり。神は非禮を受け給はず、然れば非禮の願を以て近づくを不敬とす、敬を遠ざくと宣ふにはあらず。汝のいへる如くなれば、我朝の神は願狀を籠めて成就に至る時には、願文の通に鳥居を立て、或は社の修覆などいたすを敬と思はれ候や。

曰く、然り。

答ふ、然らば今此に人あつていはん。汝が隣の娘を悋に妻せ度く候、媒いたし呉れよ、禮金をやらんと云はゞ、身の辱を顧みず媒せられんや。

曰く、夫は人を賤たる待なり、金に目呉て爭で媒の成るべきや。

答ふ、汝も羞惡の心有りて身の辱は受けざるなり。況や貴人に對して何にても御願ひ申す時に、此事成就なし下されなば、是程の金銀を進めんと言はるべきや。

曰く、貴人を輕ずるに似たり、何とて左樣のことのいはるべきや。

答ふ、貴人に言はれざる不義を以て、清淨の神明に祈を爲し、願の通に成し下されなば、鳥居や社の修覆致し奉らんと云ふ時、鳥居や修覆に迷ひ給ふあさましき神有るべきや。然るを非禮の物を推て捧げ、神明を穢し奉り、終には神罰を受くべし、恐るべきことなり。

心だにまことの道にかなひなばいのらずとても神やまもらん

との御神詠もあるぞかし。子路孔子の病を禱ることを請ふ。子曰丘之禱久と。禱ると宣ふは、誠の道に合へることなり。誠にかなはゞ何ぞ祈ることあらんや。然るを我朝の神道に違ふとは如何なることぞ。凡て聖人の書は、箇樣の迷を解くべき爲の書なり、書に依て迷はば書のなきこそ勝れん。古より神國の助に儒道を用ひ給ふことを知るべし。我朝の神も、非禮非義の賂を好ませ給ふべきや。清淨潔白の水上なる故に、神明と申し奉る。凡て神信仰する者は、心を清淨にする爲なり。然るに種々樣々の非禮非義の願を以て朝暮に社參し、色々の賂を以て神に祈る。これ不淨を以て神の清淨を無する者なれば、これぞ實の罪人にて、神罰を受くべし。子曰獲罪於天無所禱也と。聖人は天命の外に望むことは、皆罪なりと宣ふ。願と云ふは多くは手前の勝手づくなり。手前の勝手づくをすれば、他の爲に惡しし。他を苦むるは大なる罪なり。罪人となつて爭で神の御心に合ふべきや、萬民に隔なきこそ神なるべけれ、それに一方は惡くとも、一方の善きやうに願をかなへ給はゞ、最眞の沙汰なり。願叶ふと叶はざるとを、譬て云はゞ、親より子に家督を讓るごとし。子よりの願はいらず。

身持正しければ家督を受く、又身持放埒なれば、家督を受くることあたはず。願の成就するもせざるも此に同じ。天命の我身にあることを知るべし。神の御心は鏡の如し、何ぞ曇屑の私有んや。それに成れること有れば、神の納受と云ふ。是を他人は聞きて、誰は何を神に捧られしゆゑに彼願叶へりと云ふ。如此取沙汰すれば、終には神明を賂取の神と成し、穢し奉ること哀しきにあらずや。是天命を知らざるゆゑなり。

又問ふ、或人の曰く、子曰非其鬼而祭之諂也祭べからずと宣ふ。我朝には土地の神、又太神宮といへども、御恩の爲に五穀の出來初穂や、或は神樂などを捧奉ることなれば、兎角唐土とは違有ると云へり。然るに汝神は一刻の如くに言へるは、如何なることぞ。

答ふ、中庸に所謂、鬼神爲德其盛矣乎、體物而不可遺と云へり。鬼神とは天地陰陽の神を云ふ。體物不可遺とは、造化は鬼神の功用にして、鬼神は萬物を總主れると云ふ。又我朝の神明も、伊弉諾尊伊弉冊尊より受け給ひ、日月星辰より萬物に至まで、總主給ひ殘所なきゆゑに、唯一にして神國とは云へり。こゝは工夫有るべき所なり。然れども唐土に替り我朝には、太神宮の御末を繼せ給ひ御位に立せ給ふ。依て天照皇太神宮を宗廟とあがめ奉り、一天の君の御先祖にてわたらせ給へば、下萬民に至まで參宮と云うて盡く參詣するなり。

唐土には此例なし。此國には宗廟と尊ぶ故に、神樂初穂を捧奉る。今日天下の萬民より君へ貢物を捧るが如し。然れども御祭禮を其者自身に行ふことは能はず。國主といへども天子の御神事は行れざることなり。其位にあらざれば祭らず。まつらざれば唐土と違はなし。語曰、三家者以雍徹、子曰。相維辟公、天子穆々、奚取於三家之堂と。魯國の三家は、大夫の身として天子宗廟の祭に歌させ給ふ、雍の詩を歌うて己が先祖を祭り、又泰山に旅せんとす。加樣なる分を僭え理に背くことをなせば、せまじき事をするゆゑに、其鬼にあらずしてこれを祭るは諂なりと宣ふ。且孟子も社稷の神は民の爲に立つと宣ふことなれば、出來初穂を捧る如きは唐土にも有るべし。我朝にも初穂や神樂を捧ぐるを祭とは云はれまじ。譬ば祇園會御靈祭なども其神の祭なり。其土地に住み障なきことを喜びて、我身を祝ふと云ふものなり。又下々に何程さはりありとても、御神事は行はるゝなり。これにて我祭にあらざること明なり。俗說に拘ず、本を推して工夫有るべき所なり。

○禪僧俗家の殺生を譏るの段

或禪僧來りて云ふ、今日さる方へ參りしに、子息の婚禮有りとて魚類等をつかひ、牛物を殺し

殺生戒を破り、目出度ことにものの命を取る。實に俗家はあさましきことを爲し、是を嘉儀とする、哀しい哉と言へり。

答ふ、汝佛法を學ぶといへども、小乘を知つて、佛の大乘を知らざるは惜しい哉。

曰く、知らざるにはあらず。如何と云ふに、佛法は先五戒を有つを第一とす。其中に殺生戒を重き戒とす。儒家にて言はゞ、五常の仁の如し。儒家に於て仁を害ふ者を善とすることありや。汝は儒を說くといへども、いまだ仁の意を知らざれば、聖賢の本意に闇し。

答ふ、仁は慈愛の德有りて私心なきを云ふ。汝如き私心を以て仁を知らるゝ所にあらず。汝は禪家を學ぶといへども、其家の本意を知らざると見えたり。既に南泉和尙は猫を殺し、蜆子和尙は海老を釣りてこれを喰ふ。所作に依りて見れば、是等の僧は殺生戒を破る惡僧と云うて盡く捨てんや。又汝日々の殺生擧げてかぞへがたし。先今朝より喰ふ所の米の數幾粒と云ふことを知れりや。

曰く、五穀は非情なり、殺生にはあらず。

答ふ、大乘の法に、有情非情とへだて見ることありや。隔ありと云はゞ、艸木國土に佛性なしと云ふべきか。神代卷に曰く、伊弉冊尊曰、我千首をくびりころさんと曰ひ、伊弉諾尊曰、我千首あまり五百首を生ましめんとの給ふ。此兩神は陰陽の御神にて御座す。天地の間は自然に生むと殺すとの二つ有る事を知るべし。今日物を用ひるもこれに效へり。萬物一理にして輕重あり、其次第たがはざるを以つて善とす。此理を以つて天地の行はるゝことを見るべし。强き者は勝ち、弱き者の負くるは自然の理なり。近く知らんと思はゞ、鳥獸にても見るべし。鷲鵰は諸鳥や畜類までを取り喰ふ。又鴉や鷺は魚類等を取り喰ふ。雀や其外小鳥は蜘蛛や菜虫などを喰ふ。犬狼は鹿猿等を取り喰ふ。此等の類は殺生とせんか、天道流行とせんか。戒律も天理を知らずしては有たれざることを告ぐべし。夏に至つて土用の時節などには、米を舂き置くこと一兩日にして、糠虫を生ず。此糠虫至つて微塵の如くにして見え難し。米の中へ手を入れし時、其手が痒き者なり。其かゆき時に黑塗の器に米を入れ、其米を取りて其跡を白日に能く見れば、動く形見ゆる者なり。定てこれを糠虫といふならん。假令五穀は非情なりと言ふとも、糠虫あれば殺生戒を破るなり。戒律の僧は夏に至つては五穀も食ふことはなるまじ。食はざれば忽に死すべし。こゝに至り、喰うて全く有つ事を知るべし。佛の敎に從うて戒を有たんと思はゞ、先我を離るゝことを修行すべし。此身このまゝにて、地水火風空なりと、一度見性する時は、我も世界の一物なり。其時に人と糠虫とはい

づれが貴からん。至つて賤しき糠虫を助けて、至つて貴き人を殺すことはなるまじ。佛は無心にして不可思議を體となす。其釋迦も糠虫のある五穀を食し給ふ。然れば貴き者の爲に、賤しき者を殺すことは遁れ給はず。殺生戒の源もかくのごとし。天理を知れば、戒は易く有つべし。神佛聖人は何れが師にも弟子にもあらず、皆心の欲する儘なれども、自天道なり。天理を知らずしては何れの道にも合ふべからず。默して工夫せらるべし。天道は萬物を生じて、其生じたる者を以て其生じたる物を養ひ、其生じたる物が其生じたる物を喰ふ。萬物に天の賦し與ふる理は同じといへども、形に貴賤あり、貴きが賤しきを食ふは天の道なり。又佛氏には草木國土悉皆成佛といへば、萬物皆佛なり。然れども形に貴賤あり、貴き人間佛が、賤き五穀佛果佛より水火佛までを喰うて、世界は立つものなり。此理を知らば、聖人の物を用ひ給ふは、貴きと賤しきとは禮を以つて分つ、貴き者の爲に賤者を用ひることを知るべし。證を以ていはゞ、君は貴く臣は賤し。賤き臣、貴き君にかはり死することを聞く。貴き君の、賤き臣下の身に代り死したる者を未聞かず。此賤しきが貴きにかはるは、天地の道にして全く君の私にあらず。聖人物を用ひるに、禮を以てし給ふは卽此所なり。此故に臣として君を棄つる者を賊臣と言ふ。汝も今朝より、幾萬とも數知らず、五穀佛と果佛を殺し

喰うて身を養ふ。然れども此理を知らず。知らざれども、暗に賤を以て貴きを養ふ理に合へり。汝小乘に拘りて我は殺生はせず、非情の物を喰ふと云ふなれば、草木國土皆佛と說き給ふ佛語は詐とするや。是を詐とせば、佛經は皆破り捨つべし。捨てずして用ふと言はゞ、汝も大佛が小佛をくらひて殺生するに違はなし。我は幾の殺生し、身命をつなぎ居ながら、俗家は目出度嘉儀に生物を殺し、淺間しきことと言ふ。佛の本意をしらずして他を譏る事、大なる罪ならん。汝如き法にくらき僧多きゆゑに、徒然草に、僧に法有りて、法を以て身を賊ひ、又君子に仁義有つて、仁義を以て身を賊ふと譏れり。君子は仁義あるに由つて、君子といふに、如何なる事ぞと眼をつけて見れば、孟子の舜由仁義行非行仁義也とのたまふこと明ならん。無極の眞を體とし給ふ外に、仁義と云ふ名目あらんや。無我の舜なんぞ仁義を期にして行ひ給ふべき。聖人の道は一理渾然たる所より行はるゝ事を知り、佛氏も亦、本來は無法なりと會得せば、兼好に譏るゝこともなかるべし。汝禪家を學ぶといへども、本來の面目は不會なり。依つて俗家に目出たき嘉儀に殺生するは、あさましきことなりと云ふ。汝も自性を知らば、五戒はいふに及ばず、百戒二百戒にても有つべし。忽にすべきことにあらず、急々に會得あるべきことなり。此理を得ば、其時にこそ、出家は出家にて殺生戒をたもつ

と知らるべし。俗家は俗家にて、目出たきことに魚鳥を用ひて善なることを知らるべし。何をか疑ひ何をかあやしまん。俗と出家と混雜する者にあらず。我心易きことを以て喩へん。先四體は一つなれども、首は上に有つて足の代にはならず、足は又手の代には遣はれず、口は體を養ふ入口なれど、目の代にならず、耳は鼻の代に香をきかず。凡て天地の形は照然たり。因りて物々此形替るに因りて法あり、其物に因つて法は替るなり。然らば何ぞ佛の法を以つて、俗家に混雜して用ひんや。心を清すには佛法も然るべし、身に行ひ家を齊へ、國天下を治むる法には、儒道を以つて善とせん。海川を渡るには船を以つて善とす、陸地を行くには馬駕籠を以つて善とす。佛法を以つて世法を治めんとするは、馬駕籠にて海川をわたるに同じ、五戒を有つ身として、政を行ひ罪人を殺すことは如何、又殺さずば政道立つべからず、刑罰なくば政は如何。汝のいへる所は、水火を一致にせんといふが如し。一致にせば水は湯と成り火は消ゆべし。水火は水火と分れざれば、爭で世を助けん。此理如何。

○或人親へ仕への事を問ふの段

或人問うて曰く、私祖父の時分に相勤め候手代、只今にては法體致し居り申候。この者毎々私を不孝者の樣に言ひなし、孝行いたせと度々申し候へども、私さのみ不孝の覺もこれなく候。分て孝行とは、如何樣に致し然るべく候や。

答ふ、孝行と言ふは、只志を養ふを本とす。昔曾子と言へる人、その父を養ふに必酒肉あり、食し終つて膳を除き去んとするとき、父に請うて曰く、この餘は誰にか與へ申さんと問ひ、若又あまり有りや否やと問へば、必ありと答ふ。親の意に、誰にか與へんと、思召さんことを恐れ給ふ。かくの如く、志を養ひ、親に事うまつるを孝行とは言ふ。

曰く、我父母を養ふに、衣服食物など如何やうにいたしても、其善惡を申すことなければ、父母の志を害することは有るまじく存じ候。

答ふ、汝は父母の體を養ふを孝行と思ふ故に、禪門が忠義有つていへる事を聞たがへり。我は志を養ふことを言ふ。我思ひ當る所を以て問ふべし。まづ汝は折々遊興に參られ、夜更歸らるゝと聞けり。まことに左樣に候や。

曰く、我も前方は度々出で申し候ところ、親共甚不屆の由を申し、當分禁足致すべき旨申渡し候ゆゑ、私も迷惑仕り、禁足の請合致しかね候ところ、右の禪門挨拶いたし、若き者のことなれば、氣晴の爲に、月に一兩度づつの遊興はゆるさるべき由申し、兩親ともに得心、

たし、免にて出申し候。又夜更歸り候ことは、遐迦のことゆゑ、緩と慰み歸り候。然れども、父母の志を害ふほどのことは御座なく候。元來親ども小氣ゆゑ、家來の者を起し置くことを氣の毒に存じ、門を叩せまじき爲に、八つ時分まで相待ち居申し候へども、數度のことにあらず、月に一兩度のことにて、その代りに翌日は勝手次第寐られ候へば、是も傷にはなり申さず候。

答ふ、汝遊興に出ること、遐迦のことゆゑ、父母を夜更くるまで待せ置きても苦しからずと言へり。先親に事うまつる者は、夕には遲く寐ね、朝には早く起きて、父母の安否を問ふは子の道なり。それに汝は身の遊興の爲に、寒暑の苦もかまはず、夜更くるまで兩親を待たせ置き、快く遊興せられ候や、總じて待事は退屈なるもの也。それは待つ斗のこと也、兩親は汝の歸られし顏を見るまでは、酒などが過はせぬか、喧嘩にてもしはせぬか、寒うは無きか、風ひきはせまいかと、色々品々に思ひ煩ふ。且に內徒の者の心までを推はかり、是ほど夜更せらるゝを、兩親はいふ事はならぬかと、思ふべきとの心遣、又下女や小者は草臥て、最早八つも過ぐるなどつぶやくを聞く時は、心を傷る事多かるべし。其苦み傷るゝことを不知、父母を夜更るまで待たせおき、翌日は勝手に寐らるゝとは、いかに愚なればとて、左樣の不孝をなし、父母の志を害ふことぞや。扨又汝は家業のことは、如何心得ゐられ候や。」曰く、家業のことは、いまだ心懸もなく候。子細は、只今にては朋友の交多く、諸皷茶の湯なども心懸なくては、交あしく候ゆゑ、右の稽古ごとに取紛れ、家業の儀はさして心がけもこれなく候。これは手代どもの役目なれば、致さずとも相勤り候。然るに右の禪門親どもへ申し候は、總じて家業のことは、子供の時より見習せ置かるべき由姦しく申し候。それゆゑに、親父も禪門が手前を思ひ、商賣のことも見習よとは申し候へども、母など內證にては、彼禪門が言ふことを甚腹立し、主人の子を澤山そふに、我子や孫を言ふやうに、いはれざる世話をして、人に嫌はれ、長命するものかなといへども、親父は又恐るゝことがあるかして、禪門が言ふことには、一言の返答もせず、聞いてばかり居申し候。

答ふ、家業のことは手代に任せ、遊藝に閑しきと言ふ。汝今安樂に暮すは、家業の蔭にあらずや。職分を知らざるものは、禽獸にも劣れり。犬は門を守り、鷄は時を告ぐる、先武士方に馬を繫るゝほどの人、騎ことを知らざるはあるべからず。書翰は人に書かせてもすむ。我代りに家來を馬には騎せられまじ。商人とても我職分を知らずば、先祖より讓られし家を亡すに近かるべし。禪門のいへるも此なるべし。其忠ある者を母の腹立せらるゝは、金言の耳に

逆ふと言ふものなり。臣の諫を受入るゝを眞の君と言ふべし。然るに彼が長命を嫌ふは、忠臣を殺さんことを願ふなり。是桀紂に替はなし。不忠の者ばかり殘りなば、家の滅亡を待つものなり。傳に曰く、小人之使爲國家菑害竝至雖有善者亦無如之何矣と云へり。又親父も家業のことを言はるゝは、禪門が言はせることと思へるは、汝大に過てり。禪門がと理にあたるゆゑ、義に責められて言はるゝなり。孟子曰、家必自害而後人是害と今汝も職を忘れ、身を害ることをなす。此こと得心なくば、家賣り果して後に思ひしらるべし。又汝は短氣にて、毎々兩親心遣せらるゝと聞く。いかなることぞや。

曰く、私生質短氣に御座候。これはなほし申し度候へども、生質ゆゑ是非なく候。然れども兩親世話に成りしことは、只一度田舍の小者を抱置きしに、不調法者ゆゑ、或時打擲いたし候ところ、疵附き泣きくるしむを、漸くしづめ、其疵癒えざる内に在所へ歸へらんと言ふ。夫ゆゑ兩親も手代共も、是には迷惑いたし候。その後は左樣のことは御座なく候。

答ふ、汝生質にて短氣なりと云へり。生質に短氣と云ふ事あるべからず、此氣隨の爲すところなり。貴人に對し氣隨出るものにあらず。愼み直さばなほらざる事いかでかあるべき。已に其小者を打擲せしに、小者怒恨ことあるまじきや。甚うらみ怒るといへども、主人のことなれば、忍びこらへ居るなり。その小者を他人打擲せんに、汝に打たるゝ如く堪忍いたし居るべきや。他人には是非に離をなさん。然ども主人の事ゆゑ、手向せざるは。愼の致す所なり。是を以て見よ、愼でなほらざること有るべからず。まして父母へ此つゝしみなくば、畜類に替ることあるまじ。又兩親の世話に成りしは、たゞ一度なりと云へり。一度輕きにあらず、小者を打擲し血を出すとき、兩親の心を察せよ。人の子に疵をつくれば、その疵を恐るゝのみならず、若し死するときは、汝の命を取れんことを恐れて苦むなり。喩ば魏の文帝の時、凌雲臺を築れ、額をかゝせんため、韋誕と言ふ者を籠に入れ引上られし、其高さ地を去ること二十五丈なり。既に下るれば、黑かりし髪も忽に白髪となれりと。只此一事の恐れなれども、時の間に白髪となる。汝の兩親もおそれ傷むこと、身に釘をうたるゝが如し、五年のとしも一度に寄らん。老は卽死の本なり。刃を以て弑さずとも、殺すになんぞ替りあらん。その外者直に死することあらば、汝が身に及ぶべし。左あらば、一朝の忿に其身を忘れて、以て其親に及ぶ。不孝是より大なるはなし。

曰く、前に申す如く、短氣は宜しからず存じ候まゝ、是は何卒なほし申し度候。親の氣を傷むることは、左程までには存ぜず候。知らざる所は是非なし。又親切に致すところは、心一杯

つくし申し候。つねに親どもは酒を好み、たべ過すこと御座候。其節はうかゝと長咄をし、寐ることを知らず、母なども難儀に存じ候。且二日醉を致し苦み候故、身を知らぬ酒の飲やうと存じ、以後は控られ候やうに諫め申候。加樣の類は、親を思ふ所なれば、孝行にては有るまじく候や。

答ふ、汝の言へる所子たる者の道に背けり。易に家人に嚴君ありと言へり。妻子より言はゞ、家の主は君の如し。然れば母も汝も家來に同じ。家來の身として我退屈するを以て、主人の慰を止る事、法に於いて有るべからず。且母の難儀と言ふ。我道にそむくのみならず、母までを女の道に背しむ。重々の不孝あげて數へがたし。己が身治らずして、人に及ぶべきことにあらず、況や親に於いてをや。扨又汝の遣るゝ金は何方より出で申し候や。

曰く、親ども方より、小遣金として渡し候へども、是は一ヶ月にも足り申さず候ゆゑ、不足の所は手代共を賴み、請取り申し候。然ども色々のことを申し、思ふ程渡し申さざるゆゑ、又母に申し、五兩三兩宛貰ひ、其上の不足は、此彼にて五兩十兩借用致し候。然れども二三年の中に親共隱居いたし候へば、早速に濟し申し候。他人も是を存ずるゆゑ、五十兩百兩借り候ことは、心易きことにて、何の世話もこれなく候。

答ふ、汝の言へる所を聞くに、既に家を亡ず前表あり。その子細は、先親より渡さるゝ小遣金は、天の與る汝が祿なり。その祿を十分の一にもつかひ不足といふは、法を知らざる奢者なり。奢者は天これをゆるし給はず。又不足の所は手代を賴み、請取るよし、その金銀は手代の物か汝の物か、我物を自由に得せずして、手をつかね、手代に求むること有るべからず、我令を出し、彼より持來て渡すべき筈なり。それを此方より手をつかね求るは逆なり。此汝終には寶を失ひ、手代の家に養れん兆見れたり。其上の不足は母の方より、内證金を貰ふとや、母は此方より與へて養ふものなるを、反てせぶり受く。女は多く金銀の貯なきものなり。母も定て、親兄弟の方にて借り調へ與へられん。加樣なる苦勞をかけ、其辨を知らざるは哀しきことなり。その外不足は、他人より借り用ふるとや。自の財寶ありながら、他人の心を伺ふ、是汝が威衰へる前表なり。他よりは家屋敷に心を附けて貸すなれば、終には他の物とならん。是天汝が財寶をくつがへさんとする兆既に見る。詩曰、天之方蹶無然泄々と云これなり。扨又月に一兩度の遊に、何とて左樣に金銀入り申し候や。

曰く、いかさま是の不審は尤に候。一事を擧げて言はゞ、芝居の顔見世毎に、棧鋪一三軒も借り候へば、相應の雜用かゝり申し候。委細は申すに及ばず、思召の外入用これあり候。此味

は學知の及ぶ所にては此なく候。

答ふ、芝居顔見世、一度に棧鋪二三軒も借ると云へり。其客と言ふは、振舞の雜用のみならず、其上悉金銀を出す客ならん。其金銀の出る客を、二三軒の棧鋪に一杯おかば、親の渡さるゝ小遣にて足らざること聞こえたり。いかさま世に稀なる嚢袋なしとは汝がことなり。家内の手代は、一分二分五厘三厘を爭ひて商賣をなし、汗を流し設くる金銀を、一度に遣ひ費す事、家内の人の血肉を吸からすに同じ。殷の紂王の比干が胸をさくに異ならず。如何となれば、紂王は我を助け諫る者の胸をさく。汝は家を思ふ手代の心を痛り。これ忠義の者を害ふこと、紂王になんぞ替あらん。恐るべきことなり。人たる道を以て言はゞ、其一日遣ひ費す金銀を家内の者に惠まば、汝が志を神の如くに思ふべし。家内の者に神の如くに思はれなば、主人の法と成るべきに、汝ごとき者は必ず内にては吝きものなり。兩親は是を見て、あの細さにては、多分の金は遣ふまじと思ひ居て、津波に値たる如く、家屋敷一度に取るゝ時のいたましさよ。扨又右のことを、供の小者や男どもは、家内にて物語は致さず候や。

曰く、其所にはぬかりなく、小者や男どもには心づけを致し、堅く口を閉ぢおき候ゆゑ、家内には露塵存じ申さず候。

答ふ、小者下男まで、口を閉ぢて置くゆゑ、家内には少しも知らずと思へるは甚愚なり。汝が悪事は、我よりいはざる先に天下に明なり。中庸に莫見乎隱と說給へり。未形といへども、幾は已に動く。動けばこれ明なり。人は知らずと思ふとも、汝が心に悪事と知る。しる故に口をとゞ。悪事と知らばなんぞ速に止めざる。子曰見義不爲無勇也と。其上小者悪所金のつかひやうを見覺え、又僞を聞き習ひ、成人の上汝の教へし通りを守り、金銀を盜みつかうて、引負する手代ばかりに成るべし。これ我導きに依つて、人を害ふものなれば、加樣の手代出來るとも、汝いひぶんは無きはずなり。然るに引負せし手代あらば、請人にあづけ、難儀をさすべし。かくの如く、主從ともに放埒にて悪事をなさば、汝の家を亡すことも目下なるべし。子言衛靈公之無道也、康子曰、夫如是奚而不喪、孔子曰、仲叔圉治賓客祝鮀治宗廟王孫賈治軍旅如是奚其喪とのたまふ。靈公無道なれ共、三人の臣を用ふるゆゑに、國を有てり。汝が家に禪門あるは、衛に三人の臣あるが如し。然るに禪門死せんことを願ふ。禪門死せば、專ら汝が令に從ひ、終には家を亡すべし。然れども心は是變易なり。汝今までの過を得心して、改むるときは忽ち變じて善となり、孝となるべし。語曰、不恒其德或承之羞、子曰、不占而已矣と說き給へり。汝が占ひ此ところに

て有るべし。これまでの所作を占ひ變るものならば、人の進むる羞を免れ、子たる道に入つて、家榮え長久なるべし。

○或學者商人の學問を譏るの段

或學者問うて曰く、我も學問を好む、汝は表に學問を言ひ立て、教を弘む。道は聖人の道なれば替ること有るまじ。然れども宋儒は孔孟の心に違ひ、老莊禪學に似て甚理を高く說く。此故に略心得がたきことあり。汝宋儒の註は用ふとも、定めて孔孟の本意を弘むると思ふらん。汝が教とする所物語り有れ。不得心の所に不審をいふべし。我不審を開かるれば、是卽學問なり。先他に導るゝ所は、何れの所を至極とせらるゝことぞ。

答ふ、學問の至極といふは、心を盡し性を知り、性を知れば天を知る。天を知れば、天卽孔孟の心なり。孔孟の心を知れば、宋儒の心も一なり。一なるゆゑに註も自合ふ。心を知るときは、天理は其中に備る。其命に違ざる樣に行ふ外、他事なかるべし。

曰く、汝は理を直に命と言ふ、是大に誤れり。理は玉の理なり、又惣て物の理なれば、通るまでのことにて死物なり。命は書經にも惟命不于常と云へり。天の降せる命なれば、活物の性なり。斯のごとく別なり。然るを死活を以て一致とするは如何なることぞ。

答ふ、汝のいへるところは枚葉にかゝはり、文字の沙汰にて本を失せり。君子は本を勉むと言ふ。萬事に涉りてかくのごとし。先初學の者は本末を知るを先務とすべし。末に至つては繁多にして分れ難し。天地有てものを生じ、物生じて後に名あり、名有りて後文字を加へて名を書す。文字は伏羲の後倉頡が作ると言ふにあらずや。いまだ名も附けず文字も無き前より天道あり、天道といへども人有りて附けたる名なり。我が言ふ所を名を離れて聞かるべし。既に聖人は仁を本となし、老子は大道を以て仁の本となし、道と仁と名は二つなり。文字に依ていづれが本と論議分るべきや。おともなく臭もなくして萬物の體と成る物を、暫名づけて、乾とも天とも道とも理とも命とも性とも仁とも言ふ。惣ていへば一物なり。乾は元亨利貞といふが如し。乾は利なり、元亨利貞は命なり、體用の謂なり。文字を離れて察よ、理と命と名は二つあれども一なることを知るべし。譬へば川と淵との如し。流るゝ所にては川といひ、溜る所にては淵と言ふ。理は淵の如く、命は川の如し、動靜有りて一なり。公伯寮愬子路季孫、子曰、之道將行也與命也、道之將廢也命也。孟子曰莫非命と。孔子孟子ともに道の行はるゝも廢るも、治亂共に皆命なりとの給へば、命は天の行はるゝ總名なり、理

は其體なること決せり。昔者聖人之作易將以順性命之理、是以立天之道曰陰與陽、立地之道曰剛與柔、立人之道曰仁與義、兼三才而兩之。陰陽剛柔仁義と分れども、天地人の三つを窮め盡す時は一箇の理なり。此性命の理を盡し給ふは聖人なり。このゆゑに無爲にして治る、天道に同じ。子曰無爲而治者其舜也與。しかれば天理に順ふ外に道あらんや。書經の意も、理に逆ふ時は天命變じて亡ぶべしとの敎なり。依て惟命不于常といへり。此を法として、今時も理に順へば天命に合ふ。理と言ふは、天地より人間畜類艸木まで行はるゝ道、それ〴〵に分れ備りたる體を、假に名附けて理と言ふ。又文字は天地開闢よりいはゞ、數億萬歲の後に作り初めしものなり。これを以つて天のなしなす無量の物に合ずとも、萬分の一にも不足、此理を知るべし。文字に泥むは糟粕を味ふに同じ。色々理窟をつくるとも、爭で文字にて盡すべきや。元來天地の體は、文字を離れて死活無き故に古今變らず。命は用なるゆゑに動きて變るなり。理は體なるゆゑに動かずして常なり。其變ざる物を理と名づけたると知るべし。文字は事を天下に通す器の如し。理は其主なり。子曰謹權量と。稱錘や斗斛、天下の通用を以て寶とす。學問の道も亦かくの如し。理をきはめ天道聖人の心通用するを以て寶とす。聖人窮理盡性以至於命、給ふに依つて、古今に通用して寶

となる。此理を知るを學問の本と決定すべし。理明なれば萬事時の宜しきに合ふべし。」

又問ふ、性理を知れば時の宜しきに合ふと言ふ。其時に宜しきと言ふは行ひ難きことなり。然るを汝は易きが如く言へり。夫は我爲に宜しきか、人の爲に宜しきか。

答ふ、宜しきと言ふは、其座雙方ともに宜しきを言ふ。

曰く、雙方ともによろしきこと有るべからず。譬へて言ふべし。先こゝに木綿一疋買ひ、汝と是を半疋づつ分て取んに、汝も織かけのよき所をのぞむ、我も織かけのよき所をのぞむ。この理は木綿のことに限らず、萬事にわたるべし。又奉公人を抱へ、或は役目等の事に附きても、同日に來る者、同じ役目を言ひつくる時に、凡て一方を上に立て、一方を下に立つる、其上に立つ人は宜しからん、下に立つ人は快からず不足あるべし。是を以つて見れば、兎角雙方ともに宜しき事はならざることなり。

答ふ、其所に時に宜しきこと有りて、一々にこと分るゝなり。

曰く、其一々事の分ると言ふは、如何なることぞ。

答ふ、其奉公人、雙方同じ器量ならば、門口を先へ入りたるを上に立つべし。凡て門口をならびて出入はせず。器量に甲乙有らば器量の勝れたるを上とすべし。又役目の上にて言ふ時は、

先に進むは同日と言ふとも是を上とすべし。是皆天の爲す所にして私にあらず。こゝを以て時に宜しきと言ふ。

曰く、我言ふ所の木綿のこと、是は斯細なることなれども、汝が心に濟まず。それゆゑに返答せざるか。

答ふ、是は言ふまでに及ばざることなり。こゝを以て返答せず。

曰く、其返答に及ばずとは、如何なることぞ。

答ふ、孔子も己所不欲勿施人と宣ふ。我否と思ふ事は人も嫌ふものなり。我より其木綿を分くるならば、汝に能方を渡さん。汝より分くるならば、我能方を渡すべし。又汝の方へ織かけを取り、奥の悪しきところを我に渡さば、汝の世話にせらるゝゆゑにその筈なりと思ふ。加樣にさばき置く時は、悉く宜しからん。汝に能物を渡さば汝は喜び、我は義を以て仁を養ふ、是宜しきにあらずや。

曰く、夫にては汝の爲に損なるが、損の往くを喜び、是を義と言ふは如何。

答ふ、否損にあらず、大に利あり。

曰く、忽に損の見えたるを利と言ふは、如何なることぞ。

答ふ、孟子も君子捨生而取義者なりとのたまふ。君子は命をすて、義を取る。木綿は輕きことなり。假令一國を得萬金を得るとも、道にたがはゞ何ぞ不義を行はん。外物の損を爲し、心を養て利を得る、此外に勝ること何か有らん。

曰く、汝は財寶を捨てて唯義をたつとむと言ふ。然らば不義を嫌うて、利ありとも決してせざるか。

答ふ、其不義を行へば心の苦となる。苦を離るゝ爲にする學問なれば、なんぞ不義を以て心を苦しむることをせん。

曰く、商人などは、毎々に詐を以つて利を得ることを所作とす。しからば學問などは決して成るまじきことなるに、汝が方へは多く商買人相見え候由、汝は此にては此に合せ、彼にては彼に合せて教ふるなれば、孔子ののたまふ鄕原にて、德の賊とは汝が事なり。學者にあらずして流を同うし、汚世にかなうて世に媚へつらひ、人を誣せ、己が心を欺く小人なり。門人はこれを知らず、汝も學者の中と思はるゝは、恥しきにあらずや。

答ふ、君子於其所不知蓋闕如也と孔子ものたまふ。凡て知らざる事は闕き置くべきことなり。此理を知らずして、言ひちらすは野卑ことにあらずや。扨汝の言へる所は、世の人も疑

ふ所なり。總ていへば道は一なり。然れども士農工商ともに各行ふ道あり。商人は言に及ばず、四民の外乞食までに道あり。

曰く、然らば乞食にも又道ありや。

答ふ、嘗て聞く、或人江州へ行き侍りしに、一の非人村あり。其所に橋の渡り初有りしを、立止りて見侍りしに、非人頭とおぼしき者、圓坐に座して有りけり。村の者ども、橋の渡り切の祝儀を持ち來る。其中より痩せて色惡しき男一人、茄子三つ持來て頭の前に進む。頭たる者是を見て、汝は頃日相煩ひ居ると聞きしに、何とて此茄子を持ち來るやと問ひければ、左樣に候、永々の病氣なんぎ仕り候所に、此度橋の渡り初につき、頭殿へ祝儀を致すべき由、小頭より申し渡し候ゆゑ、前夜他所の畠へ往き、盜み申候と言ふ。頭の言ふ、乞食は盜をせまじき爲なり、盜をなせば乞食はせず、汝は村の住居は成るまじきと言うて、小頭を召で彼が快氣次第村を拂ふべし、病氣の中は番を致すべしと、言ひわたしけるとかや。飢て死すとも盜まぬは乞食の道なり。子曰君子固窮、小人窮斯濫矣　困窮しても正きを守らば君子なり、困窮して放濫は小人なり。小人となつて、乞食に劣るは哀しきにあらずや。

曰く、扨商人は貪欲多く、毎々に貪ることを所作となす。夫に無欲の教をなすは、猫に鰹の番をさするに同じ。彼に學問を進むるは、前後つまらぬことなり。其濟ぬことを合點して、教る汝は曲者にあらずや。

答ふ、商人の道を知らざる者は、貪ることを勉めて家を亡す。商人の道を知れば、欲心を離れ、仁心を以て勉め、道に合うて榮ゆるを、學問の德とす。

曰く、然らば賣物に利を取らず、元金に賣り渡すことを教ふるや。習ふ者外には利を取らぬことを學び、內證にては利を取れば、實の教にあらずして、反て詐を教ふると言ふ者なり。如何となれば、元來ならぬことを强るによりて、加樣に前後合ざることあり。商人利欲なくしてすむことは、終に聞かざることなり。

答ふ、詐にあらず。詐にあらざる子細を告ぐべし。是に君に仕る者あらん。俸祿を受けずして仕る者有るべきや。

曰く、それは無き筈のことなり。孔子孟子といへども、祿を受けざるは禮にあらずと宣ふ、如何ぞ有るべき。是を受くる道に因て受くるなり。受くる道にて受るを欲心とはいはず。

答ふ、賣利を得るは商人の道なり。元銀に賣るを道といふことを聞かず。賣利を欲と言うて、道にあらずといはゞ、先孔子の子貢をなにとて御弟子にはなされ候や。子貢は孔子の道を以て

賣買の上に用ひられたり。子貢も賣買の利無くば富むこと有るべからず。商人の買利は士の祿に同じ。買利なくば士の祿無くして事ふるが如し。或所に屋舗へ出入する用達二人あり。又外より出入を望む者在りしが、買物方の役人申されけるは、二人の用達より入る物は、殊外に高直に相見ゆると言ひて、彼の出入を望む者の絹と見合有りける時、過分の直違あれば、役人殊外に機嫌あしく、二人の用達を一人宛呼びて、汝が方より差上候呉服、殊外高直につき、外をも見合せ候所、格別の相違不屆の由申されければ、一人の出入の者の言ふ。拙者ども御用疎末に仕ること少も是なく候、初て御出入願申すものは、損銀を致してなりとも、最初には差上げ申候へども、後の續かざる者に候と言ふ。其口書をとりて歸さる。又一人を招て不屆のよし申し渡されければ、仰せ御尤に候、拙者儀、去年までは愚父存生にて御用達し申す所に、愚父相果て候て後、御用拙者に仰つけさせられ候ところ、拙者こと不調法にして、勝手困窮仕候故、買物調ひかね、先方より高直に賣り申し候や、心もと無く存じたてまつり候、且御調へなされ候呉服が證據にて候、高直なる物をさしあげ申す事、殿様の御高恩を忘るゝと申すものにて御座候、今暫下しおかれ候御扶持にて渡世仕り、一兩年の中、家屋舗諸道具等賣拂ひ借銀相濟し、其上にて御用相勤め申し度候と言ふ。然らば

其口書せよと言て、口書をとりて歸さる。其後評議ありて、一人の用達は身上不如意なる者を手本とし、高利をとり、其上役人を言ひ掠むる咎ありとて、用事を取あげられしとかや。又一人は正直なる申ぶんなり、其上彼が貧乏は亡父が奢の爲所、彼が咎にはあらず、亡父が咎を身に受くる孝心、殿への忠義彼此後々に至りても、爲になるべき者なりとて、古借を聞屆け合力致し、用向をこれまでの通に言附よと有り。これ正直によつて幸を得たり。これは是殿様の高恩を忘れず、高直なる者を差上まじきと思ふ實と、父の奢を隱す孝と、我正直なる所より、役人を言ひ掠むる心なきと、此三つの徳より我身の幸となる。又一人の用達は全く御用疎末に仕らず、又初めての者は損を致し差上げるなどと言ふことは、世間一等の口上なるが、其を聞く者の身に替りて見よ、目にあまるほど過分の違あらば、實尤と聞くべきや、扨も座遁の僞をいふと思ふべし。彌其辨舌を能く言ひまはす程、聞く人これを惡む。世の人賢きやうなれども、實の道を學ざるゆゑ、我過の益すことを知らず。こゝを能く味ひ見ば、眞實なくては叶はざる事を知るべし。多葉粉入一つ、幾世留一本買ふとても、善惡はみゆる物なるに、色々と言ひまはすは宜からざる者なり。有りべかゝりに言ふことは善者なり。我より人の實不實をみる如く、他よりも又我實不實を見ることを知らず。傳曰人

視レ己如レ見二其肺肝一と。此理を知れば辭を飾らず、ありべかゝりに云ふ故に、正直ものなりと、何事も任せ賴るゝゆゑに、世話なしに人一倍も賣るものなり。商人は正直に思はれ、打解けたるは、互に善き者と知るべし。此味は學問の力なくては知れざる所なり。然るを商人は學問はいらぬものと言うて、嫌ひ用ひざることは、如何なることぞや。

曰く、然れども世俗に、商人と屏風とは直にては不立といへるは、如何なることぞや。

答ふ、世俗の言に加樣なる聞き誤多し。先屏風は少しにてもゆがみあれば疊れず、此故に地面平かならざればたゝず。商人もその如く、自然の正直なくしては、人と竝び立つて通用なり難し。これを屏風のすぐにたとへたるものなり。屏風と商人とは直なれば立つ、曲めばたゝぬと言ふことを取り違へて言へり。古の伯夷の直も、屏風の直に勝ることあるべからず。

曰く、商人の屏風にならぶほどの直と言ふことは、如何なることぞや。

答ふ、凡て鬻レ貨曰レ商。然れば貨を賣る中に祿あることを知るべし。この故に商人は左の物を右へ取り渡しても、直に利を取るなり。曲みて取るにあらず。口入ばかりする商人を問屋と言ふ。問屋の口錢を取るは、書附を出し置けば人皆これを見る。鏡物を寫すが如し。隱す處にあらず、直に利を取る證なり。商人は直に利を取るに由て立つ。直に利を取るは商人の正直なり。利を取らざるは商人の道にあらず。こゝを以を正しき士は、此賣物は損銀たち候へ共、負けて賣んと言ふ時は買はず。我買てやるは汝に利を得させん爲なり、汝が合力は受けずと言へり。利を取らざるは商人の道にあらず。

曰く、然らば天下一等に元銀は是ほど、利は是程と極めあらば然るべし。それに僞りを言ひ、負けて賣るはいかなることぞ。

答ふ、賣物は時の相場により、百目に買ひたる物、九十目ならでは賣ざれることあり。是にては元銀に損あり。因て百目の物、百二三十目にも賣ることもあり。相場の高る時は强氣になり、下る時は弱氣になる。是は天のなす所、商人の私にあらず。天下の御定の物の外は、時々にくるひあり、狂あるは常なり。今朝まで金一兩に一石賣りし米も九斗に成り、小判は下り米は高り、又小判は高り米は下りするものなり。天下第一の賣買物是なり。其外何に限らず、日々相場に狂あり。其公を缺きて私の成るべきことに非ず。それに一人天下の商人に背き、元銀は是、利は是とは分がたきことなり。僞にはあらず。是を僞り言はゞ賣買なるまじ。賣買ならずば買ふ人は事を缺き、賣人は賣れまじ。左樣になりゆかば商人は渡世なくなり、農工と成らん。商人皆農工とならば、財寶を通す者なくして、萬民の難儀とならん。士農工商は天

下の治る助となる、四民かけては助け無かるべし　四民を治め給ふは君の職なり、君を助くるは四民の職分なり。士は元來位ある臣なり。農人は草莽の臣なり。商工は市井の臣なり。臣として君を助くるは臣の道なり。商人の賣買するは天下の助なり。細工人に作料を賜るは工の祿なり、農人に作間を下さるゝことは、是も士の祿に同じ。天下萬民産業なくして何を以て立つべきや。商人の買利も天下御免の祿なり。夫を汝獨賣買の利ばかりを慾心にて道なしと言ひ、商人を惡んで斷絶せんとす。何を以て商人ばかりを賤しめ嫌ふことぞや。汝今にても賣買の利は渡さずと言うて、利を引きて渡さば、天下の法破りとなるべし。上より御用仰附けらるゝにも利を下さるゝなり。然ば商人の利は御免し有る祿の如し。然れども、田地の作得と、細工人の作料と、商人の利とは、士の如くに定めて幾百石幾拾石とは言ふべからず。日本、唐土にても、賣買に利を得る事は定なり。定の利を得て職分を勉むれば、自ら天下の用をなす。商人の利を受けずしては家業勉らず、吾祿は賣買の利なるゆゑに、買人あれば受くるなり。よぶに從つて往くは、役目に應じて往くが如し、慾心にあらず。士の道も君より祿を受けずしては勉らず。君より祿を受くるを慾心と言うて、道にあらずと言はゞ、孔子孟子を始として、天下に道を知る人あるべからず。然るを士農工にはづれて、商人の祿を受くるを欲心と言ひ、道を知るに及ざる者と言ふは如何なることぞや。我教ふる所は、商人に商人の道あることを教ふるなり。全く士農工のことを教ふるにあらず。

曰く　然らば商人の賣買にて利を得ることは有るべきことなり。其外に曲て非なること候や。

答ふ、今日世間のありさまに、曲て非なること多し。こゝを以て教あるなり。實の商人は敬みて爲ざること有り。譬へを以て告げん。我幼年の時分に聞きしこと有り。昔或國に、中頃より水入になり、農作ならぬ田地あり。其昔水も入らざりし時、年貢をかけられし例により、今も少々宛年貢をかけられしに、其田地に果を植ゑ、稻作より增によこ物なり揚りければ、其果に、先君の時より又運上をかけらるゝとかや。君これを難儀に思召し、是新法を止め、民の害るゝことを救はんと志し給へども、親殿の時より始られしことなれば、子の身として改め變ることを歎き給ひ、自ら止べきことを思召し、或時臣を召して曰く、見れば城下に、二階作りの家を立つる者あり、二階作の家は盡く運上を取るべしと仰有りければ、臣是を難儀に思ひて、相談示し合せ、君に申しあげらるゝは、先達て二階作の運上を取るべしと仰せ附られ候こと、昔より其例なきことに御座候、御免し下され候樣にと申し上げらるれば、君聞召し、昔より例なきことかや、われはその例を以て言附くる事なり、彼の水入の田地は、下

にては年貢を取り、果にても運上を取るなれば、二階作の運上に同じ、例なきことにあらずとの給ふ。それより果に運上取ることを止め、田地の年貢ばかりに成りけるとかや。御仁愛の及ぶ所、實に民を子の如くに思召す政、世に有がたきこと哉と申しき。商人も加樣なることを法となすべきことなり。二重の利を取り、甘き毒を喰ひ、自死するやうなる事多かるべし。一二を擧げて言はゞ、こゝに絹一疋帶一筋にても、寸尺一二寸も短き物あらんに、織屋の方にては、短きを言たて直段を引くべし。然れども一寸二寸のことなれば疵にもならず、絹は一疋帶は一筋にて、一疋一筋の札を附けて賣るべきか。尺引に利を取り、又尺の足る者と同く利を取るなれば、是二重の利にて、天下御法度の二升を遣ふに似たる者なり。又染物などは、染違あれば、少しのことを大きに云ひたて直引し、職人を傷め、誂へたる人よりは染代を請取り、職人方へは渡さざる事も有り、これ又二重の利に越えたる惡事なり。總て箇樣の類多かるべし。又身上不調につき、買懸り借金の方へ、三分五分の割銀を以て、詫言致し濟す事もありとかや。其貧方の中に、賣高多きもの、又猿賢き者は、詫人より禮銀を密密に請取り、同く損銀ある體に見せかけて、我は損せざる者ありときく。箇樣の紛はしき盜をなす者を非と言ふ。

曰く、其詫人より禮銀を受とり事を取もつは、商人ばかりにて候や。商人のほかにも此類あるべきことなり。

答ふ、商人多くは道を聞ざる故、加樣の類有り。又道を知つて事を取捌く者は、左樣の不義はせざることなり。假令御領家領の庄屋年寄にても、上の正き御政道を受けて、事を取持つ身として、小百姓より禮銀などを請取ること有るべきに非ず。元來士と言はるゝ身が、下下より密々に禮銀などを請くることあらば、定めて贔屓の沙汰に至るべし。下々と竝んで、何ごとにても取持つ人を士と言ふべきか。其は盜人と言ふ者にて士にはあらず。上にたつ人、下より賂などを受けて、政道たつべきや。假令當分は知れずとも、天知る地知る我知るなれば、終にはあらはれて天の罰を受くべし。天罰を知らざる者、天下靜謐の世に有るべからず。然れ共賣人は士にあらざれば、加樣なる不義有るなり。毫釐ほども道に志あらば、なすべきことにあらず。

曰く、其詫人が禮銀を出し、埒明を賴むが惡きか。又禮銀を取り、事を賴るゝ者が惡しきか。

答ふ、其時は賴む人は下なり。賴るゝ者は上なり。賴む者、賴るゝ者も罪あり。然れども七分の罪は上にあり、三分の罪は下にあり。昔より知ある者は上に立ち下を治む、無知なる者は

下に立ち力を勞して上を養ふと、孟子ものたまふ。上の清潔を法とするは古よりの道なり。其正をまもらずして、詐人と比て不義の禮銀を取り、これも財と思ふはあさましきことなり。下々に生るればとて、人に替の有るべきや。身上不如意の者は、是非なく金銀を減少して詐るなり。負方は身分相應の損あり。其中にて、取もつ顔附して禮銀を取るは、盜人に同じ。加樣なることをなす者は、甘き毒を喰ひて自死するに同じ。又人の手代にもかゝる邪をなす者多し。是は主人のおもひ寄なき惡を迎へ、主人に甘き毒を喰せて家を絕す者に同じ。孟子の所謂逢二君之惡一其罪大と。然るを主人は金銀の損さへ少ければ、忠ある者と思ひて、我身を亡さるゝことを知らずして是を喜ぶ。其根を尋るに、商人は學問はいちぬものなりと言ひて、聞くことをせず、反て聞く人を笑ふ。實に一疋の鼻のある猿が、九疋の鼻缺猿に笑ひ殺るると言ふに同じ。我賢しと思ふより、不善の道に陷れば、其家終には禍來る事を知らず。哀しい哉。易に曰、積二善家一必有二餘慶一、積二不善家一必有二餘殃一、臣弑二其君一子弑二其父一と。是教の眼なり。聖人の仁心能々味ふべき所なり。聖人斯のごとく不善を惡み給ふ味を知らば、二重の利を取り、二升の利をし、密々の禮を請くること抔は、危うして浮る雲の如くに思ふべし。是を能々つゝしむは只學問の力なり。世間のありさまを見れば、商人のやうに見えて盜人あり。實の商人は先も立ち、我も立つことを思ふなり。紛れものは人をだまして其座をすます。是を一列に言ふべきにあらず。

曰く、商人の道は是にて有增事足り候や。

答ふ、此はこれ賣買の道を云ふ。此上は中々事多くして盡し難し。

曰く、此外にも何ぞむつかしき教ありや。

答ふ、むつかしき教にはあらず。然れ共五常五倫の道は、天下國家を治るも一列なり。此故に小家といへども教あり。譬へて言はん。田舍にて大佛殿を見度しと言ふ老衰の人有り。其子孝行なる者にて、在所に大工有りけるゆゑ、大佛堂の雛形を建て呉れられよ、親に見せたき由言ひければ、大工の言ふ、我は大佛堂の雛形は、得建て申さず候と云ふ。否小く、只四五尺許に建てくれられよと言へば、大工の言ふ、凡て本堂作は法を知らざれば雛形も得建申さず候。堂には大小あれども、仕用に替る事無きゆゑなりと言ふ。天下を治るは大佛殿を建るが如し、小家を治るは雛形の小堂を建るが如し。家一軒には君臣有り、父子有り、夫婦有り、兄弟有り、朋友の交有り。人倫の道なくば、小家と言へども如何して治るべき。小家を治るに仁、國天下を治るも仁、仁に二品の替あらんや。商人の仁愛も、間に合ばこそ、先

年飢饉の救米を出したる者は、悉く御褒美を下し給へり。飢人を救うて人を殺さゞるは、人の道なり。

曰く、然らば商人の心得は如何致して善からんや。

答ふ、最前に言へる如くに、一事に因て萬事を知るを第一とす。一を擧て言はゞ、武士たる者、君の爲に命を惜まば士とは言はれまじ。商人も是を知らは我道は明なり。我身を養るゝ賣先を、疎末にせずして眞實にすれば、十が八つは、賣先の心にかなふ者なり。賣先の心に合ふやうに、商賣に精を入れ勤めなば、渡世に何ぞ案ずる事の有るべき。且第一に儉約を守り、是まで一貫目の入用を七百目にて賄ひ、是迄一貫目有りし利を九百目あるやうにすべし。賣高拾貫目の内にて、利銀百目減少し、九百目取んと思へば、賣物が高直なりと尤めらる氣遣なし。なき故に心易し。且前に言ふ尺違の二重の利を取らず、染物屋の染違に無理せず、倒れたる人とうなづき合ひて禮銀を受け、貧方中間の取口を盗まず、算用極の外に無理をせず、奢を止め、道具好をせず、遊興を止め、普請好をせず、斯の如き類盡く慎み止る時は、一貫目設る所へ八百目の利を得ても、家は心易く持るゝ者也。扨利を百目少く取れば、賣買の上に不義は有增なき者なり。譬へば一升の水に油一滴入る時は、其一升の

水一面に油の如くに見ゆ。此を以て此水用にたゝず。賣買の利もかくの如し。百目の不義の金が、九百目の金を皆不義の金にするなり。百目の不義の金を設け增し、九百目の金を不義の金となすは、油一滴によりて、一升の水を捨つる如くに、子孫の亡び往くことを知らざる者多し。二重の利や倒者の禮銀や、拂のしかけなどの無理盡く合せ聚めて見たりとても、それにて世帶が持るゝ者にはあらず。此理は萬事にわたるべし。然れども欲心勝ちて、百目の所が離れ難きゆゑに、不義の金を設け、愛すべき子孫の絶え亡ぶることを知らざるは、哀しきことにあらずや。前に言ふ如くに、兎角今日の上は、何事も清潔の鏡には、士を法とすべし。孟子曰、無恒産而有恒心者惟士爲能と。昔鎌倉最明寺殿、天下の政を皆相模守殿へ讓り給ひ、諸國を巡り給ふは、天下の邪正を正んためなり。これ天下の訴へ、上へ通ぜざることを歎き給ふゆゑなり。上仁なれば、下義ならざることなし。此に靑砥左衛門尉誠賢、鎌倉に於て訴を分くる時、相模守殿家人と公文と爭論有しが、相模守殿家人の無理なれども、評定の面々、時の權威に恐れて理非を分ざる所に、靑砥是を分明に分くる。此時公文大に悅び、其夜半に鳥目三百貫文、靑砥が屋鋪へ後の山より落し入れぬ。靑砥是を見て喜びずして、殘らず返し遣して言ふ樣は、相模守殿よりこそ、褒美をば受くべき所なり、公事を分明に分る

は相模守殿を思ひたてまつるゆゑなり、天下の理非正しきは、相模守殿喜び給ふべき所なりとぞ言ひける。かくの如き者は士の中に入るべし。才知は青砥に劣る人も有るべし。不義の物を受けざるほどの事、青砥に劣らば、士とは言はれまじ。こゝを以つて見れば、世の人の鏡と成るべき者は士なり。子曰、蓋有之我未之見とのたまふ。世界は廣き事なれば、鼻を塞いで不義の物を受くる士も有るべし。若有らば、士に似せて刀を指す盗人にて有らん。事を賴む者より賂をとるは、壁を穿つ盗人に同じ。青砥が公事を分明に分くることは、相模守殿を思ひたてまつると言ふなれば、我身を修め、役目を正く勉め邪なきは、君への忠臣なり。今治世に何ぞ不忠の士あらんや。商人も二重の利密々の金を取るは、先祖への不孝不忠なりとしり、心は士にも劣るまじと思ふべし。商人の道と言ふとも、何ぞ士農工の道に替ることと有らんや。孟子も道は一なりとのたまふ。士農工商共に天の一物なり。天に二つの道有らんや。

都鄙問答　卷之三、

○性理問答の段

或學者問うて曰く、大聖孔子は、三綱五常の道を說き、性理の沙汰には及び給はず。孟子に至て人の性は善なりと言ふ。又我浩然の氣を養ふと宣ふ。告子は生之謂性、又曰、性無善無不善、或性猶杞柳、性猶湍水如と言ふ。又韓退之は性有三品と言ふ。荀子は人の性惡其善者偽也と言ふ。楊子は善惡混ぜりと言ひ、且老莊佛氏の說、彼此その數擧げてかぞへ難し。何を是とし何を非とせん。是に因つて我朝の儒者も、或は孟子を是とし、告子韓子を是とし、又は孟子を非とし、又孔子以下を皆非の如く言ふ者あり、その論議一として定めがたし。然るを汝宋儒を是とし、孟子を尊信し、人の性は善と言ふ。我思ふに兎角決定しがたし。元來人に替なければ、汝も決定は有るまじけれども、孟子に與する儒者も多く、且世の俗語にも、孟子を善しと思ふ者多きゆゑ、汝が心にも、實に孟子の性善を得心致し、肯ふ心にはあらねども、先性は善なりと言うて居らるゝと見えたり。それは學者の正直とは

いはれまじ。我が言ふ如くに疑しきは疑ありといふこそ正直なるべけれ。尤世渡の勝手をいはゞ惡からん。然れども心に咎はあるまじと思へり。汝頸を押へて問ふならば、性善には是ぞと證はなかるべし。證はなけれども、先孟子に寄り因みて、性善と說き觸られ候や。

答ふ、否しからず。さりながら汝はいかやうとも思はるべし。所詮我が言ふ所は聞こえまじ。

曰く、汝が思ふ所に當るゆゑの返答かや。

答へ、左には非ず。子曰、朽木不可彫也、糞土之牆不可杇と。汝が如く我體を見失ひて、其を知らざる者は朽木に彫物する如く、相手無れば死人に同じ、誰に向て語んや。性善と言ふは我性を知つて、孟子の善と宣ふは是か非か、我性に合ふか合はざるかと、手前に法を求て後の詮議なり。先性善のことは差し置く。孔子一貫と宣ふはいかゞ得心せられ候や。

曰く、それは、曾子曰忠恕而已。何ぞ疑ん。

答ふ、曾子の忠恕は至て善なり。後世の性理に味き者も、忠恕を一貫のことなりと云ふは可也。一貫を忠恕の事と云ふは不可なること必せり。如何となれば、今時にては和漢ともに忠恕と斗言うては、聖人の道統と思はず、思はざるゆゑに道統を無する罪あり。然るを汝性善を知らずして、一貫を以て忠恕と云ふは、曾子の粕を食ふなり。一貫と言ふは性善至妙の理にて、聖人の心なれば、言句を離れ獨得る所なり。曾子は是を聞き事理察なれば、其指に契ひ疑なきゆゑに、唯と對へ給ふ。外の門人中も一列に聞かるれ共、聞えざるに依つて、孔子出給ひて後に、何と云ふことぞと問れたり。一貫にては聞えざるにより、曾子曰忠恕而已と說きかへ給へども、其心を覺らず。既に子貢にも一貫と告げ給へども、子貢いまだ達せざる故、對なきなり。曾子は道統を得給ふゆゑに、忠恕を以て、至誠一貫の理を說き給ふ。得たる者は自由にして、一貫を忠恕と說けども合へり。合ふと合はざるとは得ると得ざるとにあり。汝忠恕と說けども性善を知らざれば、曾子の忠恕と違へること決せり。只忠恕のことと押つけ置くとも、彼是濟ぬこと多かるべし。師たる者は此理を說るべし。汝は性理に味きゆゑ聞えざると見えたり。

曰く、其所は師たる人も、さつぱりとは濟ねども、此は聖人のことにて、今の學者の知るべき所にあらず。忠恕のことなりと言うて、此うへのことは、決して沙汰なきことなり。

答ふ、汝は今の學者の可知所に非ずと言ふ。聖人の敎は古今に通じて變ることなし。今と古とを分くるは、佛氏の末世と言ふ敎なり。混雜すべからず。さて孔子無適無莫と宣ひ、又顏淵の在前忽焉在後と宣ひ、孟子道一而已と宣ふ、加樣の類おほし。汝はいかゞ心

得居られ候や。

曰く、加樣の類は深く詮議せざることなれば、早速は返答なりがたし。

答ふ、此三言は、皆我心のことなるが、其を急々に返答ならずといはゞ、書を見ること多しといふとも、何の益あらん。論語の書は皆聖人の心なるに、其心を知らずして、何を法として身を修め人を敎へられ候や。

曰く、孔子の道は、五倫五常の外はなし。何ぞ疑あらん。

答ふ、汝は一而已の一を知らねば、道を知らず。孔子曰、人能弘レ道、非レ道弘レ人と、心能盡レ性、人能弘レ道、人の外に無レ道、道の外に無レ人。人の心は覺ることあり、此を以て道を弘む。覺る心は體なり、人の大倫は用なり。體立つて用行る。其用は君臣父子夫婦兄弟朋友の交なり。仁義禮智の良心は、其五倫を行する心なり。汝は此心の一なることを知らず。

曰く、汝のいへる所も一理あるなれば、何れを學ぶも外ならず、我も向後は心のことをも工夫すべきか。然れども孟子の性善は愈々濟がたし。聖人は知仁勇の三德全して善なるべし。最早賢人さへ全からず、況や衆人は又劣れり。それを一列に善といふは如何なることぞや。

答ふ、孔子易一陰一陽之謂レ道。繼レ之者善也、成レ之者性也と宣ふ。天地は一陰一陽なり。陰陽の外に他物有りや。

曰く、五行といへども、陰陽なれば他物はなし。

答ふ、然らば此陰陽は二つか一つか。

曰く、二つとも分けがたし。又一つかと思へば動靜の二つなり。

答ふ、動靜の二つなり。其動は何方より來り、靜になるは何方に歸るぞや。

曰く、無極太極といへども、畢竟なきものに名を附けたるにや。聽と落著なりがたし。

答ふ、無物にあらず。太極といふは、天地人の體なり。先汝が鼻の息と口の息とは二つか一つか。

曰く、是も分けがたし。

答ふ、其口と鼻との息は、直に天地の陰陽なり。天地に吐いて天地に吸ふ。其吸ふと吐くとを暫くも止め置かれ候や。

曰く、止むること能はず。

答ふ、呼吸は天地の陰陽にして、汝が息にはあらず。因つて汝も天地の陰陽と一致にならざれば、忽に死するなり。陰陽の外に汝が命なきこと明白なり。吸息は陰なり、吐息は陽なり、こ

れを繼者は善なり。身の動くも靜かなるも、天地の陰陽なり。易と何ぞ替ることあらん。孔子は天地を以て道の體を說きあかし給ふ。孟子は人を以て道の體を說き明し給ふ。天人一なれば、道も亦一なり。周子曰く、五行一陰陽也、陰陽一太極也、太極本無極也。此無極を一とやいはん、二とやいはん。己に實知せずば何を以て道を說ん。醉の中に夢をとき、世を惑すこと哀しきにあらずや。早く孔孟の一を可レ知。孔子孟子は割符の如し。孔子を是とせば孟子も是なり。孟子の性善を貴び、糟を食ひ與するにはあらず、我心に合ふゆゑなり。加樣に說く時は、甚だ知易きに似れども、此上を味ひ得ること難し。味ひ得ば、生死は一致なり。是故に朝聞道、夕死可矣と孔子も宣へり。扨孔孟の曰ふ所の善を、世に見誤ること多し。性が善ならば、世の中は皆善人にて、惡人はなき筈なり。然るに惡人も多ければ、定めて虛名ならんと疑ふ者多し。是以て味ひ得る者少なり。如何となれば、今日の上此は善彼は惡と、善惡對々の善と見るゆゑに、聖人の宗を失して、大なる謬出る所なり。

曰く、其大なる誤出る所を、聞くことを得らるべきや。

答ふ、然らば天地の道を以ていふべし。今こゝに、田地二反あらん。百姓の力を用ふること同く、糞等も同く、其植る所の苗も同く、うゑる時も同じ。然るに一反には米三石あり一反には一石五斗有る時は、纔に一反の中にて、米一石五斗違あらば、その田に惡心ありといはんや。又三石ある田を、善心ありといはんや。

曰く、田に心なければ惡心とはいはれまじ。然れども上田下田とはいふべし。

答ふ、然らば、土に替はなく、同じ土なれども、上田下田の替あるなり。是地に肥えたるとゝせたるとありといへども、土の理に替ることなし。然れば土は同じ土にてありながら、上田と下田とあり。然りといへども、土に具る所の理は同じ。同きゆゑに漸々に糞を入れ土を入るれば、下田は中田となる、中田は上田となる。是を人に喩へていはゞ、下田は小人なり、中田は賢人なり、上田は聖人なり。聖人と賢人と小人と替りあれども、元性善は同じきゆゑに、學べば漸々を以つて、小人は賢人となり、賢人は聖人となる。是性は一なる證なり。扨聖人も賢人も小人も、今日活きて動くは呼吸の二つなり。此二つを繼ものを見得すれば、形なきものにして、萬物の體となるものなり、是を名づけて善なりと宣ふ。此性の善なることは私慮を以て窺ひ知るべきにあらず。孟子の性善は前にいふ如く、惡に對する善に非ず、誤るべからず。

曰く、孟子の性善と、告子が性に無善無不善と云ふは同じかるべし。如何となれば、無善

不善」所は空々寂々としたる所なり。孟子は其空々寂々たる所に名を蒙らしめて、性善といへり。告子はありのまゝに、無善無不善」言ふ、辭に替はあれども、實は虛名なり。夫に孟子は是とし告子は非とするは、如何なることぞ。

答ふ、是汝が不得の所なり。先告子が無善不善」と言ふは、是思慮なり。如何となれば我性と云ふ者を尋ね見れども、善とも不善とも分れず、然れば善も不善も無きものなりと思慮を以て見たる所なり。孟子の性善は直に天地なり。如何となれば人の寐入たる時にても、無心にして動くは呼吸の息なり。其呼吸は我息にはあらず、天地の陰陽が我體に出入し、形の動くは天地浩然の氣なり。我と天地と渾然たる一物なりと貫通する所より、人の性は善なりと說き給ふ。自然にして易に合へり。扨此所は前後ともに聞分がたきところなり。默して工夫せらるべし。易は天地の上にて說き給へば、凡て無心の所なり。其無心の陰陽が一たび動き、一たび靜なり。是を繼ぐものが善なりと宣ふことなり。此微妙の所と告子が言ふ思慮と一列にいはるべきや、大に異る所なり。孟子の性善は生死を離れて天道なり、いかんぞ告子が念々生滅する者と、一列なるべきや。此は易きに似て知りがたき所なり。思慮を以つて知らるゝ所にあらず、信心堅固にして、憤を發し、孔子齊に在して樂を學び、三月肉の味を知り給はざる如くにして知らるべし。世の人書物を讀みながら、此性善を知らず、知らずして、書を讀む者を喩へていはゞ、病人の如し、無事の人は食の美き味を知る、こゝを以て喜ぶ、熱病人も食は喰へども、美き味を知らず、この故に喜びず。性善を知らざる者も斯の如し。書は讀めども、書の意味を知らず、却て孟子の性善を非と見るなり。孟子の性善も天なり、孔子の易の性善も天なり。天地と人と別々といはゞ、汝口と鼻とを塞ぎ活きて見よ。天地の陰陽を受けずして、活きられなば、孟子は非なり。死すべしといはゞ孟子は是にして、天地の性善と一致なること決せり。是端的の證なり。其繼ぐ物を知らざるによつて迷ふなり。其迷よりして告子が說を實に尤と請合ふなり。告子がいへる如く、性に何ぞ善不善あらんやといはゞ、人舉て是に寄るべきが、退て工夫すべき所なり。善不善なりと思ふ一念は、毫釐の差なれども、遂る所にては千里の謬となる。聖人の道は天地而已。天地は見えたる通に、清ると濁ると有りて、天は清めり地は濁れり。清める天も、濁れる地も、何方を見ればとて、物を生じ育ふべきとも見えず。無心なれども、萬物生々して古今違はず。其生々を繼ぐ物を善と言ふ。分ていはゞ、天は形なうして心の如し、地は形有て物の如し。其生々する所は活物の如し、無心なる所は死物の如し。天地は死活の二を兼たる物なり。死活の二を兼すぶるゆ

ゐに萬物の體となる。其物を暫く名づけて、理とも性とも善とも云ふ。然るに私意を用ふる者は、天地は活物なりと、一方を知て、死活を攝て一理なることを知らず。因て害をなすこと甚し。是故に孔子攻乎異端斯害也已と宣ふことなり。天地を人の上にていはゞ、心は虚にして天なり、形はふさがつて地なり。呼吸は陰陽なり、これを繼ぐ者は善なり。用を爲す所を主る體は性なり。これを以て見よ、人は全體一個の小天地なり。我も一箇の天地と知らば、何に不足の有るべきや。告子はこれを知らず、生滅にあづかる思慮を以て我が性と思ふ。思ふ所は性にあらず。いかんとなれば思慮なき天理に異るゆゑなり。此味を知らざる者は、天道に合はざる故に異端と言ふ。渾然たる一理の性に至れる孟子には異る所なり。

曰く、天人は一とは聞けども、我も天地と一致なること落著しがたし。汝は此理を知れりや。曾て不得心のことは、いはれまじきが如何なることぞや。

答ふ、書經大誓に曰、天視自我民視、天聽自我民聽とあり。天の心は人なり、人の心は天なり。此故に古今に通りて一なり。汝今物語の相手は誰ぞや。

曰く、對していふは汝なり。

答ふ、我は萬物の一なり。萬物は天より生るゝ子なり。汝萬物に對せずして、何によつて心を生ずべきや。是萬物は心なる所なり。寒來れば身屈し、暑來れば身伸ぶ。寒暑は直に心なり。熟して工夫あるべし。

曰く、段々の說にて、天人一致と性善のことは、耳には聞けども、心には得ずして、少しも面白き味の出でざるは如何なることぞや。

答ふ、能き問ひ哉。徒然草に、傳へ聞き學んで知るは眞の知にあらずと云ふ。今汝かくの如きこえたる樣に思るゝとも、未だ實知にあらず、是を以て味なし。性を知りたしと修行する者は得ざる所を苦み、是はいかにこれは如何にと、日夜朝暮に困むうちに、忽然として開けたる、其時の嬉さを喩へていはゞ、死たる親のよみがへり、再び來り給ふとも其樂にも劣るまじ。昔より重荷を持し山賤の息杖懸て休みたるを、安樂の至極なりと畫き傳へし、其人は豁然と開けたる、此樂を知らざる者にて有りつらん。我に至極の樂を畫けと望む人あらば、豁然と開けつゝ、手の舞ひ足の踏む所を忘れし者を畫くべし。此所を傳曰、豁然貫通焉、則衆物之表裏精粗無不到と。扨この所は、我心を盡すほど〳〵に嬉さちがふなり。年久しく如何々々と思ふ所より、忽然として疑晴ることあり。然るに一ヶ月や二ヶ月に疑を起し、是に於ても彷彿と開く事ありと雖も、喜ぶ事少し。少き故に勇氣出ず。又信心堅固

にして入り立つ時は、假令辻に立てなりとも、此味を世に傳へ殘さんと思ふ勇氣も出るなり。我文學の拙き恥を知らずして、如斯謂散すは實に鄙夫といふべけれど、我志を述んためなり。

曰く、性理は第一の事とはおもへり。然れども兎角聞き得ることかたし。雲泥の違ある告子が非を得心せば、孟子を是としらるべきや。

答ふ、孟子の性善を得れば、白晝に黑白を分る如し。他の非は聞かずして明に分るゝなり、何ぞ非を知ることあらん。性善を知れば、定木を以て曲直を正すが如し。孟子の性善と宣ふは、心を盡して性を知り、性を知る時は天を知る。天を知るを學問の初とす。天を知れば事理自明白なり。此を以て私なく公にして、日月の普く照し給ふが如し。告子がいへる所は、生れながらの性を見失ひ、私知を用ふれば白晝に日輪の光をからずして、戸を閉ぢて燈火を用ふるが如し。照す所かくの如く違あるなり。因つて雲泥の違と言ふ。天地は照々と明なり、何ぞ力を用ふることあらん。力を用ひず行るゝゆゑに、安樂にして然も明なり。是故に天地の靈となる。此を知らず、昏々とくらうして、私知を以て苦むは告子が說なり。孟子は性理に明かなるゆゑに、積義浩然の氣を養ひ、至大至剛にして天地に充るの德に至り給ふ。告子は此理を知らず、己が私知を以て、定て此筋にてあらんと思うては問ひ、又決定なき所より、品を變て問ふゆゑに、論議の度々に變なり。吾に決斷して云ふことばは變ざる者なり。然るに告子は不レ得二於言一勿レ求二於心一と言ふ。於レ言有レ所不レ言其言を捨置べし、其理を心に反し、求るに惡しと云ふ。心に求る事を嫌ひなば、何の世にかは覺る所あらんや。今日一事の輕きことさへ、心を盡くして知るにあらずや。且告子が湍水のたとへにて明に知らるべし。告子が思ふやうは、心は種々の思を生ずれども、何をと言うて取るべきやうなければ、性は水の流れて淵にぐるぐる回るごとき者と思へり。夫天は忽寒暑雲霧風雨を生じ、平旦清明の氣より、仁義禮智の良心を生ずることを知らず、色々品々に穿鑿し、思慮するゆゑに、只紙一重ほどの違も天地懸隔とはるかなるへだたりとなる。譬ば犬の己が尾を食はんとすれば、身の回るに隨ひて尾も巡るゆゑ、喰ひつくこと能はず。告子も色々思慮するゆゑに、性善に及ぶこと能はず、惜い哉哀しい哉。孟子は知を用ひず、義を行ひ給ふに因て、平旦清明の氣を養ふことを得給ふ。然れども獨得る所にして形容しがたきを以て、言ひがたしと宣ふ。程子曰、觀二此一言一則孟子之實有二是氣一可レ知矣。又程子の此一言を觀れば、程子も此氣を養へること明なり。知音の人は是を知るべし。性善を會得すれば、氣も亦清明にして、

仁義の良心を發す。常に仁義の良心起らば、人事は此に越ることあらんや。

曰く、性善を知るは、至極のことにて有るべけれど、我等ごときは何程聞きても得らるべきにあらず。孟子の如き器量あらば善ならん。後世の者所詮及び難し。又世界數萬億の中に纔に二十人三十人、假令九十百に至り、得心する人ありとも、いはゞ少しのことなり。只心易く云うて、世渡を能するこそ善るべけれ。佛者ならば極樂へ往生すと云うて悅ばせ、儒者ならば天地に升降と云ふこそ勝んと思へり。假令覺ればとて、同じ天地なれば苦んで益なきことにあらずや。

答ふ、汝も益あると思へばこそ、苦んで學ぶにあらずや。學ばざれば鄉人となる。鄉人となる恥を嫌ふ故に學ぶなり。學問第一の所は、聖賢に至ることなり。性善を知るは聖賢に至るの門なり。門戸なくば如何ぞ聖人の道に入るべき。孟子曰、堯舜之道孝弟而已。苦んでなりとも是を能くするを益とす。孝弟を舍つれば禽獸となる。心禽獸に陷て不孝不弟をなし、親子兄弟心を阻る程、世に悲しきことあらんや。此故に孝經に、子曰自天子已下至于庶人孝無終始而患不及者未之有也と、因て五刑之屬三千、罪莫大於不孝と宣ふ。加樣に罪人となり、人倫を破れども恐るゝ事なく、孝弟は行ひ損と思ひ、死すれば君子小人ともに、天地へ散りく〳〵て一列なりと思はれ候や。

曰く、何ぞ人倫を捨つべき。又天地に散り散ると決定するにも非ず。然れ共地獄極樂へ往くべきとも思はず、三世のことは定めて無き者にてあらんと思へり。これは我ばかりにもあらず、世間にも決せぬ人もあるやらん。或所に儒者を專一に致し、佛法を譏り、旦神社佛閣へ友に誘れ參りても、曾て拜などもせずして居られしが、時節來て病氣づき、最早九死一生と相見えし時に、日頃緣類ゆゑ來り因む僧ありければ、臥ながら手を合せ、涙を流し後世の事返すがへす賴入ると申されけり。自身にも最期に望んでは、何とやら氣味惡く、日頃の血氣に任せて言ふ時とは替るものにや、又我も實はさつぱりとはせねども、佛者に聞くも口惜く、其上佛者にも、正く悟道の僧も見あたらず。或時田舍の禪僧に出合ひ、幸哉と思ひ、佛家には生死の一大事を說き明せりと承る、如何なることぞ、今宵は心閑に御物語候へといへば、彼僧拂子をたてて見せられけれども、何とも心得がたき故に、暫く他の物語をし、後に又最前の生死のこと、今一度唯心易く耳に入よき樣に示し給へと言ひければ、今宵は茶が濃て、寐苦しからんといはれける故、聞えざるかと思ひて、最前の生死のこと、今一度示し給へと反していひければ、彼僧最早四の柝が鳴ると、大聲にていひ、又いはるゝやうは、汝は學問

もありさうなるが、笑止や聾さうなといはれけり。加樣なることなれば問うても濟ず、問はざれば猶決定せず、如何して疑なく、末期に至りて泣かざるやうになるべきや。

答ふ、彼僧最初に、拂子を立てて見せられしを、汝是を見て不ㇾ知、盲といふべきを、又品を替へ說いて聾といへるは、愛に溺し敎なり。孔子は吾爾に隱すことなしと、只一言に盡し給ふ。又季路問ㇾ死、曰未ㇾ知ㇾ生焉知ㇾ死と宣ふ。今此身を知れば、死と道は目前に明なり、何ぞ他に因て求んや。生死のことは論語に明なり。是をも殘さず敎るを實の儒者と言ふ。汝も秘密せずして、敎る方にて學び、早く生死の疑を晴さるべし。足下の近きことを知らず、聖賢の敎に違ひ心を苦め、夫にても世渡勝手よきと思うて己が心を欺き、我こそ孔子の弟子にて、眞の儒者なりと言つて居るゝは、如何なることぞ。

曰く、古歌にこゝろのとはゞいかゞこたへんと有るごとく、心に問へばやすきにはあらず。人がとへば、儒者などは俸祿渡世のことを思ふ者にてもなし、元來天より來りて天に歸ると潔白にいへども、實は潔白ならず。心は糞土に蓋をして置くやうにて安からず苦むなり。然りといへども如何ともすべきやうなし。是は儒者斗にてもなく、佛者も前にいへる如くなれば、世間並なりと思ふ。尤佛者は廣きことなれば、千人に一人得心の僧もあるべけれど、儒者は

數も少ければ彌罕なるべし。

答ふ、我思ふは、左にはあらず。佛者には少なるべし、儒者には數も多かるべし。儒者といふは、學者のことなれども、儒は濡にて身を濡すと云ふことなれば、此身にて滿足したる者を儒者といふべし。孟子曰人々己貴者あり。己に貴は心なり。心を得て滿足し、身を濡す者は儒者なり。何ほどに出家多しといふとも、俗人の十分の一にも及ばず、人數少きゆゑに、悟道の人罕なるべし。俗は數萬のことなれば、身を濡す人も多からん。

曰く、然らば修行の功を積み、心を得て道の疑なき程に至り、何程の勝れたること候や。

答ふ、孟子の曰、我四十而心不ㇾ動と。國天下のことに預りて、恐れ疑ふことなく、身を修るを勝れたりと言ふ。然るに世の中に、道を敎ふる爲に弟子を取り、敎ふることを知らずして、弟子に養るゝは逆なり。之を譬ていはゞ、男たる者我女房を養ふ事を得せずして、反て女房に養るゝ如し。心を知らず敎ふる時はかくの如く逆に至る。大學道明ㇾ明德爲ㇾ本新ㇾ民爲ㇾ末。學者たる者心を知るを先とすべし。心を知れば身を敬む、身を敬む故に禮に合ふ、故に心安し。心安きは是仁なり、仁は天の一元氣なり。天の一元氣は萬物を生じ育ふ。此心を得るを學問の始とし終とす。呼吸存する間は、心を以て性を養ふを我任とする

ことなり、少しにても仁愛を行ひ義に合へば安樂なり。我心の安樂になるより外に教の道あらんや。我心に得ざることを、僞を以て得たる顏つきしたりとも、それは僞なりと受けつけぬ心有るゆゑに苦むなり。是前に汝が言へる古歌のごとく、

いつはりも人にはいひてやみなまし心の問はゞいかゞこたへん

と言ふ所なり。孔子曰、君子不レ憂不レ懼、又曰、內省不レ疚夫何憂何懼と。我言所他にはあらず、平日不レ憂不懼內に省て疚しからず、心靜々として安樂ならば、これに勝ることあらんや。

曰く、聖人は生れながらにして知り給ふ、汝等如きの窺ひ知るべき所にあらず。然るに心易く聖知の私知のと判斷せるは、如何なることぞや。

答ふ、汝も黑白は心易く分るべし。聖知と私知とを分るもかくの如し。禹の水を治め給ふ時に、彼は高し此は下しと、知り給ふばかりのことにて、替りたること有るにあらず。私知とは品々の了簡を加ふるゆゑに、自然の知にあらず、此聖知に異り。聖知を近く知らんと思はゞ、程子曰、今人羈靮以御レ馬、而不二以制一牛、人皆知二羈靮之作在一乎人、而不知二羈靮之生由一於馬一聖人之化も亦猶レ是。是聖知の勝れたる所なり。向ふ物を移し曲げざるは、明鏡止水の如し。人たる者元來心は替らざれども、七情に蔽ひ昧されて、聖人の知を外に替りたることあるやうに思ふより。昧くなつて種々に疑ひ發るなり。元來形ある者は形を直に心とも知るべし。譬ば夜寐入たるとき、寐搔し、おほえず形を相く、是形直に心なる所なり。又子々水中に有つては人を螫す、蚊と變じて忽に人を螫す。これ形に由るの心なり。鳥類畜類の上にも心をつけて見よ。蛙は自然に蛇を恐る。親蛙が子蛙に、蛇は汝をとり食ふ、畏しきものぞと教へ、蛙子も學び習うて、段々に傳へ來りし者ならんや。蛙の形に生るれば蛇を恐るゝは、形が直に心なる所なり。其外近く見んと思はゞ、蚕は夏に至れば、すべて人の身に從つて出づるものなり、是も蚕の親が人を食うて渡世をせよと教へんや。人の手のゆく時は心得て早く飛ぶべし、とばずば命をとらるゝと教へんや。飛にぐるは此習はずして皆形によつて爲す所なり。孟子曰形色天性也、惟聖人然後可二以踐一形。形を踐むとは、五倫の道を明に行ふを言ふ。形を踐で行ふことを能小人なり。畜類鳥類は私心なし、反て形を踐む、皆自然の理なり。聖人は是を知り給ふ。日本紀に云、夫大巳貴命與二少彦名命一戮力一レ心經二營天下一復爲二顯見蒼生及畜產一

則定其療病之方、又爲攘鳥獸昆蟲之災異、則定其禁厭之法、是以百姓至今咸蒙恩賴と見えたり。何國にも、道は同うして、唐土にて伏羲よく犧牲を馴伏すと、史記に見えたり。第一に人と畜類とは類異る故に、鳥獸共に人を懼て近ずくことなきを、聖神は私心なきを、彼が懼るゝことを見てこれを心とし給ふ。それ故に牛は此をこのむ、羊は彼を好む、豕は此を好む、馬は彼を好む、此は強し彼は弱し、此は厲し彼は靜なりと、向ふ所の物を自の心として、彼が氣質の性の儘を能く知り給ひて、人に馴伏するやうにし給ふにより、多くの獸を馴れしたがへて、後世鬼神に諸肉をすゝめ、又老人を養ふことを教へ給ふ。然れば天地に生を受くる物は、自弱きものの強き者に從ふは是天之道なり。聖神其德いますに因て無益の物を殺さず、理を盡くして、祭祀賓客老人の養等には已ことを得ずして、時の入用に從ひ、殺して是を用ひ給ふ。無用の時は蟲一疋も殺し給はず。又萬草の中に於て五穀は勝れたることを知り給ひ、麥は夏出來るものなり、いつ蒔うゑたるが實登がよき、稻はいつごろ種おろすが善き、それより大豆小豆小角豆はいつが善きと、時候を考へ給ひ、五穀を植藝ることを教へ給ふ。其外に草木の多き中に、食うて能く人を養ふ者を知らせ給ふ。且土を見分、それはそこ、此はこゝと、田畠の植る所を知り教へ給ふにより、人たる者、飢餓る事

を免るゝほどのことを知る世となりぬらん。此皆大已貴命、少彦名命、唐土にては、伏羲神農黃帝御仁德の功なり。天は萬物を生じ、生ずるもの自育る。日本紀に云ふ、保食神乃廻首嚮國則自口出飯又嚮海則鰭廣鰭狹亦自口出又嚮山則毛麁毛柔亦自口出と見えたり。保食神の口とは、如何なる口ぞと工夫すべし。天神地祇はかくのごとく、自由なる御神なり。その自由の口より生ずるゆゑに、生ずる物も又自由なり。譬ば蟬は口に聲なくして、脇の下に聲ある者なりともいへり、口もあるべけれども、何方とも見分がたし。春夏空に飛ぶ小蟲などを見れば、何を食ふとも見えずして、飢ることなく、虛空に生じて虛空に死すや、出所を知らざるもの多し。此類を推して保食神の口を味ふべし。是を以て見れば、今日の萬民世渡りの事は定ある者なり、衆人はこれ有る事を知らず。然るを萬物の上について、萬物の迹を見て教へを立て給ふ。其教直に天に有る故に、古今變らず。天は物を生じ與へて、其心を聖人をして民に知らしめ給ふ。聖人は天の如くこしらへ出すこと能はず。天の力に屆かざる所を教へ世を救ひ給ふ。聖人なくば天德見れず、天德なくば、爭聖人の功を立て給はん。譬ば日本武尊の武勇なくば、天の叢雲の御劍も、草薙の御劍と云ふ名は見はれじ。寶の德も皆持つ人による。聖人なくとも天の道朽はせず。然れども世に

見はれ行はれず、世の人徳を明にせんと眼を開くべき所なり。天の道を知つて世に教へ施し給ふを、聖知とはいへり。

又問ふ、儒者より佛法を異端と言うて嫌ふは、いかなる違あることに候や。

答ふ、異端とは端を異にすといふ事なり。儒には仁義禮智信の五常、君臣父子夫婦兄弟朋友の五倫とを天の道とし、天人一致とす。佛家には五常五倫の道を立てず。此儒と歸を同じうせず、因つて異端と云ふ。假令儒者にて儒經を說くとも、我心を知らざるは聖人の心に通ぜず一我私心を以て教を立つれば、私心は直に異端なり。然れども聖人の弟子に似たれば、押いだし異端とはいはず、言はずとも異端の方に近き者なり。時節至て心を知れば、我儒と一致となる。扨儒佛の二道を枝葉にかゝり論ぜば、事多くして分れ難し。互に根本の所は性理を會得するを要とす。先佛氏にていはゞ、天台宗は止觀と言ひ、眞言宗は阿字本不生と云ふ。禪宗は本來面目と言ひ、念佛宗には入我我入機法一體などと言ふ。日蓮宗には妙法と言ふ。加様に名目には替あれども、修行熟して至る所は一なり。一事を擧げていはゞ、壽量無邊經に曰く、佛告二文殊一言、無心無念本佛以二不思議一爲レ體、無二本去來一無二三身性一無二十界性一と言ふ。然れども有に對する無にはあらず、是を以て法性とはいふべし。然らば其法性を覺るより外はなかるべし。悟れば生死の迷を離る。生死の迷を離れざれば、宗旨の法燈と成ること能はず。扨儒には性理の至極の所に至りては、上天の載は無二聲無臭一と說き給ふ。卽易に所謂窮二理盡一性以至二於命一と宣ふ所にて、聖人の心なり。かくの如きは渺然として主とする所なきに似たり。然れども聖人理を窮め給へば、義有つて存せり。喩ば雪中に梅の香を知るが如し。形見れずして而も明なり。然れば聖人の儒は天道に至り給ひ、天地あらん限はいまし給ふ。聖人沒し給ふに、心ばかり殘れること、如何と思はるべきが、世に在す時も心は天道なり。詩曰、文王在二於上一昭二于天一といへり。此心を知らば德行は至らずとも、儒者ともいふべきが、其心を知らざる者を、聖人の弟子とはいふべからず。扨儒佛共に理の所は近うして分れがたし、又行の上は見えたる通りに雲泥の違あり。出家は五戒を有ち、俗は五倫の道を行ふ。是又まぎるゝことはなし。其出家の眞似を、俗がするに因つて流に費有り。唐土にも梁の武帝の如くに、終日一食二素蔬一宗廟以麪爲二犧牲一斷二死刑一必爲之涕泣、天下知二其慈仁一。然るに武帝之末、江南大に亂る。佛の心を悟ずして法に泥む時は害あり。害あることを警へていはゞ、飢者に金を與ふる如し。天下第一の寶と喜べども、此を懷いて死するに同じ。聖人の教は飢者に一飯を與ふる如し。一飯は金の喜には劣る如くなれども、命

をつなぐより勝ることあらじ。武帝の如く死罪の者を見て泣く君あれば、其慈仁は金を得し如く、民喜べども、政道正しからずして、江南の亂は金を懷き飢ゑて死するに同じ。是害ある所なり。聖人天下を治め給ふは、敬を主として、孝弟忠信を行ひ給ひ、是を教となし給へば、只一飯を與へ、命を助くる如くなれども、天下の民盡く孝弟を行ふゆゑに、及ぶ所廣大にして利益ある所なり。事を以て論ぜば、佛氏たる人罪咎あるものなればとて、死罪に行ふべきや。罪咎ある者にても、弟子にせんと言つて、上よりもらひ助け度思ふは出家なり。慈愛の心ばかりにて、聖人の法なくして政道を行はゞ、反て事の亂とならん。武帝の如き君あらば、異端と譏るも宜なる哉。

曰く、手前には儒道にて身を修むる志なれば、我爲に問ふにはあらず。然れども上より下に至るまで、佛法を信仰のことなり。雜ふる時に害あることならば、上には用ひ給はざる筈なり。如何なることぞや。

答ふ、汝の如く聞得ざる者あれば害をなす。聞得し人には何ぞ害有んや。

曰く、汝は交へ用ふるときは害ありといはゞゝゆゑに問ふことなり。

答ふ、我いふ所は左にはあらず。佛法の用ひやうを知らざれば、害あることを言ふ。

曰く、知ると知らざると、用ひやうに二品あるは、いかなることぞや。

答ふ、佛法の表一通りを聞きて悟ること能はざれば武帝に刑罰の者を訴へるが如し。助くることを知つて正すことを知らず、如何ぞ政行れんや。

曰く、左あれば忽に害あり。又悟道して行ふとも、佛法を用ひば殺生はなるまじ。殺生はならずと言うて、殺すべき咎ある者を助けなば、害あること明白なり。

答ふ、佛法も人を助くる法なり、藥もまた病を助くる物なり。然れども法を弘め藥を施し、人を助くるは其人によるべし。世に醫者多き中に、附子熊膽を遣ひ覺えて療治する醫者もあり、又人參を第一に用ひて療治する醫者もあり、熱病に眞桑瓜や水を用ひて、病を癒せし醫者もあり。かくの如き生冷の物は毒なりと言うて、多くは醫者の用ひざるものなり。假令大人參の如き、能き藥ばかり用ふとも、病癒えざればなんの益あらん。是を以て見よ、人參を勝れたりといはんや、附子と熊膽を劣れりといはんや。名醫は何にても、病の癒ゆべきものを用ひて疾を癒し、諸藥を盡く遣ひ覺えて、療治するこそ善かるべけれ。古より藥種として出し置るゝ物、何ぞ棄ることあらんや。一も舍てず一に泥まず、能用ふるは名醫なるべし。一方に泥み滯りて、時の變を知らざるを名醫とはいふべからず。天下國家を治る道もかくの如

し。古より有來る法を一として捨てず、一に泥まざるは、名醫の諸藥を捨てずして病を治するに同じ。天下國家を治るに儒道は善といふとも、心闇して泥むことあらば必ず害あらん。是庸醫の人參を以て人を殺すが如し。金屑眼に入るときは忽翳となる。又佛法信仰するは、心をさとるためなり。佛法を以て得る心と儒道を以て得たる心と、心に二品のかわりあらんや。何の道にて心を得るとも、其心を以て仁政を行ひ、天下國家を治めたまふに、何を以て害あらん。自惡を爲し、刑罰にて死するものは、君の私を以て殺し給ふにあらず、何ぞ刑罰に心あらんや。書曰自作災不可活。聖人の政は天の如し、無爲にして治る。刑鞭蒲朽螢空去、諫鼓苔深鳥不驚といへり。

曰く、汝がいへる如くならば、心を得る爲には、佛法を雜へ用ふるも然るべきと聞ゆ。然れども、佛法は我業にあらざれば、同くは儒にて知り得度候。佛法を除き得ることは成りがたきことにて候や。

答ふ、孟子曰無惻隱之心非人也、無羞惡之心非人也と。汝最前より心を得ざるを苦んで赤面し、不善を恥づるは、卽羞惡の心なり。其羞惡の心を押して知らば、仁義の良心に至るべし。何ぞ佛法によることあらん。我心を得れば儒佛の名を離れたるものなり。譬ば此に一人の鏡磨ぐ者あらん。上手ならば鏡を磨ぎに遣はすべし、磨種に何を用ふと問ふべきや。儒佛の法を用ふるも斯のごとし。我心を琢く磨種なり、琢きて後に磨種に泥むこそをかしけれ。假令儒家にて學ぶといふとも、學び得ざれば益なし。佛家を學ぶとも、我心を正く得るならば善かるべし。心に二つの替あらんや。佛家に習ば、心が外に替る者と思ふ者は、笑ふにも又絶えたり。佛家も最初は儒學より入る僧多し。儒書が妨になりて、佛意を得ること成り難きことを聞かず。儒者もその如くに、佛法を以て心の磨種にして、心を得て何ぞ儒家の妨となるべきや。既に佛氏儒者の方にて發明しても、用ふる所は佛法に用ふるなり。又經論に囚つて見れば佛は覺なり、覺は一切衆生の迷ひ解るなりとあり。迷解くれば、本に歸るゆゑに、三界唯一心と言ふ。迷の解けたる體を名附けて佛性と言ふ。佛性と言ふは天地人の體なり。至極の所は性を知る外に佛法あらんや。佛より二十八世、達磨大師見性成佛と說けり。又儒には道の大原は天に出づ、依つて天の命これを性と言ふ、性に率ふは人の道なりと說き給ふ。性と云ふも天地人の體なり。神儒佛ともに悟る心は一なり。何れの法にて得るとも、皆我心を得るなり。又禪家の僧などは、天地は大豆粒のやうなる小き者なるを、己とし止まらんやと言ふ。これは法性不思善不思惡の地位に至れば、天地の名を離れたる者なるゆゑに、此假

の名に泥み止まらぬことを言ふなり。然れども天地の外へ去るといふことにはあらず。又性理にくらき儒學者などは、此事を聞き驚いて、これは禪家のこと、格別なりと言うて除き置くなり。是を除き置けば、告子が弟子に成りて不「得」言勿「求」心といふ者にして、儒者にてはなし。何の告子に替る事あらんや。中庸に、子曰、舜其大知與。舜好「問而好察」邇言「隱」惡而揚「善執」其兩端「用」其中民「其斯以爲」舜乎。舜は天下の善惡を受容れ、惡を去りて善を用ひ給ふ。今世の人は我心に濟ぬことあれば、善惡を擇まず除け置くなり。孔子舜を大知と宣ふは、何にても問ひ尋ぬることを好み、近き言葉の中にても能察し明め、惡きことは隱しおき、其中にて、能き言葉を執り用ひて、其善の中にて、又兩の端を擇び、其中にて能き言をとりて、民の上に用ひ給ふは舜なり。是を以て大知聖人なりと宣へり。實の學問と云ふは毫釐も私心なき所に至ることなり。孔子の如く德御座共、巧「言令」色足恭左丘明恥「之丘亦恥」之と宣ひ、又述而不「作信好」古竊比「於我老彭」と宣ふことを知らるべし。其德は古今聖人に勝れ給へども、此等の賢人にも一事の德あれば慕ひ給ふ。無我の所を法とすべし。況や心を得度く思ふ者、私心有つては得らるべき所にあらず。心は彼にては得られず、此にては得らるゝとは定めがたし。孔子在「川上」曰、逝者如斯夫、不「捨」晝夜」と、道の體を指して、見易かるべきは、川の流に如くはなしと示し給ふ。滄浪の水濁らば足を濯ふの歌を聞給ひ、小子これを聞け、自心に不善あれば、他より侮を受くると示し給ふ。聖人は見聞くことを心とし給ふ事かくの如し。道に信仰あるこそ、聖人の學問とはいふべけれ。我前方に一物一大極のことを疑ひしに、或書を見侍るに、天地一面の神國といはゞ博くして狹し、微塵の中にも神の國ありといはゞ狹うして博しと云ふことを見て、一物一大極の疑を解く。他の書を見て解くといへども全く儒の害をなすにあらず。儒をまなびし道を以て、御神託を拜するに、少も疑はしきこともなし。且佛老莊の教も、いはゞ心をみがく磨種なれば、捨つべきにもあらず、一度琢きて後は、佛老莊より百家衆技の類を寄聚め見ても、心は鏡の如し、物來る時は卽應じ、物去る時は卽靈々として一物を止めず。此心を得て後に聖人の教に向はゞ、明鏡に對して我形を見る如し、天地萬物の上を見るも、唯一理にして、我掌を見るに同じ、皆我一體なり。日本紀云、天照大神手持「寶鏡」授「天忍穗耳尊」而祝「之曰、吾兒祝」此寶鏡「當」猶「祝吾可「與同」床共」殿以爲「齋鏡」と。此天照大神は神璽御德寶鏡寶劍御德見御神也。中庸に所謂自「誠明謂「之性」者にして天道なり。天忍穗耳尊は、中庸に所謂自「明誠謂「之敎」者にして、由「敎神璽御德」に入り

給ふ所なり。神璽の御德に至り給へば、寶鏡寶劍の御德は、其中に籠り給へり。此寶鏡を視ますこと、吾を視ごとくすべしと宣へば、寶鏡を直に天照大神宮とも拜むべし。床を同殿を共にすと宣ふは、寶鏡の御德を離れ給はずば、代々の君天下を平に治め給ふべしとの御寶勅なりと拜すべし。此理を知らずして事を行はゞ、君としては國を亡し、臣としては家を亂し、政道正しからずして無益の物を殺し、人欲肆にして無道を行ひ、五倫五常の道に背き、出家は五戒を破り佛の道に背くべし。世法を治るには、聖人の道にあらずして何を以て治めんや。故に儒道佛道老子莊子に至るまで、盡く此國に相とする樣に用ふることを思ふべし。日本宗廟天照皇太神宮を宗源と貴び奉り、皇大神宮御寶勅に任せ、萬くだ〳〵しきを拂ひ捨てて、一心の定れる法を尋ねて、天の神の命に合ふ唯一を相くるに儒佛の法を執り用ふべし。こゝを以て、一法を捨てず一法に泥まず、天地に逆はざるを要とす。

或人曰く、客の問ふ所、未盡さざる所あり。汝が答を聞くに、學問の道他なし。其放心を求むる而已とも言ひ、又聖人の心は無心なりとも說く。無心ならば心を求むることは有るまじ。實に心を求むると思はゞ、無心と說くは非なり。何が是何が非と、一に定めずして加樣に紛はしく說くはいかなることぞ。

答ふ、敎の道は一定の中に膠して變を知らず、一を取りて百を捨つる如きにはあらず。喩ていはゞ、一本の丸木桴に乘るが如し。よく乘り馴し者は、何を踐んでも踐む所直に中と成りて乘ることやすし、乘り馴れざる者は、丸木ゆゑにぐれ〳〵として踐む所を知らずして乘ることかたし。學問の道もかくの如し。心を知らざれば聞けども聞こえず、又心を知る者は何を聞きても一理なれば、皆我心に合へり。其放心を求むると說くも、聖人の心は無心なりと說くも、二つにはあらず、一致なり。天地は物を生ずるを以て心とす。其生ずる所の物、各天地物を生ずる心を得て心となす。然れども人欲に掩はれて此心を失す。故に心を盡くして、天地の心に還る所にていふ時は、放心を求むると說き、又求めうれば天地の心となる。天地の心になる所にて說くときは無心と言ふ。天地は無心なれども、四季行はれて萬物生る。聖人も天地の心を得て、私心なく無心の如くなれども、仁義禮智行はる。一旦豁然として貫通する時は疑は晴るものなり。聖學を論ずるといふは、此心を知つて後のことと思はるべし。

都鄙問答　卷之四

○學者の行狀心得難きを問ふの段

或人問うて曰く、或所に幼年より學問し、四書五經は云ふに及ばず、何にても書物暗ずる程の德有る人あり。然れども心得がたきこと多し。一事を擧げて言はゞ、金銀借用等に、不埒なること多し。夫ともに手前にも儉約を守らるゝ上にて、是非なく不足あらば、他の了簡も有るべけれど、手前は取りじめなく、他人に不埒をなし、且親への事も何とやら惡しき所有りて、親の心に合はざれば、先は不孝と言ふべきか。さて身の行作を見れば、物知顔に我をたかぶり、辯舌は鮮なれども、聞きなれぬ挨拶にて、兎角耳に入りにくし。なにとやら寄りそひがたき風俗有りて、十人が九人までは嫌ふなり。是を以て見れば、親の氣に入らぬも尤なりと云ふ者多し。博學の德有りて加樣なる身持あるは、如何なることぞ。

答ふ、汝は德と言ふことを曾て知らずと見えたり。加樣なる疑はしきことを問ひ定めらるゝは、左もあるべきことなり。其學者は德に至るの學問にはあらず、文字藝者と言ふ者なり。

曰く、然らば書物を讀む外に學問と云ふことありや。

答ふ、いかにも書物を讀む事にて候。然れども書物を讀みて書の心を知らざれば、學問とはいはず、聖人の書は自ら心を含め給ふ、其心を知るを學問と言ふ。然るに文字ばかりを知るは、一藝なるゆゑに文字藝者と言ふ。

曰く、書を讀むは同うして、汝今分けて二つとするは、證あることに候や。

答ふ、孔子謂二子貢一曰、女器也。子貢の學は記憶能して記すこと多けれ共、いまだ德に至らず、志あれ共仁に至らざる中は器なりと宣ふ。器とは一品の役をなし、萬事に通ぜざることなり。子貢は志あるゆゑに、終には性と天道とを聞いて、君子の德に至り給へり。汝の云へる學者は、親には不孝をなし、他人には僞を言ふ、是皆不仁のことなり。文學ばかりにて一藝なるゆゑに文字藝者と言ふなり。德とは心に得て身に行ふを云ふ。我心を得れば父母には孝行をなし、他人には僞をいはず、詐をいはざれば、出入等に不埒はなさず、返す覺えなきものは借らず、飢ゑて死すとも不義の物を受けず、己が欲ざる所を人に施さず、我才能を以て人にほこらず、他人の善事を身にうつし、人の惡事を見ては、我にもこの惡事あらんかと恐れ、己を顧み、仁義の志有りて止ざるを聖人の學問と言ふ。子曰、有二顏回者一好學、不二遷怒一、不二貳過一、不幸短命死矣、今則亡、未二聞一好學者一。と。顏回の心は鏡の物を照すが如し。右の怒を左に遷さず、前に過つことを後に復せずと。如是心に得て身に行ふを德に至ると言ふ。故に文學に長じたる子夏子遊を、好學とは宣はず、詩書六藝七十子習て通ぜざるにあらず、通ずれども文學は用なり、德とはいはず。汝の云へる學者は、年久く文字を數へても、書の心を得ざるゆゑに、不孝にして世の交あしく、不義の類多し。然れども文字さへ讀めば德ありと思ひて、世間に取違へる所なり。誤るべからず。

○淨土宗の僧念佛を勸むるの段

或淨土宗の僧、毎々參られしが、或時來りて曰く、汝は儒者の事なれば、佛法を勸むるにはあらねども、無常變易のならひなれば、また徒然の折柄は、百遍二百遍づつ成りとも、念佛を勉められなば、後世の便とも成るべし。且儒にて終に聞及ばざるの大事も、佛法にはこれあれば申すことなり。

答ふ、思召よられ、斯く申さるゝこと過分の至りに候。扨其儒になき大事とは如何なることに候や。

曰く、先儒佛道ともに、勸善懲惡の教はしれたることなれば、相替ることもなかるべし。如何としても、儒には教のとゞかざることあり。

答ふ、教へてとゞかぬは孔子宣ふ下愚の不徙ものと言ふことにて候や。

曰く、その下愚は、目も見え、耳も聞え、口にも言ふ者なれば、教のとゞくことあり。下愚のものにても、佛前や神前に向ひ、これは神、これは佛ぞといへば、名は聞くなり。然れば是程の教とゞく所あり。如何しても教のとゞかぬ者に、とゞかする傳授あり。その傳授といふは、啞と聾と盲と、此三色を身に具へたる者は、先聾ゆゑに法を聞くことならず、盲なれば見ることならず、啞なれば言ふことならず、如是三重病人にても救ひ、往生することを傳授するなり。此を以て見れば、儒には闕けたる所あり。今世のこと斗にて、後世を救ふこと能はず。

答ふ、其救はるゝ罪は、何に因て出來申し候や。

曰く、その罪と言ふは、物を見ては見るに附き著念を發し、聞くにつきては喜び怒り、言ふに附きては他を譏り人に怒らせ、其外種々の罪を作る、擧げて數へがたし。如是つみ咎を救ひたすくることなり。

答ふ、然らば此に君を弑し、親を弑したる者あらん。その罪逃るゝこと能はず。これをも助くべきや。是を助けなば屆かぬ所をとゞかずと云ふものなり。助くること能はずといはゞ、三重病人も助くること能はざる證なり。且三重病人は見聞言ことなければ罪なし、罪なき者に助けはいらず、其外に助くることありや。

曰く、否猶大事あり。三重病人と生ることは、過去の因緣なり、此を助くる傳あり。三世を攝て救ふことは、儒道にはなきにあらずや。

答ふ、左樣の教は、傳へ來ることなし。天地の間に生るゝ者は、天を父とし地を母とし自ら生ず。朱子曰、自天降生民則既莫不與之以仁義禮智之性矣、然其氣質之稟或不能齊と。今日人に生れたる者は五常五倫の教あり。君臣の義、父子の親、夫婦の別、兄弟の序、朋友の信、これを能く行ひ、仁義禮智の性を全うし、天命に至らしむる教なり。草木は天にたがはざるに因つて、教は入らず、人は喜怒哀樂の情に因つて、天命にそむく故に、教をなして人の道に入れしむ。固より啞なれば言ず、聾なれば聞かず、盲なれば見ず、見聞言ざれば咎なし、咎なき者は赤子に同じ、赤子は教へざれども無知の聖人なり。抑聖人は見るに心なく、聞くに心なく、言ふに心なき故に、不失赤子之心者は聖人なりと、孟子宣へり。

是又三重病人に似たり。聖人の教は咎ある者はこれを正す、咎なき者を何ぞ正さん。扨汝に問ん、所々に庚申と云ふを見れば、見ざる聞ざる言ざるの猿なり、これを三疋合すれば、三重病人なるを、これは佛菩薩として人に拜ます。然れば三重病人も、佛菩薩に近きものを、傳授なくては救ひがたしと云ふは、如何なることぞや。且圓光大師は念佛の外に奥深きことを存ぜば、二尊の愍にはづれ、本願にもれ候べしと、一枚起請はありとかや。一枚起請にては、奥深きことはなしといひ、今汝が言へる所にては、傳にて大事を傳ふと言ふ、これ大師の教にたがふべし。儒には左様の箱傳授はいらず。

曰く、然らば汝は、段々傳へ來る大事をみな僞と云ひ、非法するは如何なることぞ。

答ふ、何ぞ理なく他を非法すべき。念佛宗に云ふは、西方極樂へ往生し、彼國に至つて、如來の說法を聞きて悟を開き成佛するとの教なり。汝如き、人の導師と成る者は、此所を能々工夫して開くべき所なり。佛氏にて言ふときは、迷ふが故に三界城、悟るが故に十方空、本來無東西、何處有南北矣。如此なれば、彼國と言ふは、唯心の淨土と言ふことに決定せり。淨土と言ふも我心のことなり。普廣菩薩白佛言、世尊十方佛土、皆爲嚴淨、何故諸經中偏歎西方阿彌陀佛國勸往生佛告普廣菩薩、一切衆生濁亂者多、正念者少、欲令衆生專心有在、是故讚歎彼國爲別異耳、若能依願修行、莫不獲益矣と。是に因て見れば、一切衆生に心の濁亂るゝ者多く、正念の者は少き故に、衆生の心を一筋に向はしめん爲に、西方を極樂と指て教ふと宣ふこと明白なり。然れば極樂を西方と教へ給ふは、愚癡の者に說き給ふ法にて、上知の教は十方佛土なること明なり。師範と成る者は別して味ふべき所なり。愚癡なれば先我往くべき道を知らず。我往生を知らずして、他を導くべき所にあらず。扨如來の說法と言ふは、直に南無阿彌陀佛と知るべし。如何となれば、口に唱へる南無阿彌陀佛が耳に入り、一遍の念佛にては一念の惡を消し、二遍の念佛にては二念の惡を消す。惡念死して善心生るなれば、これ卽往生なり。往生に三義を立つる中に、一を舉げて云はゞ、往は猶此のごとし、此に生るなり、自心よりうまるを以て、故に不往往を名づけて往生となすなり。念佛の行者も、初には火宅を厭ひ離れん事を思うて、極樂往生を願ひ、彌陀を念ずるなり。夫より年月を經て、南無阿彌陀佛、南無阿彌陀佛と唱ふれば、念佛にくせづきて、終には餘念他念なく、後には南無阿彌陀佛斗になれば、往かずして南無阿彌陀佛に生るゝなり。南無阿彌陀佛になれば、我と云ふものあるべきや。我なければ虛空の如し。虛空に南無阿彌陀佛の聲有て唱れば、此卽阿彌陀佛なり。阿彌陀佛

直に御名を唱へ給ふは說法にあらずや。此說法の功德に依て、彌陀を念ずる行者も念ぜらるゝ方の佛も、雙方ともに一體と成り、苦樂の二つを離れ終るなり。離れ終て無心無念の不可思義と成る、是を名づけて自然悟道とも言ひ、能所不二機法一體とも言ふに非ずや。大原問答に曰、自有相修因、直入無相樂果、抑往生見令體達無生理。是等の所は如何得心せられ候や。阿彌陀經曰、從是西方過十萬億佛土有世界、名曰極樂、其土有佛、號阿彌陀、今現在說法。現在は目前のことなり。唯心の淨土、己心の彌陀なれば、娑婆卽寂光なり。然れば現在の說法と言は、草木國土悉皆成佛にて、森羅萬象悉く一佛なれば、柳は綠花は紅と分れて、己々が法を說なり。一心不亂の修行を以て此に至り、九品の淨土を目前に拜むべし。これ卽諸法實相の所なり。光明遍照、十方世界、念佛衆生、攝取不捨。他宗は修行の功を積み、觀念座禪等を以て、此理を悟るなり。然るに難行をせずして悟開かるゝ故に、念佛宗旨は諸宗に勝れりと、汝も口眞似するにあらずや。釋尊の法性を悟り、一佛成道し給ふと、念佛にて法性に至り、自然悟道したると、二つの替ありや。法性に二つ無くば、南無阿彌陀佛にて、淨土宗門は事足るべし。然れども傳授なくては足らずと云はゞ、大師の起請は僞と言うて破り捨てんや如何。

○或人神詣を問ふの段

或人問うて曰く、吾頃日親の年忌につき、國本へ參り候所、產神へはまゐり申さず候。子細は此度墓參り第一に存じ、最初に墓まゐり致し身汚れ候ゆゑ、產神へは參詣いたさず候。又神へ先に參りては、親を疎末になすやうに存じ候。かやうのことは如何。

答ふ、親の心に適ふやうにせらるべし。

曰く、親はなきゆゑに問ふこともならず、親の心いかゞしてしるべきや。

答ふ、都て親の心は、子の身の上能きことを願ふものなり。親の心は子を思ふに到らざる所なし。然れば身の汚なき以前に、產神へ參らるべし。親存生の時に、汝在所へ往れなば、先產神へ參るべしといはるゝに非ずや。然らば先社參して神を敬はゞ、是親の心に合ふといふものなり。父母の心に合ふほど宜しきことあらんや。范氏曰、子能以父母之心爲心則孝矣。中庸事死如事生といへり。今は父母なしといへども、此意味を得心して事うまつらば孝行と成るべきことなり。

○醫の志を問ふの段

或人問うて曰く、吾忰の内一人は醫者に致し度候。渡世の爲には、如何なるものにて有るべきや。

答ふ、吾醫之道は學ばざれば、委からずといへども、暫く志す所を以て告げん。先第一醫學に心を盡すべきことなり。醫書の意味得心なくして、人の命をあづかる事は恐るべし。いかんとなれば、我一命の惜しきことを顧み、他人に推及す。かゝる時は病人を預りて、一時も心ゆるやかなるべからず。譬ば我身に頭痛し腹痛む時は、少の間にても堪忍なるまじ、其堪忍ならぬことを知らば、人の病を見ては我病の如く思ひ、心を盡し療治せば、一夜にてもゆるやかに寐ることはなるまじ。人の命を惜み藥を施し、施すを以て心とし、病氣快然を以て樂とし、藥禮の事を思はず、療治すべき事なり。藥禮を思はずといへども、病家よりは、一命を賴むことなれば、身分相應の謝禮は有ることなり。或人言へることあり、渡世の爲ならば、醫者はすべき者にあらずといへり。藥をほどこすと言ふ所より見れば、左も有るべきこと哉。渡世のためにせば、藥禮の滯る所へは、往きがたき心も出づべきことなり。追附見舞んと言うて延引致し、其病人若死にも至らば、天命とは言ひながら、其醫の心に成りて見れば、我より不仁の私欲を以て、かくなしおこなひ、天命と片づけては置きがたかるべし。孟子曰く、殺人以刃與政有以異乎、曰、無以異也と。殺す品は替るとも、罪に替は有るべからず、恐るべきことなり。心一杯をつくし、人の命を惜む仁心ありて、藥をほどこし、且病治せざるは是非なしとも言ふべし。子曰、人無恒不可以作巫醫善哉と。醫は人の生死を寄せ賴むものなり。人の命を惜むを以て我心とせざれば、過の不仁多かるべし、我命を惜む心を以て、病人を愛せば、過すくなからん。斯のごとくせば、實に仁愛の醫者と成るべし。其仁愛を失ざれば、これ醫の恒と云ふべきか。これを味ひ見れば、治しがたき病人あらば、何ほども醫書に眼をさらし工夫すべし。博學の爲にはあらねども、病人を實に愛憐する所より、終に博學の名醫と成るべし。博學と言ふは、詩作文章を事とするには非ず。此醫の志すべき所の大略を言ふ。

曰く、然ば博學の名醫と言へるは醫學ばかりのことにて候や。他の文學なく挨拶等常體のことばかり言はゞ、輕々しく文盲に見ゆべし。文盲に見えては他の信仰も薄く、信仰なき所にては療治なども成り難かるべし。身の飾をなす爲には、詩作文章をも兼て博學なるが宜きにあ

らずや。

答ふ、博學は我も好む所なり、捨つるにあらず。然れ共醫學熟して後のことなり。本末を正すときは、醫學は本と知るべし。有子曰く、本立而道生と。本末の違へるは君子の道にあらず。扨汝は世俗の聞なれぬことを言ふを、博學と思はれ候や。それは麁相なる了簡なり。良醫は聞きなれぬことを言ふものにあらず。醫書に望聞問切と云ふことあり、先病人に望み、容體を見るを望と言ふ、樣子を聞きて病を知るを聞と言ふ、不審を問うて察するを問と言ふ　脈を診みて病を定むるを切と言ふ。然れば病人に望み、其容體を默して後に病の事を言せて聞き、又委細の事は看病の者に問ひ、且脈を診みて、我意に合へるか合はざるかと得心して、藥を用ふべきことなり。それに人の聞きなれぬことを言ひ、先方へ聞えざれば、また先よりの返答も違ふものなり。互にきこえずば望聞問切と違ひ、病根を察して藥を用ひ療治することは成るまじきことなり。子曰く、辭達而已と。辭達して已むとは我言ふこと先へ聞ゆれば已み、きこえざれば聞えて通ずるまで言ふべしと宣ふことなり。言ても聞えざることを言ふ者は狂人なり。狂人が爭で療治すべき。京都に住める醫者、醫書と論語を見ざるほどの者有るべきや。聞えにくきことを言うて喜ぶは、邊土に居て假名雙子を見療治する者は、世間より何

も知らぬ醫者なりと、侮らるゝことを嫌ひて、色々の聞きなれぬことを覺えて言ひたがる者なり。良醫たる者箇樣のことあるべきや。

○或人主人行狀の是非を問ふの段

或人來つて物語して言ふ、汝の知れる如く、我親方は、今日にては內福なる者にて、財寶何に不足のこともなし。然れども金銀を溜るばかりにて、何を樂むこともなく、只金銀の番をする而已にて、貧乏人に同じ。親の代には相應の樂もせられ、少は奢も有りし故に借金も有りといへども、定の家督有るゆゑ、是非乞者も無れば、財寶有るに同じ、申さば澤山に遺ひ得と云者なり。一生それにて相濟み、果報人にて終れり。加樣のことは雙方の是非如何。

答ふ、總じて重きも輕きも人に事うまつる者は臣なり。臣たる者は善惡是非少は辨へあるべきことなり。先第一に天下の御政道に、奢はかたき御禁なり。奢る者は久しからずと俗語にも言ひ傳へ、また奢に因て流罪追放せらるゝ者、其數を知らず。高家にて國天下を亡す者を言はば、中古には平の清盛を始め、相模入道其外奢に因て國家を亡す者その數少からず。唐土にも秦の始皇は奢に因て天下を失ふ。汝の先の親方も、奢あれば天下の御法にもそむき、且定

りたる家督ありと云ふ、是奢の第一なり。上の命を受くるは民の常なり、假令御用達する身なればとて、手前より定ること有るべからず。況や其以下市井の臣と生れ、君の命を知らずして、此方より定りたる家督ありと思へるは、上を無する罪人なり。又借銀を乞ふ者もなしといふは辟事なり。如何となれば、汝今親方に仕ふるに、最早何年ほどは勤めたれば、いつごろは宿持せくれられんと、定て期にせらるべし。然るを時來りても暇を乞ざれば、宿を持せず、何までつかはるゝとも親方の遣ひ得と言つて、すまして置れんや。我身を推して知らるべし。汝が時節を待つ如く、貸たる者も、日限來れば利足を添て返さるゝを待つは常なり。其を乞ふ者なければとて、反さぬと云ふ法ありやや。然るに子が先の親方は借銀を返さずして死去せしを、汝は幸なりと思へりや。此は僥倖と云ふ倖なり。此倖倖と言ふさいはひは、人の物を盗みても、人を殺しても、其罪知れずして遁れたるものの幸なり。此幸は望むべき所にあらず。然るを果報人にて終ると云ふは如何なることぞ。推取してはすまざることの證あり。善惡の二を擧げて告ぐべし。先唐土の堯舜は天下を治め給ひ、仁と孝との法となり、大聖孔子は至德を以て、其道を後世へ傳へ給ひ、今に至つて唐土は云ふに及ばず、我朝までを照し給ふ、又盗跖は大盗にて、其惡名今に絶えず、天下の人これを惡む。聖人は不義の物は一芥をも受け給はず、盗跖は人の物を推取し、盗人の名は朽ちざるなり。此も同じことにて相濟むと言んや。借たる物は戻し、貸したる物を請取るは人の道なり。且孝弟忠信の德あつて、家業に疎からず、加樣の類を善事と言ふ。道は天地に昭然たり。然るを汝が先の親方は奢をなし、他借を乞ふ者なしとて反さず、反さずして死するは推取なり。其推取せしは聖人に近きや、盗跖に近きや、其不義を行ひし人を、一生事濟み、果報人ぞと思ふ汝は盗跖に與する者なり。今の親方は身を約にして、親の借銀を濟し、惡名を雪ぐ、これ人の道なり。范氏所謂、子能改二父之過一、變二惡以爲一美、則可謂孝矣と云ふこれなり。曰く、扨今の親方の致方は前に言ふ如く、今時の日傭取にも劣たる仕方なり。親の代には衣類も華美を好まれしに、今の親方は木綿布子に生布の帷子、小倉帶に高宮羽織、加樣に各別なる事を好む。是等はいかん。

答ふ、先汝が心に大なる奢あり。如何となれば、同下々にて我と日傭取とは格別なりと思ふ。此卽彼をいやしめ我をたかぶるの奢なり。農工商は一列に下々なり。然るに日傭取と我等如きと、何程違有んや。其を賤しきと見るは心せばし。今の親方は知有つて我をたかぶらず、上を恐れ身を下り、世に罕なる者なり。貴きと賤しきとの分れを知るは禮なり。凡て衣服に

羽二重より上はなし。其より木綿まで何程の品あらん。貴賤の次第を以つて云はゞ、上より地下に至るまで、其品何程と量るべきや。衣類は細に分けても、十段ばかりならでば無きものなり。位の段を以て品を立てば、下々は薦をきても善るべし。左もならざれば木綿を常の衣類となし、手前豐なる者は、祝日などには、衣類に絹紬までは、農工商共に用ふるなり。其法式を有りがたしと思うて背かず、急度執守りて、我身の賤しきを知り、其わかちを立らるは賴母敷ことなり。汝も親方が木綿きらるゝならば、常に洗布子のつぎのあたりたるを著らるべし。汝は是を異形の衣服と言ふ。孟子は加樣なる法に合へる、衣服を大聖堯王の服となし、法に背き分を僭るを大惡無道の桀が服となし給ふ。異哉汝が言へること。

曰く、折々は普請の手傳や手代の代りを勉めらるゝ。加樣なること如何。

答ふ、問によつて見れば、親方の心、人實に尤至極せり。汝は常を知りて變を知らず。格式定れる武の家を以て見るべし。治世といへども軍旅のことを捨てざるは士の常なり。唐土には田獵をして武の事を習ひ、我家の業を習ふは人の常なり。何程手代あればとて賴みとはならず、若手代なくならば、其時は家業を捨てんや。家業のことを知らずして、何を以て商賣取續き家を立つべき。孟子曰、禹八年於外三過其門而不入。禹是時に當て、天下の洪水を始め給ふ。我職分を勉め給ふことかくの如し。親方は我職分に疎からず、聖人の道を能く聞き得る人なり。

曰く、算盤細に、聚むることを好み、散すことは嫌にて、奉公人も綺羅なる者は氣に入らず、儉約者の見苦しき者を好きて、其者の給金にても下直なるかと云へば、其も替らず。かやうなる前後揃ぬこと如何。

答ふ、扨汝の親方は世の法と成るべき人哉。凡て下々の者は云ふに及ばず、假令二萬騎三萬騎の大將にても、算術疎くては、馳引備へだて成りがたからん。元來商賣人として、算盤知らずして何を以て勘定致すべき。奉公人を抱ふるにも、此手代は拾枚、或は五枚、下男は百目、彼は又五十目と、人別に替り有り。其者の働を見て、功有者には給銀を增すべし。其目利あらば、我手代に成るべきもの幾人も出で來らん。中庸に忠信重祿所以勸士也。これ君誠有て臣を養ふ道なり、背くべきにあらず。何を以てなれば、唐土項羽人をつかふに、功ある者には國を封ずべきを吝み、忍んで祿をあたへず、卒に漢の高祖の爲に亡さる。是臣より君に怨ある故、こゝろ替りて高祖に往き、却て我敵となる。此其功と祿と算用知ざる所より發れり。假令項羽に無禮有りとも、高祖に往くは臣の道にあらず。不忠の者も仁を以て忠臣のごとく

使ひなすは君の道なり。この故に汝が親方は、義理有つて出すべき給銀杯はこれを出し、聚むべき物は能く聚め、散しては聚め、聚めては散す。此二つ義に合はゞ、假令家國を治むるとも何の難きことあらん。奉公人も、儉約者は給銀を溜て主人の恩を知る。奢る者は給銀や鼻紙代にて遣ひたらず、足らざる所は盜みし遣ひながら、我旦那は幾年勤ても勤甲斐なしと言ふ。汝が親方は此を知る。こゝを以て給銀をねぎらず、見苦しきを反て喜ぶ、是誠の道を以て人を遣ふなれば、忠あるものを求め得ること多からん。子曰、以〻約失〻之者鮮矣と。儉約者を好むは尤なり。國家を治むるも約を本とするにあらずや。假令財寶ありとも、善人を得ずば何を以て家を治めんや。

曰く、先年の困窮年に、親類中、其外宿もち手代どもへ、米穀を調へ金銀を貸し、明年より取りかへさんと言ふ。借方の中より手前勝手に相なり候まゝ、今日よりは利足を出し借り度よし言ふものあれども、聞いれずして取り反し、内に積置き番をさせる。斯樣なる費を知らざることは如何。

答ふ、是一入而白し。親類手代中も、先旦那は人の物を反さずして奢れしを見習ひて、奢ることを知つて、まさかの時の貯をすることを知らず。其を教んために急々に取り立てらるゝと見ゆ。且借したるものを取反すは古今の定法なり。孟子曰、非其道也一介不以與人一介不以取諸人一と。心正き親方、貸し取ることに心あらんや。人を不義に陷し入れずして、且救はん爲なるべし。

曰く、左樣なるかと思へば、出入の働人などの、何の好もなき者には多くの米穀を施し、其は又遣捨てにせらるゝ。然れども誰が一人として禮にも來らざれば、格別に喜ぶ體も見えず。畢竟遣損なりといふ者あれば、否物を施すは禮を受る爲にはあらず、其筈のことなりといはる。又吝いことは、虱の皮を千枚にへぐやうにせらるゝ。これらは如何。

答ふ、扨此に至つて一入感心いたす所なり。何を以てなれば、金銀は天下の御寶なり。銘々は世を互にし、救助る役人なりと知るゝと見えたり。此故に困窮に至りて多くの人を救ひ、又救はれし者どもより忝しと染々禮をいふ者もなけれども、其厭なきは聖人といへども、此上も有まじきかと思へり。孟子所謂若民則無恒產因無恒心と。民の如なきは常なり。其愚なる處を知つて、其者より我慈悲を知らざれども、其厭なく、他の憂を救ひ自これを任とす。能く貯へ能く施す。今の親方は、學問を好まるゝとも聞ざりしが、假令一字も學ばずといへども、此ぞ實の學者ならん。先人は天地物を生ずるの心を得て心とするなれば、人物をは

ごくみ育ふを以て要とす。孟子所謂、君子所レ性雖レ大行不レ加、雖レ窮居不レ損、分定故なりと。是を以て見れば、人は貴賤に限らず、盡く天の靈なり。貧窮の人といへども一人飢ゆる時は、直に天の靈を絶に同じ。此故に聖人は民を養ふを以て本とし給ふ。此を以て飢饉年には、御上より飢者を救せ給ふ御事なれば、子の親方も御法を能も用ひ盡されたり。其志誰も斯は有がたきものなり。

曰く、親類一家祝儀の音物は、取遣ともに三分一に減し、七日の法事は三日に減し、一日の齋は三日に増し、齋非時も五十人の僧を二十人に減し、一石の施行は三石に増す。此等は如何。

答ふ、我分を能知て天を恐るゝ志、有がたき事なり。音物を減し、法事の日數を減し、僧を聚むることを減ずるは、分限を知らるゝが故なり。法事に齋し、敬むは禮なり。施行米を増し、人を救ふは仁の施なり。凡て増減を知るは智なり。實に智仁の心を能く用ひたるありさま、左も有るべきこと哉。孔子も禮與レ其奢也寧儉喪與レ其易也寧戚と宣ふ。扨五十人の僧を二十人に減ずること、定て疑ひあるべし。

曰く、法事は少にても増すを善事と云ふべし、減すを善と云ふは如何なることぞや。

答ふ、似つかぬ事ながら、汝心得やすきやうに、事を設けて語るべし。汝も生れし時は赤子として法名を附くべし。其時々の名を召ば答ふるなり。其名は實の者か假の者か。

曰く、名は附けて生るゝものにはあらず、先假のものなり。

答ふ、汝を盗人と云はゞ如何。

曰く、盗人と云はれては身分立ず、この故に怒るなり。

答ふ、善人と云はゞ如何。

曰く、我に善事はなけれども、譽めらるゝはあしからず。

答ふ、盗人と云ひ善人と云ふ、これ假の者にて、外より附けたる名なり。其に何とて怒り喜ぶことぞや。

曰く、假の者とは思ひしが、名も我に添ひたる者なれば、これも實物に同じ。盗人と云はれては思はずして怒るなり。

答ふ、今汝ぢが爪を切り捨つるに、爪の中に爪と云ふ名ありや。又汝が身を切り裁いて見ば、汝が名あらんや。

曰く、爪を切り、身を切るとても、名はあるまじ。

答ふ、爪を切り身を切るとても名はなし。形は土なり。名は則汝なり。神と言ふ名は直に神なり。名の外に神佛はなし。因て先祖親祖も、法名を附けて召べば直に親祖なり。扨又汝祭や節に召れて往かんに、先の夫婦機嫌の好きが善からんや。機嫌は悪しくとも、料理のよきが善からんや。

曰く　料理は麁相なりとも、亭主機嫌の好きが勝るべし。

答ふ、先の親方は大業なる法事など致されしとあり。實に然りや。

曰く、信心者ゆゑ、佛のことは大業に致され候。

答ふ、法事の時何も機嫌能く喜んで勉められ候や。

曰く、大勢の客を疎末にせぬ心ゆゑに、下々の廻り悪ければ、勝手の者は呵りまはされ候。

答ふ、傭人などにも、法事の心附をもせられ候や。

曰く、大勢の出家なれば、布施までのことにて、外の心附は致し申されず候。今の親方は異もの、布施は前の格式より仕過し、世間に替て、出入働きの者にも、傭の外に心附を致し無益の費御座候。

答ふ、然れば先の親方は呵りまはすと、我腹立つるとを法事にせられ候や。

曰く、左にはあらず、出家さへ五六十人も招かれ候へば、勝手には人足らぬ故に氣をせき、自ら怒られ候。然れども結構なる法事は致され候。

答ふ、法事に佛前の供物は自ら備へられ候や。

曰く、外の世話多く、それまでは手が屆き申さず候。

答ふ、座敷の膳や引菓子杯は自らせられ候や。

曰く、それは丁寧なる者ゆゑ、重客の分は是非共自らせられ候。

答ふ、汝は最前に、主機嫌悪敷所へ召れ往くは、否と云ふにあらずや。我身を推て萬事を知るべし。法事の上客は親祖なり。然るに親祖の所へ、顔出しもせず、配膳も他人に任せおき、相伴人を馳走する禮法はあるまじ。左樣に不待の所へ、料理の好味を喜び、先祖は來らるべきや。若來れることありとも、爭か快からん。快からざることをなして孝行の法事と云はるべきや。

曰く、先祖は最早佛なれば、其構はなきにあらずや。

答ふ、汝は最前に名も實物と言ふ。佛前に法名あれば是直に親祖なり。神佛も名を祭り、親祖も名を祭る。名は直に體なり。體卽心なり。こゝを以つて孔子も、祭神如在、吾不

ふ。祭と言ふはいま此國の法事のことなり。孔子大聖の德御座て、親祖の祭には沐浴し、心を齊へ身を清め給ふ。親祖を祭るは、我誠あれば靈來つて供物を受け給ふ。誠なければ靈來らず、祭ると言ふとも何の益あらん。因て今日法事を行ふとも、只孝行を主とすべし。然るに汝が先の親方は、多く出家を召集め、客あしらひに隙をとられ、且臺所に人少ければ、廻りあしく、佛前の勉は他人に任せおき、それにて先祖在如きの馳走成るべきや。分を越えず、奢にならずば、出家多きを惡しきと云ふにはあらず。總じて今の世の法事を爲すを見るに、名聞のみにて、勝手は働者を儉約し、人少くして客は多きゆゑに手廻し出來ず、主は腹立ていかること多し。其怒れる顏つきして親祖に向ひ、何の法事に成るべきや。實の法事と云ふは、我心を散亂せず、安樂なる顏つきを親祖にも見せまゐらせ、出家衆へも衣の損じ料、澤山にあるやうに、布施に心を附け、出入働きする者にも、傭の外に心附をなし、何方も快く喜ぶやうにするこそ實の法事とは云ふべけれ。入用の金は心當を極め置き、名聞の爲に出家を聚むるゆゑに、自ら布施は減じ、其外爲すべき事に不足あることなり。法事をするとて人を怒らせ、我も腹立て、下々は手足摺粉木になるほど、つかひ苦めることこそ哀しけれ。天下に大法事など行はせ給へば、諸國殺生禁斷、罪人も御赦免なさるゝぞかし。かゝる實の御法事を法とし、身の分を僭す、約にして、金の入用をへらさず、寄り集る者盡く快く喜ぶやうにせば、親祖を弔ふ實の法事となるべし。

曰く、兎角今の親方は、貧乏人が好きかと思へば、又財寶を聚め、其聚めたる金銀にて、衣服にても拵へ、美食にても好むかと思へば、毎々は食と汁に香物菜、朔日十五日廿八日は鰹膾に香物、正月節は鰹膾に鰯の燒物、大根汁に香物、祭は瓜膾に燒物は鰤のせんば、茄子汁に香物、不圖の客あれば、茶漬食に香物、有增かくの如し。夫ゆゑに寄り集る親類衆も、我家の格式とは大いに違ふ故に、箸を取りそむる斗にて、節や神事も淋く、陰口を聞けば、醜鬼じやの客嗇のと人のやうにはいはず。加樣のことを聞くも氣毒なり。是等のことは如何。

答ふ、其一家一門の譏は、皆々法を知らざるゆゑなり。道有つて聚る金銀は天命なり。天の賜る財を捨しず、天の命にそむかず、約を以て禮の本を守れり。又道を行ふ者は、他のそしりは有るならひなり。孟子曰く、無傷士增茲多口、詩云、憂心悄悄、慍于群小、孔子也と。聖人の行は小人の行に違へる故、衆の口の爲に孔子も譏に逢ひ給へり。又美食を好ざるは身の分限なり。二汁五菜七菜杯と云ふ、重き料理は下々のことにあらず。御上より品を

分けて見ば、汝の親方の料理は、今少し奢にても有るべし。それを一門衆は、箸を取り初むる斗とは、分を知らざる奢り者なり。先飢饉年には飯米の調へ代を借り、汝の親方の恵により飢に及ばず、それを忘れ身の分を知らず、今手前豐に暮せばとて、左樣の悪口を吐るゝこと論ずるに足らず。其人々にも、道を知らせんと思はるゝ親方は、中や不中を捨てざる、實に中才の人と孟子宣ふが如し。又其一門衆の悪口を聞きて居ながら、此を法とせよと心一杯に勤め見せらるゝは眞實と云ふべし、一家の衆用ひらるべきとは思はずして、心を盡さる斗なり。魯國の季氏泰山を旅せんとする時に、冉有季氏が臣として、救ひ正すことあたはざることを知りながら、孔子心を盡し給ひて、女救ふことあたはざるかと宣ふに能く似たり。

曰く、日外二男内證にて歌學せることを聞き、喜んで何ぞ褒美を遣らんとて、大算盤三面褒美として遣らるゝ。歌學の褒美に算盤とは、實に木に竹を繼ぐごとく、文盲なることをせらる。是らは如何。

答ふ、其褒美の心を知らずして笑ふ、汝は扨々文盲なる者哉。其二男の身の行を聞けば、家業の事は一として勉めず、尤色所のあそびはせられねども、諷鼓歌學に懸つて居らるゝよし、其ゆゑ前方には親父も折々異見せられしよし、然れども、汝等が思ふに、二男は悪所へは往れず、旦那位の身上にて、是ほどのことを急しく申されなば、反つて心癖みて悪からんと、大勢口々に言はるゝゆゑ、親父も其後はいはれぬよし。君子は本をつとむとあり。すべて家業に疎きほどの徒者何方に有るべきや。第一に不孝となる。不孝の罪は重くして、刑罰にも入れられずと、孝經にも說き給へり。家業に疎きを悲まれ、歌を詠むを喜るゝにはあらず。歌學に事よせて此褒美の算盤は、如何なることぞと心を附けさせん爲なるべし。それを汝等も同く利口さうに頭をふつて是を笑ふ。親の子を思ふ慈悲至らざる所なし。汝等が婦寺の忠を以て及ぶべきにあらず。

曰く、親類方や手代中より、金銀を借りに來る者あれば、貸かさぬは除置き、何れも方の家督にては、幾人暮持兼ることはなき筈なりと言うてかさず。又つもりが合へば彼は得歸へすまじと知りながらも貸るゝ。利のあることを曾て知らざるに似たり。是らの是非いかん。

答ふ、尤此事は深き心有るべし。如何となれば、世間にて金銀の出入するを見るに、假令親類手代にても、先彼は此ほどの金反すか反さぬかと、金銀を貸ざる前に吟味するは毎なり。然るに汝の親方は、先方の身上往きかぬる筋道有れば貸し、ゆくべき理あれば貸さずとは、親

の子を思ふ心と何ぞ替あらん。嗟世の中の人十人に二三人程、加様なる人あらば、世の難儀する人少かるべし。我金銀と思はず、我は此事を治むる役人と思ふ志、世に稀なることなり。我一族の人を左様に深切に思ふ身には、誰も成りたき者哉。孔子も「周急不継富」と宣ふ。「周急」とは困窮の者の足ざる所を補助ることなり。「不継富」とは富で餘ある者には、つぎ足すには及ばずと宣ふことなり。汝が親方の欲心を離れて、金銀を出し、人を救はるゝは、聖人の御志に能く合へり。或田舍に、其所にては内福なる人あり。此人親類中へ金銀を貸すに、借りに來る人あれば貸されけるが、戻す覺えあらば遣はれよ、此方金貸は家業にせず、因つて利足は取らずと言うて貸されけり。是程の人さへ稀なるに、汝の親方は先方の算用不足する譯を聞き屈け、道理の立ちたる不足なれば、何かへすと言ふことをかまはずして貸るゝなれば、合力金と云ふ者にて、取反すと云ふ心を離れたる仕方にて、天下に飢人を救ひ給ふに似たる者なり。

曰く、宮寺の奉加や建立ごとは嫌にて、死後には何に生れんと思はるゝや、曾て後世の善事はせられず、兎角當世に異なり。

答ふ、段々の間に因つて見れば、汝の親方の信心に合ふ程の、德有る神主や、出家が無きゆゑと見えたり。宮寺の建立ごと嫌るゝとは見えず。先古の樣子を考へ見れば、宮寺を建てたきと言うて、奉加帳を旦那の家々に持ち來り、いやがる旦那に奉加をすゝめて金銀を出させ、其金銀を持ちて建立せられたる神主開山方は有るまじ。皆々德有る故に神道佛道の棟梁と成れり。神の御心を云はゞ、常に供し奉る者なく、金石を食する共、常に心に濁り穢し人の捧る者は受けずと、八幡宮の御神託にあらずや。其に氏子の志なき金銀を、慈悲正直の神受て喜給ふべきや。又吾もろ〳〵の蒼人草いつはり謀りて、假令善と思ふ共、必ず天の尊の怒を受けて、根の國におもむかん、正き心を持ちて正に惡しく共、必ず天の神の惠あらんと、皇太神宮の寶勅なり。神御納受無きことに、氏子を苦しめ、金銀を出させなば、神の御心に背くにあらずや。神主と成る者は御神託に因て神の御心を知るべし。何事も御心を知るの德による。譬へば禹王の有苗を征せしも、師を班し德を敷くには如ざりき。物の成就致しがたきは身の不德なりと、我を顧ば、恥しきことも多かるべし。心を明にする爲に神に仕へ、反て心昧くば神罰を受くること速ならん。扨て佛の道は五戒を有つに依て、佛の弟子にあらずや。其に寺の修覆と云へば、内福の寺方にても、世間に習うて家々へ奉加帳を出すこと有つて、强く勸れば、旦家迷惑し、出しかぬる金銀を出させ、人を苦め傷るは殺生と云ふ者なり。一戒を

破れば五戒は盡破るゝなり。證を以て言ふべし。毘婆娑論に、一の鄔波索迦あり、性仁賢にして五戒を受持てり。專ら精しくしておかさず。後に一時に於て水に逼り、一の器を見れば酒有り、水の如し。取りてこれを飲む。その時飲酒戒を破れり。時に隣に鷄有り、來りて家に入る。盗み殺てこれを食ふ。殺生戒と、偸盗戒を破り、隣の女鷄を尋ねに來る、強逼て是に交る。邪淫戒を破れり。隣より官所へ訴ふ、これを拒み爭て妄語戒を破る。如是一戒を おかすに依つて、五戒悉く破れて佛の罪人となる。佛心を悟つて後は、例令奉加を勸むる共、勤る上直に敎と成るべし。神佛ともにかくの如し。古人は道德明なるゆゑに、人是を感心して宮寺を建立せしことと相見ゆ。然れば今日にても道德あきらかにして、人を敎へ導き、旦那も此人の敎によりて心も安樂に成り、又生死疑なくならば、其人奉加帳は出さずとも、如何やうの社堂にても建つべし。古今ともに人の心は天の命ずる所なり、何ぞ替りあらんや。又宮寺の奉加と云ふとも、毛筋ほども人欲勝手あらば、此不義の類なり。汝の親方の正き心にて、其不義に與せんや、奉加につかざるにはあらず、只不義に與せざるなり。死後何に生れんと思ふ心、なんぞ有らんや。今日の義を行ひ、明日のことは天命にまかす志と見えたり。孟子曰「夭壽不貳修身以俟」之と。來るも天に任せ、歸るも亦天に任す。此間に

私意を入れんや。當世に異なるにはあらず、當世の人が、法式を越え聖人の敎に異なり。汝の今の親方は、聖人の敎を能く守れる人なり。

曰く、中庸に所謂聖人は素「夷狄」行「夷狄」とあり。又君子は無「所爭」ともあり。然るに、親類一家中と盡く爭ひ逆らふ。これらは如何。

答く、汝經書を見ても一も理を辨へ知ることなし。程子曰く、吾自「十七八」讀「論語」當時已曉「文義」と。書をよむことは我に會得せんが爲なり。聖人夷狄にては夷狄を行ふと宣ふは、夷狄の法を背かずして、而も道に合ふやうにすべしと宣ふことなり。また君子無「所爭」と宣ふは、不義を以て人にあらそはずと宣ふことにて、義を以て他の不義を正すことはあるべし。此故に湯王も義を以て桀を南巢に放ち、武王伐「紂」。是我に義有れば爭ふ所の證なり。汝今の親方は天下の御法にそむかず、義を以て行ふ、ゆゑに背き奢れるの不義に爭ふ。然れども親類より手代の末々に至るまで、一人として肯ふ氣色も見えず。見えざれ共我宗領家のことなれば、本を正し奢を退け約を守て、禮義の本を知らしめんと思ひ、末々までをすてず、世話にせらるゝは神妙の至りなり。其正き人惣領家にあるときは、一家中の寶なり。此味を知らざるは、實に寶の山に入り、手を空うして歸るとは箇樣のことなるべし。夫程の德ある者、

世に露見せざるは如何なることぞや。親類家内の人々はそれを知らざる而已ならず、不義を以て義に勝んと思ふは辟なり。汝は賢徳ある親方の仁愛を知らずして、辟言ふ者に徒黨し親方を誹る。然れ共愚癡よりなす所なれば、親方は心寛くこれをも免し置るゝなり。其心を會得し、これまでの誤を改め、忠義を盡さるべきことなり。數多家來の其中に、左程徳ある親方に與し相くる者なきは、惜い哉哀しい哉。

客退いて後、或人曰く、最前より客との問答を聞くに、汝の言へる所一とほりは相聞え、法式に背くことも有るまじ。然れども、時を知らざる所あり。今日に違うては世間の交なるべからず。世の交をかきては人の道にあらず。大聖孔子も鳥獸には與に群を同うするべからず、吾斯人の徒と與にするにあらずして、誰と與にせんと宣ひ、人たる者の交を絶つことを恨み給ふ。客の言へる先の親方の他借を返さずして死す、夫を果報人にて終れりと言ふは極めて非なり。又今の親方の仕方、假令法には背かずとも、人に替りたる行にて、世の交を絶つ。これは又是に似て非なり。中庸を以て見れば、過不及ありて雙方ともに中らざることなり。二人の行を合せて其中を取りて行はゞ可ならん。然れば木綿布子に生布の帷子高宮羽織は不及なり、忽に今日の交すまず。其すまぬことを尊ぶは如何なることぞや。

答ふ、汝のいへる如く、人倫を絶つこと大なる罪なり、我言ふ所も悉く人倫のみ。汝のいへる鳥獸と群を同すべからずと宣ふ聖人の意は、道の廢れたる世なれども、此人と交て亂れたるを正し、古の道に反さんと宣ふことなり。然るを汝は無道の人を正すこと能はずして、交る而已をよしと思へるは非なり。禮あるを以て人とす、禮なきときは人倫にあらず。食うて愛せざるは豕の交なり、愛して敬せざるは獸の畜なりと孟子宣ふ。是禮にあらざれば交りても交らざるの證とす。木綿布子生布の帷子は、上下の品分れて法に背かず、盡く禮に合へり。譬ば此に君を打れし臣數多あらん。心を合せて敵を伐つは士の道なり。然るに皆皆不同心ならば、大勢には背かれずと言ひて、主君の敵を見遁にし、武士の道を捨てんや。多分に背くと言ふとも、敵を打つは士の道なり。今日の交も斯のごとし。譏る人ありとも、なんぞ上下の禮を亂さんや。喩ば加賀絹は羽二重に似たり、紬は木綿に似たり、よつて聖人の教を聞得たる者は上を恐れ、紬を著て貴賤を分るの禮を貴ぶ。教を聞ざれば加賀絹を著て上を犯し、貴賤尊卑の禮を亂し、思はずして罪人となる。是教を知らざるより致す所なり。教を知る時は、交も不絶して奢をなさず、我を下るゆゑに、人に惡れずして心易く交るなり。又教をしらざる者に財多ければ、身の程を知らず、我をたかぶる故に、世の人これを憎み、表向は

交るといへども、心は常に離るゝなり。子曰、君子泰不レ驕、小人驕不レ泰と。總じて奢る者、貧しき身となるときは恥を知らず、盜をもなすに至る。又身の程を知つて約を守る時は、法に合ふゆゑに安かるべし。孔子又曰、麻冕禮也今也純儉、吾從レ衆拜レ下禮也。今拜乎上泰也、雖レ違レ衆、吾從レ下と、君子の世に處する事の義に害なきことは、世俗に從ても可なり。義に害あることは從ふべからずと宣ふ。奢の害より大なるはなし。又天地の冬に至り枯れ槁れて屈するは、春に至り伸ぶる所の兆なり。聖人の約を本とし奢を退け給ふは、凶年などの時は溜め置ける財寶を國々へ布施さんと思召す、民の爲の儉約なることを知るべし。かくのごとき類を法として、下々も一家の頭たる者は、親類中を我家の如く思ひ、難儀あれば救ふことを我役目と思ふ者ならば、平常儉約を思ふより外に心は有るまじ。儉約と言ふを世に誤て吝きことと思ふは非なり。聖人の約と宣ふは侈を退け法に從ふことなり。客の言へる今の親方の行は皆々法に合へり、聖人の行に合はゞ中庸とも云ふべし。然るを汝は善惡を擇ばず、二人の眞中を執んと言ふ。善惡を擇ばずして中を執るは、一を擧げて百を廢つ。これ時の中を害す、孟子道を賊ふと誹り給ふ子莫が中と云ふはこれなり。客のいへる今の親方の行を細に心を附けて見るべし。一として私の勝手づくをなさず、親類より手代までを親の子を思ふ如くす。聖人民を子のごとくに思召す。政の大小の替りはあれども志は同じ。それを知らずして世に異る人と思へるは、大なる辟ごとなり。世の中の有福なる者、我親類を銘々に引き請けて世話に思はゞ、飢に及ぶほどの者はあるまじきに、反て道ある人を誹りあざけるは哀しきにあらずや。

○或人天地開闢の說を譏るの段

或人問うて曰く、日本紀神代卷に、天地未レ剖、陰陽不レ分渾沌如レ雞子レ溟涬而含レ牙及其清陽者爲レ天重濁者爲レ地、神聖生レ其中レ于レ時天地中、生レ一物一狀如レ葦牙一便化レ爲神一號レ國常立尊一と見えたり。此怪しき說なり。若世に人有りて、天地未闢けざる前に生れ、壽を得ること數百億萬歲にして親しく視、是を後の人に傳へしや。傳なく元來跡形も知れざることなれば、實にこれ奇怪なる說にあらずや。汝は如何心得居られ候や。

答ふ、汝の言へる如く、此說を世に疑ふ人多し。然れども此所は性理に味き者の、窺ひ知るべき所にあらず。然るに是を奇怪の說と言へるは、聖德太子舍人親王よりも、汝が器量はまされりと思はれ候や。

曰く、我等如きが、此旁に及ぶべきことにあらず。然れども天地開闢の說は、奇怪の說なり。答ふ、太子親王は聖德おはしまし、世に賢く渡らせたまひ、書き傳へ我朝の記錄となし給ふは、如何なることぞと心を附くべし。此御旁天地未開渾然たる時有つて、其時にも人有りと思召給ふべきや。今日短才の者にても、簡程のことは知るぞかし。其に心をつけざるは愚昧の者にあらずや。神聖生其中とある其神は、今日に至ても在すや在さざるや。在さずば今は神國とは云はれまじ。在さば何れに在すぞ。其時には見はれ在し、今は隱れ在すかと默して心を盡さば、夜の曉る時節あるべし。汝は自心のくらきことを知らずして、心の明なる親王の筆記し給ふ書を廢せんと思ふは、暗夜に燈火を以て天を窺ふが如し。さて我も前つかたは天地未開闢の說を非として、他を迷はせたることありしに、今に至て見れば、愚なる處より古人を譏り侍りしも悔し。然れども猿賢き者は、十人が九人までは、能肯ふ議論にて、汝が如く言ふ者を、反て知者のやうに思ふものなり。汝も世間の少し學問ある者に言ひ聞さば、是は發明なる見識なりと思ひ、汝を知者のやうに思ふべし。知者と思はるゝ汝の愚は、思ふ者より勝れる愚なり。今言ふ所に心をつけられなば、解る時節もあるべし。扨易の書八卦伏羲より始る。彖の辭は周に至て文王始て繫け給ふ。爻の辭は周公旦に始り、傳は孔子天地人

を交へて釋き給ふ。易は變易にして、今古變らざるものは理なり。理を以つていへば天人一致にして、今日に至り人間畜類まで、銘々繼ぎ來る者は理なり。其繼ぐ者を知り得れば、忽ち疑は晴るゝ者なり。天地未開闢の說、又天は子に闢け、地は丑に闢け、人は寅に生るなどの說も怪しきに似たれども、皆々當る所あり。夫を辭に泥むこと有つては、書は見えざる者なり。易の卦を以て月に配して云ふときは、十月純陰なり。十一月冬至の日、一陽來復するといへども、天地の間に何方を見ればとて、是に一陽來れりとも見えず。初陽は潛みかくるゝゆゑに見えずと言はゞ、正月には三陽生じて、花咲き鳥鳴くといへども、其體は見えず。又乾は龍となし、坤は牝馬となし、陰陽を龍と馬とに喩ふ。是も文字に泥み陰陽は直に龍馬なりと言ふべきや。周公旦の譬は疑はず、親王の譬に、狀葦牙の如しと說き給ふことを疑ふは、如何なることぞ。皆象を假りて義を顯す。其體は微妙の理にして、見るべきにあらず。見えざれば左にあらずと言うて、古人の書を破り捨てんや。天地未開闢の說、又天は子に闢くるの說、是皆天地は自然の次第なることを知らしめん爲なりと知らるべし。我性を知つて萬事の說を見れば、掌を見る如く、昭然として疑なかるべし。今草木の生ひ出づるを見れば、始は種土中に有つて渾じて分れず。それより錐の先の如くに成るは、自然に陽の形にして、皆葦牙の如く

なり。二葉に分るは平にして陰の形なり。二葉の中より心の立ち出づるは、陰より出るの陽なり。其草木梢に至るまで、陰陽々々と生々す。易の上繫辭傳に、天一地二天三地四天五地六天七地八天九地十と說き給ふ。是にて陰陽々々と生成して止まざることを知るべし。天は一、地は二、萬物は三、天地有つて後の萬物なり。人は萬物の靈なるゆゑに、萬物を人に惣合せ、三に生るゆゑに、人は寅に生ずとも言ふべし。又人母の胎內に宿る時は一滴の水なり。是雜の子の如くにして牙を含めり。其中に淸陽なる者、虛にして心となるは、天の開くるなり、重く濁れる者形となるは、地の闢くるなり。頭の形高くなるは葦牙の如しとも云ふべし。かくの如く見ば、天地開闢の理は我一身にも具れり。此を味ひ見ば、天地の始終は古今共に同じ。それを今此上下の天地ひらけ始ること有りと宣ひしことと一概に見なし、又天は子に闢くるの、地は丑に闢くの、人は寅に生るるのと、字面にかゝはり曲に泥むことあつては、書を見るとも不審ばかりいでて、心を解くの樂とは成るまじ。滯りて困しむは、我知の開けざる所なりと知るべし。子思曰、今夫天斯昭々多及其無窮也、日月星辰繫焉萬物覆焉と。此味を見て知るべし。天は廣大なれども、耿々と少しばかり明かなる器の中の天を見て、其高大の天を知るべし。聖人も天地の外を巡り見給ふにはあらず。子曰、殷因於夏禮所損益可知也と。前を推て後を知り、今より推て始を知る。人と生るれば、仁義禮智の性は、古今相續て變らず。是天地に有つては元亨利貞と云ふ。名は替れども、萬物の理は一なり。一物を知り得れば、一物の中に萬物の理はこもれり。然れ共此微妙の理は、容易知るべき所にあらず。一度我に疑晴るゝこと有りて後に味ふべき所なり。然るに今の世の人、文字に泥み色々に作爲するゆゑに、昏々然と闇く、古人の心を知らざるゆゑに、和漢ともに文學他に勝れば、此を德と思ひ、我を伐る者多し。文學に伐る者を喩へて言はゞ、衆人の財寶をたくらべて、彼は劣れり、我は勝れりと伐るに同じ。學者に於ては恥べきこと第一なり。如何となれば財寶もかせぎ設けて吝くすれば溜る者なり。文字も其如く、年を重ねて油斷なく、學べば、他より勝れる者なり。其中に記憶能くして多く記すは、衆人の中に仕合能く富るが如し。又學者も文字を讀むのみにては、聖人の意味、神書の奧深き所知らるべきにあらず。然るに文字を滯りなく讀めば、此外も有るまじと思ふべきが、推量とは雲泥違ふ所なり。或儒者田舍へ通ふ商人と、親類にて互に因せられしに、儒者の曰く、汝も少々は學問せられよかし、如何としても文盲なりと云はれければ、商人の言ふ、我少しも文盲なること候はず、斯の如く絹布に札を附け、何國にて賣るべき心當もなけれども、賣買して父母妻子を

養ひ、家内を治めり、汝が如く文字を效へば文字を讀む、汝我に代りて一日これを勉め見よ、賣買のことは知らずと云はゞ、我に替ることなし。我職分を知れば事は足れり、汝箇程の理を知らずば、夫を學者と云ふべきや。彼儒者も中京にて、近代誰と世に知れし儒者なれども、彼れが理の明なるに及ざれば、答ふべきことなし。文學なけれども、足ることを知る者はかくの如し。況や性理に明なる者、文學に達するならば、聖學の興ること速なるべし。孟子所謂七八月の間旱すれば苗槁れぬ、天油然として雲を作し、沛然として雨を下せば、則苗浡然として興之矣。かくの如く興り起りて聖學天下遍からん。此故に博學豪傑の士、性理明なる者あらんことを幾ふ。汝も一理を明し得るなれば、其時にこそ神聖生=其中=國常立尊と號すと宣ふこと知覺し、天の與ふる樂を得て、實の道に入らるべし。

都鄙問答終

有朋堂文庫普及版
心學道話集　定價㊈金參圓四拾錢
査定番號一ノ九八七番
昭和二十年二月二十日印刷（一萬部）
昭和二十年二月二十五日發行
編輯者　三浦理　塚本哲三
發行者　和多田素介　東京都神田區錦町一ノ七
印刷者　山元正宣　東京都小石川區柳町二四　東京一一〇六
發行所　株式會社有朋堂　東京都神田區錦町一ノ七　會員番號一一〇〇二五
日本出版會承認ら260340
配給元　日本出版配給株式會社　東京都神田區淡路町二ノ九
（本製政頒）

貴族院
158